物ニ御さ候哉、私も誠ニさりこん之事こゐ、左様のとりさゝ承りたる〳〵度ニ心配とも致シ、何とそ〳〵其御地之とりちさも委〳〵くうのゝひ度、何を御様子もそん〳〵上不申、りよふニい為〳〵願上たる〳〵、めて度り〳〵く、

なを〳〵、時ゐふ御せつりく〳〵御いとゐあそハ〳〵候やうこそん〳〵上たる〳〵、くれ〳〵もよろ〳〵く御都合も願上たる〳〵、大いそさまゝ申上恐入たる〳〵、めて度り〳〵く、

御もう様　　敬子

さそ御申上

〔将軍徳川家定夫人敬子附〕老女幾島書翰〔○安政雑集所載〕

○二月二十八日近衛家宛

上　　御不祥

極々御内用大急御直覧、御披露、

二月廿八日

乍恐大急まて極々御内用、御側迄申上奉候様仰付ゐ〳〵ニ付申上奉候、兩御地まて御揃被遊御機嫌よく被爲成候御事、乍恐御めて度有難り奉たる〳〵、猶

其御所様益御機嫌能成らさゐ〳〵御事、御めて度思召上ゐ〳〵、左様ニ御座候得ハ、去ル廿六日出、六日切まて御便り御仕出させ被遊候節、極御内々仰被進候御願の御一條、實ハ

敬子ノ密書ハ自己ノ考ニテ發セシニ非ズ

（將軍夫人敬子）御臺様極御自分様計の思召ゐニて、仰上ゐ〳〵御事まてハ不被爲在、御内實ハ歌印ゐ極内願まて、夫も

上ニハ少〳〵も御存ゐ不被爲在候得共、自分ニ風評を段々承り候ニ付、も〳〵や右様之御事とも被爲在候てゑ、誠ニ御大事之御事ニ付、　御臺様へ分て願奉候間、とふそ極思召ゐの所まて、京都へ御願被遊候様、ゑ〳〵て自分ゐ願奉候御事ハ、御他言不被爲在候様ニと被申上候事まて御座候、夫故御よん所無仰進ゐ〳〵御事まて、且又右様、同人ゐハ被申上候へとも、中〳〵壹ゑやう考んまて、右様の御事願ゑれ候事ハ考〳〵て御さ無候事、定め〳〵万里印ハもち為ん、

上ニも仰合させゐ〳〵御事とハ思召させゐ〳〵へとも、先々どこ迄も、歌印自分一ゑやう考んの様に申上ゐ〳〵よ〳〵に御さ候、左候て、其節ニ被申上候ニも、（島津斉彬）薩摩守殿おそゐも、京都に極内願とも被致候様成御事共御座候てハ、考〳〵て御宜〳〵らはゑ候ニ付、又是へもを〳〵御便りとも被遊候節ニハ、是まゝ能々御沙さ被爲在候様ニと申上ゐ〳〵、左候所、昨廿七日、其御地ゐ大箱着まて、　御書御いさゝき被遊候所、則極御内書御拜見被遊候て、實ニ御驚被遊候御事ニて、御心配被遊候、御内實ハ

御臺様之思召ハ、先達薩摩守殿ゟも天下の御爲い細被申上候事ニ付、能御承知ゟこて、
ゟ〳〵て〳〵此度の御願も、實の思召ゟこてハ不被爲在候御事ニ付、御願被遊候もいゟゝや
と、誠ニ色々御考も被遊、私へも極御内々御談〳〵も被遊候ニ付、先々何分ニも急ニ一應ハ
仰上られ不申候てハ相濟不申候御事ニ付、仰被進候様申上奉、夫故仰上ゟて御事ニて御座
候間、一寸極内私ゟ申上奉候、書取ニも荒ま〳〵申上奉候通り、何ま御返書歌印之御伺ませ
被遊候御事ニ付、とふそ〳〵其思召ゟこて、薩摩守殿ゟおそ御内願等の御事被遊被進候て
ハ、誠ニ御大事の御事ゆへ、このゝらほ〳〵御沙さの不被爲在候様、且又御文面も、其思召ゟ
よて、　上に御覽ニ被爲成候ても御宜〳〵き様ニ被遊被進度願奉候様仰付ゟて、此由御直に
仰上ゟて筈おゝら、御節句前と申、且又、万端諸方ニて心付居候時節まさ、とんとゟさんも
成不申候ニ付、こゝさゟ又々六日切さへも出され不申候様成事故、よん所無薩州へ賴候て、
今日又此よ〳〵大急まさ仕出〳〵候様仰付ゟて、乍恐私ゟ申上奉ゟ〳〵、何分〳〵宜〳〵く
御ゟん考御願被遊候、誠ニ御大事の御時節、實ニ恐入奉候、こゝさこてハ奥向一統、何もま
けゟらほこ　御養君事をさらひ、跡先の考も何も御さ無事おゝら、色々深く組分伺奉候へ
ゟ、とふそ天下の御爲の御事ハ願奉度と、恐なゝら存上奉候、何も〳〵此よ〳〵迄大急まて夜
分認、大亂書御ゟこゝり兼被遊候半おゝら、何も宜〳〵く御内覽願奉候、万々年めて度ゟ〳〵く、

島津齊彬ノ内願ハ宜シカラズ

奥向一同ハ養君ヲ好マズ

返〳〵く〳〵宜〳〵く願奉候様仰付ゟて、めて度ゟ〳〵く、

幕府、目付岩瀨忠震（肥後守）ニ勝手掛ヲ命ジ、日記掛・醫學館掛・學問吟味取扱及濱邸見廻ヲ兼ネシム。

〔安政年錄〕○内閣記錄課所藏本

二月廿六日、

御勝手懸リ

右於新部屋前溜、（松平忠固、老中）伊賀守申渡之、（藤堂新統、若年寄）但馬守侍座、

御目付
岩瀨肥（忠震）後守
名代駒井左（朝温、目付）京

御日記懸リ
醫學館掛リ
學問吟味取扱
濱御用屋敷見廻リ

右於同所、酒井（忠毗、若年寄）右京亮申渡之、

同人

〔松平忠固日記〕○子爵藤澤榮一所藏本

二月廿六日、

一廻り出懸松溜に列坐、大目付・御目付に月番ゟ例月之尋有之、夫より廻り詰衆伺御機嫌相

安政五年二月二十六日

濟、月番ゟ外席有之、外ゟ引、々懸自分計新部屋前溜ニ出坐、但馬守侍坐、

岩瀬肥後守
名代 駒井左京

岩瀬肥後守事、御勝手御取締懸可相勤候、

右、自分申渡之、

東海道ノ十宿人馬及渡船賃錢割增ヲ令ス

幕府、東海道平塚・白須賀・岡崎・池鯉鮒・鳴海・庄野・龜山・水口・石部・草津・桑名十宿ノ人馬及渡船賃錢ノ割增期限ノ五ヶ年延期ヲ令ス。

〔老中達〕○侯爵池田仲博所藏本公儀御觸留所載

○二月二十六日大目付へ

脇坂中務大輔殿御渡、○公儀御觸留（安宅老中）

二月廿六日、○中略、東海道人馬賃錢割增、○温恭院殿御實紀

大目付ニ

東海道平塚宿外拾ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢并渡船賃共、割增左之通可請取旨申渡、

東海道

平塚宿　白須賀宿
岡崎宿　知鯉鮒宿
鳴海宿　庄野宿
龜山宿　水口宿
石部宿　草津宿

東海道

桑名宿

去ル丑三月ゟ當午二月迄、中五ヶ年之間、人馬賃錢并渡船賃共、都合五割增申付置候処、猶亦當午三月ゟ來ル亥二月迄、中五ヶ年之間、是迄之通五割增、

去ル丑三月ゟ當午二月迄、中五ヶ年之間、人馬賃錢都合五割增申付置候処、猶亦當午三月ゟ來ル亥二月迄、中五ヶ年之間、是迄之通五割增、

右割增錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々へ可被相觸候、

安政五年二月二十六日

午二月

〔大目付回達〕○公儀御觸留所載

○二月二十七日福井藩等江戸留守居へ

二月廿七日、大御目付中ゟ之御廻狀、阿州樣衆ゟ到來ニ付、津山樣衆ゟ致順達候、

脇坂中務大輔殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯順達、留より田村伊豫守（顯影、大目付）（上二載ク）

方に可被相返候、以上、

二月廿七日　　大目付

松平越前守殿（慶永、福井藩主）

松平阿波守殿（蜂須賀齊裕、徳島藩主）

松平薩摩守殿（島津齊彬、鹿兒島藩主）

松平三河守殿（慶倫、津山藩主）

松平相模守殿（池田慶德、鳥取藩主）

松平兵部大輔殿（慶憲、明石藩主）

右留守居

〔萩野山中藩御用所日記〕○子爵大久保教尙所藏本

二月廿九日、晴、○中略、

脇坂中務大輔樣御渡御書付ゟ、

東海道平塚宿外拾ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢幷渡船賃共割增之事、

但、右御書付ゟ、御目付に達不申候、

〔神宮御用留〕○小田七大夫手記　神宮文庫所藏本

三月五日、

一御役所相務宗左衞門、

○中略、東海道割增御達之事、

一右、神宮廻文之事、

幕府、江戸ノ米價騰貴ニ依リ、融通調節ヲ令ス。

〔老中達〕○侯爵池田仲博所藏本　公儀御觸留所載

○二月二十六日大目付へ

久世大和守殿御渡貳通、○公儀御觸留

二月廿六日、○中略、米穀之御觸二、○溫恭院殿御實紀

二月廿七日、久世大和守御渡候御書付寫二通、○高崎藩書附類

二月廿七日、大和守殿御渡、○高麗雜記

江戸ノ米價騰貴ニヨリ融通調節ヲ令ス

大目付に

此節江戸表米價高直之趣相聞候間、米穀融通之ゐめ追ゐ及沙汰候迄、去年違作之場所或ハ運送不便利之土地ハ格別、左も無之分ハ、諸家中扶持米丈ケハ銘々領分知行所より相廻し、江戸表ニゐ買入候儀ハ可成丈勘辨致し取計、尤扶持米餘分ニ相廻し市中に相拂候儀ハ不苦候、

右之通、万石以上以下共、領分・知行所有之面々に、不洩様可被相觸候、

二月

右之通可被相觸候、

大目付に

此節江戸表米價高直ニ相成、末々及難儀候趣ニ相聞候、米穀融通之ゐめニ候間、於在々米穀所持致し候者ハ、早々江戸表に相廻し賣捌候様可致候、

右之通、御料・私領・寺社領に、不洩様可被相觸候、

二月

右之通可被相觸候、

（溫恭院殿御實紀　高麗環雜記　高崎藩書附類　御城書拔書拾遺　萩野山中藩御用所日記）

〔大目付回達〕（公儀御觸留所戴）

○二月二十七日福井藩等江戸留守居へ

二月廿七日、大御目付中ゟ之御廻狀阿州様衆ゟ到來ニ付、津山様衆ゟ致順達候、

久世大和守（廣周、老中）殿御渡候（上三戴ス）御書付寫貳通○中略、相達候間、被得其意、無遲滯順達、留より田村伊豫守（顯影、大目付）方に可被相返候、以上、

二月廿七日

松平越前守（慶永、福井藩主）殿
松平阿波守（鍋須賀齊裕、德島藩主）殿
松平薩摩守（島津齊彬、鹿兒島藩主）殿
松平三河守（慶倫、津山藩主）殿
松平相模守（池田慶德、鳥取藩主）殿
松平兵部大輔（慶憲、明石藩主）殿

右留守居

大目付

〔萩野山中藩御用所日記〕（子爵大久保家所藏本）

二月廿九日、晴、

安政五年二月二十六日

一久世大和守様御渡御書付（上ニ載ス）寫二通、〇中略、御廻狀こゐ御到來之由、御用部屋ゟ爲見候、例之通御目付に相達、

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕〇公爵徳川圀順所藏本御城書拔書拾遺所載

〇二月同藩士太田誠左衛門宛

以手紙啓上仕候、久世大和守殿ゟ常阿彌を以、御城附共に一紙こゐ相渡候御書付（上ニ載ス）貳通、則差出申候、以上、

二月

太田誠左衛門様　　横山甚左衛門

〔土山武宗日記〕〇宮内省圖書寮所藏本

三月二日、

一此節江戸表米價高直ニ付融通之儀觸書（上ニ載スル老中達ヲ指ス）貳通、〇中略、御附衆達有之、

〔神宮御用留〕〇小田七大夫手記神宮文庫所藏本

三月五日、

一御役所相務宗左衛門、

江戸表へ米穀所持之者ゟ相廻し候様、御達之事、

米穀融通ノ觸書ニ就テ

一右、神宮廻文之事、

〔在府小倉藩家老小宮四郎左衛門書翰〕〇伯爵小笠原長幹所藏本江戸案文所載

〇三月六日在國同役宛

此度從

公義御用廻狀を以被　仰出候米穀運送之義ニ付、御留守居ゟ内々其筋に承り合候處、當時米價高直ニゐ下々難澁之趣ニ付、運送便利之國々何ゟも家中扶持米差廻し、可成丈江戸表ニゐ買入候義可致勘辨段、御觸面ニゟ候得共、此節圍米致ゟのも有之、米穀拂底之處ゟ益米續相增候趣ニ付、此度御觸御含之御趣意ゟ、各圍居候米穀御引出し相成候御手心よも可有之旡ニ付、是非御差廻しニ不相成候ゐも可然ゟ之御意味合之段承り合御留守居申出候、然ル處、當表家中渡候扶持之義ゟ、兼ゐ買込、用達之米屋ニ預置、入用次第取寄候趣、色々取計候得ゟ、此砌新規ニ買込候譯も不相當差支候儀ゟ無之候付、此節御差廻しニ不相成候ゐも可然樣奉存候、乍去右御觸面ニ付ゐゟ、必定米續運動可致候付、御手元御繰合之機會萬端御手心も可有之義ゟ存候付、先得御意置候、右ニ付御用廻狀寫之通差進申候間、御覽之上宜御取計可被成候、以上、

三月六日

四郎（小宮、家老）左衛門

三　人　様

尚以、前條之趣、早速可申進候處、
公邊御手元承り合義殊之外手間取漸相分り候付、委細自筆を以可申進筈之處、此節格別御
用多ニ付、其義無之御座候、以上、

〔福岡藩江戸留守居書翰〕（○侯爵黒田長成所藏本　江戸御用狀所載）

○三月在國家老宛

大御目付衆ゟ、先月廿七日、以御廻狀御書付寫○中略、來、一通ゟ、江戸表米價高直之趣相聞候
付、諸家中扶持米丈ヶ相廻し、江戸表ニ買入候儀ゟ勘辨可致、尤扶持米餘分ニ相廻し、市
中ニ相拂候儀ゟ不苦旨、一通ゟ、於在々米所持致し候もの ゟ、早々江戸表ニ相廻賣捌候樣
○中略、等、夫々委曲申來候、則寫差上之候、

〔桂宮日記〕（○宮内省圖書寮所藏本）

四月六日、辛亥、天陰、○中略、

從月番傳奏廣橋前大納言殿觸書到來、注于左、（加点之後、中番使以、及返却、）

口上覺

（上ニ載スル老中達ヲ指ス）

別紙、○中略、武邊よりも申來候、此段可申入旨被申付候、以上、

四月五日

追ゟ御覽後御返可被成候、以上、

桂御所

諸大夫御衆中

廣橋前大納言家

雜　掌

彦根藩主井伊直弼（掃部頭）家士長野主膳（義言）ヲ京都ニ遣ハシ、老中堀田正睦（備中守○）
佐倉藩主上京中ノ形勢ヲ偵察セシム。是日、直弼、書ヲ主膳ニ與ヘ、和歌山藩主
徳川慶福（參議）ヲ以テ、大將軍繼嗣ト爲スコトニ周旋セシム。

〔彦根藩主井伊直弼直書〕（○子爵澤蘆一所藏本　井伊家秘書集錄所載）

關白ヘノ入説成功ヲ喜ブ

○二月二十六日彦根藩士長野主膳宛

心外ナル風

再三度之密書相達候、一々返事ニ不及候、彌無事ニ在京一段ニ候、扨此度上京其詮有リ
テ關白殿御大悦、生々書狀と被仰何の御内談御叮嚀之義共ニ有之由、厚御禮取計可申候、
尤、初と交易地を初中々六ヶ敷候處、遂ニ關東へ御任セニも相成可申御模樣、重疊之御
義、是全ク先生ゞ精忠拔群之骨折故之事、我等迄も御稱シニ預り候と面目不過之候、此
上精々都合能取計之上歸府可然候、六之丞（宇津木）より申越候通り、當地ニゟ心外ゟ風聞相立、

用心第一

京都守護ノ件

繼嗣問題

諸家より間者追々上京も致候由、當家よりも歌讀壹人參候由、甚不似合抔と申唱へ、探索方も此頃出候趣、石谷氏よりも内々爲知ニ付、他家之義も(はカ)不知、於我等打拂ニ尻押可申謂と更ニ無之、右と堀田初兼ゐ之申立ニゐ承知も有之筈之義、全ク天下之御爲メ、次ニ堀田ゞ爲、關白殿之御爲を存込候ゐ之事、いつかと相分可申、我等ニハ格別心配も不致候得共、心得之爲メニ申越候、乍去成丈と相慎用心第一ニ候間、　關白殿へも右之次第有体ニ申上、精々事立不申様、穩便之取計事成就之上歸府可然存候事、

一其地ニおゐて守護壹條ニ付惡說相立候由、誠ニ案外之次第ニ候、然ル處先生之働ニゐ先ツ右も相分り、御内向等も事延ニ相成候趣、不一通心配骨折ニ候、察ル處、兼々守護を望候諸侯も追々有之趣ニゐ、薩州・藤堂・土州抔之義も是迄承り及候事、此義堀田へも申試候處、外様ニゐ守護ハ決ゐ不相成事ニ付、如何様ニ申立有之候ゐも不苦と申居候得共、當世ハ何事も油斷成不申、尙又守護類役出來候ゐも相成不申、甚心配ものニ候、八幡・大津御預り所之義ハ尤之義、但シ平日出張增人數之義ハ、永々取續キ候處ヲ慮り專要之義、兎ニ角ニ都合能キ様臨機之働賴入候、右一條ニ付ゐも、先達ゐより、禁裏へ御親ミ厚ク相成居候と大成今日之强ミ、是以先生之功と歡ひ申候、

一養之字誠ニ御大事之義ニ候、其方よりも申越熟見いたし候處、考之通り何方ニ相成候ゐも六ツケ敷、其上薩州より廻り御臺様御賴ミと申事、京地へハ充分手廻り有之様子、當地ニゐと右邊之咄と一向承り不申候、扨右一條ニ付ゐと、四五年來人まらず我等大心配ニゐ、堀田へも毎々申込候次第、同所ニも隨分心配有之處、何分手延ニ相成、今日ニ及び別ゐ六ツケ敷、是迄ニ是非御取極メ申立候へと宜敷處、後悔之趣ニ付、夫故先年より嚴敷御談し申候事ニ有之抔申候ゐも、夫者過ゐ不歸事、今日ニ及び候ゐと、アメリカ一儀ニ事を寄、大名又ハ御役人ニも養之字申出、詰り一印(一橋慶喜)を見込居候趣、堀田發足前ニも密談も有之候間、我等見込之處段々討論ニ及候事ニ候、

繼嗣ハ紀州家以外ニナシ

下ヨリ上ヲ選ムハ唐風

二月廿六日

別紙

秘密入り組候儀、察讀、猶不審ハ早々可申越候、

一我等見込と申ハ、兼々咄置候通り、赤坂(德川慶福、和歌山藩主)より外ニハ致方も無之、此節柄ニ付明君を立可申と、下より上を撰ミ候ハ、全く唐風と申者、況ヤ我身之爲ニ勝手ケ間敷、御撰出可申譯曾て無之事、不忠之至りニ候、右ハ堀田ニも初より同意之儀、然ル處今時小石川(水戸藩)之一黨、御役人ニも歷々之者之人氣集り候節ニハ、是又失望致シ、人氣散し候ても一大事如何有

上意慶喜ノ繼嗣ヲ欲セズ

之哉と、堀田申聞候間、我等申候こと、明君を撰出候からハ、直ニ御代ニ不致ゐと其詮も無き事、是眼前之儀、然ル時ハ乍恐公方様ニハ大御所様と申譯ニ相成可申、右様之義出來候てハ、累代御厚恩之者共、彼を失望候より人氣立可申、是ハ誠ニ目前之儀より御大事ニ無之哉と申候處、堀田ニも至極尤之義、何れニも下より上を撰ミ候と申事、何國迄も道ならぬ事、兎角ニ此頃之人氣合、又御續抦ハケ様々々と申事言上之、御英斷を伺ひ候より外ハ無之、其上思召候處何國迄も貫通いたし候様、心配致候より外ハ無之、未タ老中一同厚談も無之、近日是非相談之上、言上ニ可及と申事ニ付、未タ老中一同相談無之与申がおくれ候次第、早々相談可然と申居候、其後、堀田思切りて老中一同相談ニ及、證人之爲御用御取次をも席へ加へ、堀田發語相談有之候處、内心ハ如何ニも表向之處何れも堀田同意、其内ニも伊賀守（松平忠固、老中）ハ全く之同意ニ有之、二老之事ニ付大ニ强ミこゐ、正月十六日御前ニゐ、御養君ハ不遠取極ニ相成可然段言上ニ及候處、上意ニハ此儀兼ゐ深く心配致居可申出とも存候處、今日迄其義ニ不及、右ハ彼是申立候者共有之候とも、一橋ニゐて決ゐ不相成儀、御先々代様御續も近く、紀伊家と兼ゐ御心ニ御取極被置候由、誠ニ御速成　上意、老中共も感伏仕、至極御尤ニ思召、御内意之段奉畏候趣、御請申上候と申事、其節伊賀ニハ別ゐ難有思召之段言上も致候と申事、右之御手續キ委敷儀者、夏目

繼嗣ハ堀田歸府後決定セン

松平慶永慶喜擁立ニ斡旋ス

左近將監（信明、側衆、用取次）より内々承り、兼々萬事深キ思召被爲在候義ニハ伺居候得共、右御一言ハ實ニ難有次第ニ候、尤前文通り我等ニも如何之上意可有之も難計、其段御案思申上、堀田ニも道行何とゝの申上置度と迄申候へとも、其儀ニも不及、思召通り被仰出候御様子、實ニ難有事ニ候、右御一言ニゐ老中ニて決斷ニ及、一向右一條ハ當時談合も無之、堀田歸府之上と申事ニ相成候由、猶又、土岐丹波守（頼旨、目付）・鵜殿民部少輔（長鋭、目付）正月八日頃　御前へ被召出、アメリカ之一儀御直ニ御尋之砌、右兩人御養君之儀御進メ申上候由、御目代とハ申せど事抦ニも依候處、彼等之身分として御直ニ右御大事ヲ、己の勝手ニ宜敷様御進メ申上候と申すハ、以テ之外成事と風聞も有之、右之人物如何ニも右様之儀申出候も難計、如何哉と存居候處、此節御側衆之内ニゐ、右兩人御前へ出候節、自然右邊之儀申上不申哉之段相伺候處、　上意ニ如何ニもアメリカ之事濟て、養子之儀申聞候得共、聊も取合不申との御沙汰之由、誰とても氣ニ不入事ゐと申せバ、先ハ默止難キものニ候處、御心ニ御納メ被遊、御伺申上候迄ハ御沙汰も無之と申も、中々世上ニゐ恐多き事申上候様成譯ニゐて決ゐ無之、感服仕候儀ニ御座候、何とゐく右兩人ニも思召ニ不叶と申事ひゞき候事哉、元來輕卒人之事ニ付、氣味惡敷思ひ居候と申咄も有之候、猶又、越前（松平慶永）ニて是非々々一印ニ致度と種々骨折、田安殿（慶頼）抔へも申込毎々之催促ニゐ、御困りと申風聞も有之候、土岐・

上意ニ從フハ臣下トシテ當然

關白ヘノ入説ヲ希望ス

鵜殿、越前へ同意、老公(徳川齊昭)之誤り證文出候も、此邊ニゐ取扱候と申事、色々謀計も有之様子ニ付、油斷ハ成間敷、堀田ニも何卒早々歸府無之ゐて、萬一留守之虚ニ乘じ如何様之儀出來も難計、歸府を而已待居申候、右荒増之處極秘密を申遣候、右様上之御英斷御据り被爲在候儀、元來本筋之御事ニも有之、たとへ越前如何様ニ申立、薩州又ハ御臺様之御賴たりとも、上之思召通りニ取計可申ハ、臣下之當然之儀、堀田とても同様之見識ハ兼ゐる承り居候次第、伊賀守も右之上意を殊之外難有心得、感服致居候様子ニ候故、御子細ハ此上有間敷事之様ニ我等ニハ存候、尤此御一條ハ、我等へ御尋ニゐも有之節ハ御答方一大事と申事、是ハ上御決心之上ニゐ御尋ニ候へて、彼是ハ無之、其上道理ニ於てハ御尋可有も難計候へ共、今日之模様ニゐハ我等一人へ御尋と申儀ハ決ゐ無之、御尋とあり候へハ同席一同之儀ニ相違無之、先ハ夫迄ニて及申間敷と存候、右等之儀心中ニ相含ミ、程能關白殿へ御答ニ及様致度、然シ此一條を餘り々々御膝元之義、洩れ申間敷事柄ニ付、萬一聊ニても他へ洩れ候てハ相成不申、關白殿へも其段堅く御心得被下候様、事少あるも申上可然と存候、

一當地此節相替る儀も無之、堀田留守中老中退出も早く相成、先々御手透と申事ニ候、然ル處、去ル廿日京都より飛脚著ニ付、廿一日又々退出遲レ候由、未タ子細相分り不申、堀田よりハ何事も申不參、川路(聖謨)・岩瀨(忠震)抔より同役へ之文通と申事ニ候、何ゟ京都ハ思ふ様ニも不參、甚心配と申事、歸府も何頃ニ相成可申哉、不見通シ之段申越候由、猶又アメリカ使節大病之處、此節全快ニ付、又々出府致度と申候由、何れ堀田歸候迄ゑ、下田ニ居候様ニと諭ニ相成候由ニ候へ共、兎角江戸へ出待居申度と申、何の疑惑も致候由ニ付、來月節句過ニも出府相成可申哉ニも風聞致候、右之御用ニ付退出遲ク候歟ニも申候、扨川路左衞門儀ハ姦惡之者ニ候處、追々不宜儀も相分り、近々左遷ニも相成可申風聞、當人耳ニも入候様子ニて、彌御不爲を取計候由、此度抔も如何之隱謀企候も難計、右様當人覺悟致候位之者も、矢張其儘便ンゝと御使ひ被成候儀ハ、實ニ不覺成御處置と存候事、一此一兩日風聞ニ鷹司殿急病と申事、又ハ横死抔とも申候、如何之儀ニ候哉、老人之事ニ付、定ゐ病氣俄ニ發シ候事抔と遠察致候、一時尋申入候、外ニも申遣度義も有之候へとも、指掛り存出シ不申、何れ書殘候儀ハ又々申遣可申候、早々以上、

堀田ノ歸府延引

川路聖謨ノ惡評

太閤横死ノ噂

二月廿六日認メ、

桃之(長野主膳)　屋　大　人

左九(井伊直弼、彦根藩士ニ在リ)　良　田

〔長野主膳京都報告書〕(井伊家秘書集錄所載)

○三月一日頃彦根藩主井伊直弼へ

安政五年二月二十六日

堀田へ仰出サレノ御趣意書寫

堀田備中守に被　仰出之御趣意書寫

今度之一條、不容易、奉　神宮始御代々に被爲對候ゐ爰、可有如何哉、深被惱
睿慮候、到此期候ゐ者、人心之居合、國家之重事ニ候間、三家以下諸大名之赤心被
聞食度思召候、今一應被下
台命、各所存書取被入
叡覽候樣御取計有之旨可申入樣、關白殿太閤殿被命候事、

別段尋問箇條返答寫

別段尋問ヶ條返答寫

一應接假條約之趣、無餘儀次第ニテ開港候とも、舊冬十二月廿四日(三)、被　仰進候通、畿內及
皇居近國被相除候樣ニト　思召候間、攝州兵庫被除候樣ニハ相成間敷哉之趣、
右ハ、應接筆記中ニモ、粗認御座候通リ、往復辨論ヲ盡シ、可相成丈取縮メ、爲致談判候
得共、諸外國人共、素々京・大坂・江戸ノ大都會深ク見込、眼目ニ致シ願立候儀ニテ、古來
泉州堺江外國人渡來交易仕、京地ニ南蠻寺等有之類、盡ク傳聞仕居、何分承引不仕候得
共、種々手段ヲ盡シ、追々談判之上、京師十里四方之地ヘハ、亞墨利加人不立入筈、聢ト
取極メ、其代リ兵庫ヲ開キ、且山城國之方角、尼ヶ崎領內猪名川ヲ限リ不立越候樣、漸々
承伏仕候儀ニ付、唯今兵庫相除候樣申談シ方モ無御座候、右之場合迄押付候儀ハ、容易
之事ニ無之段ハ、深ク御恕察有之度候事、
一當時　皇居寔以御手薄之儀、御不安心被　思食候間、畿內幷近國之內、　皇居四方等可
然大祿之大名堅固ニ警衛出來候樣ニ被遊度
思召候トノ趣、
右ハ、兵庫開港ニ相成候得ハ、猶更之儀、當時關東ニテ、專御取調、
睿慮ヲ安シ奉リ候御存意ニ御座候、猶御沙汰之趣モ有之、別而厚ク評議仕、夫々取計可
申心得ニ御座候事、
一開數港建商館候儀、當時之處、尤制法モ御行屆之御事候、往々無饜之夷情追々相募、終ニ
ハ反亂ニ及ヒ候儀無之哉、見込之處可申上趣、
右ハ、方今之時勢、和親之廉ヲ以、御取扱無之候而ハ、速ニ海外諸國江怨ヲ結ヒ、各國ヲ
敵ニ引請、戰爭ヲ釀シ候義ニ付、大凡各國承伏可仕程之御振合ニ御指置被成置、和親交
易ヲ以、富强之基ヲ御立被成候外無之、尤條約之義ハ、双方無事ヲ謀リ候爲之義ニ御座
候間、條理ナキ仕向さへ無之候得ハ、擾亂ヲ生シ候儀萬々無之筈ニ御座候得共、後來ニ
到リ、如何樣之間違ヲ生シ、其國ト爭論可相生哉、意外之變事ハ、豫メ何トモ難申上候得

共、後來萬々一之變事ヲ見越シ、唯今條約ヲ相拒ミ候得ハ、各國差湊、目前擾亂ヲ生シ候義ハ、差見エ居候義ニ付、右等之義無之方ニ御取扱御座候而、追々弊ヲ生シ不申樣、武備教化ヲ盛ニ押立、自然信服仕候樣御世話有之候外有之間敷奉存候事、

九條關白井伊家ニヨリ幕閣ノ態度ヲ知ラント欲ス

別段御尋問幷答書、被仰出書、

右二通ハ、昨廿七日（二月二十七日）殿下（九條尙忠）之御自筆ニゐ下り候、右二通之內被　仰出書之方ハ、今度堀田樣御持歸りニ相成候樣ニとの　御趣意之由ニ御座候處、當地も御手拔難被成ニ付、別段御使者、一兩日之內ニハ關東へ出立之樣子ニ被聞候ニ付、右之書將軍家へ慥ニ通達候哉、又ハ於途中老中之手元ニ留り勝手之返事ニ可及哉、主人手元ニゐ早々聞糺シ被下候樣可申遣、尤　將軍之內間ヲ探り候譯ニゐハ無之、役人共之私有無ヲ考、以後心得方之筋ニ被遊度、實ハ是迄役人共之私多く、御趣意も　將軍家迄直達不相成廉も有之哉之趣ニ相聞候ニ付、此段彥根樣ニ內々御願被進候との御事ニ御座候、右ハ不容易御事ニて、御老中へ露顯候ゐハ、御大事と奉存候ニ付、御斷可申上旡と存候へとも、ケ樣之事ニ至迄御家へ御尋等之事有之候義ハ、全く　公邊之御爲ニゐ自然此已後とても、外樣衆抔へ右樣之御內沙汰有之樣相成候ゐハ、御大事と存、然ラハ直樣拙者持下可申と申上候へ共、左樣ニてハ兩善全クハ不相成候間、一日も急ニ可申遣との御沙汰ニ御座候、此上ハ將軍家へ通達仕候樣子ニ御座候ト計申上候ハヽ、可然義と奉存候間、途中より拙者計ひ候ても可然義ニ御座候ハヽ、急便ニ一寸御沙汰奉蒙度奉存候、

帝都近國警固ノコト

一別ケ條御尋問御答書之內、

第二條御警固ニ付、大祿大名へと被仰候事、實以不容易義ニ御座候間、飽迄も拙者逗留仕、詰りを付候ゐ歸府仕度奉存候へとも、中々容易ニハ其場ニも至申間敷、餘り長逗留相成候ニ付、御內間ハ十分ニ申上置候ゐ、近々一度歸府可仕候、

一此度堀田樣ニも餘り御氣之毒之次第有之、且、御守護向ニ付被仰出之御趣意を御汲取方ニよりてハ、御家之御迷惑ニも可相成、其上若州樣

堀田反對派ノ行動ヲ內申ス

御所內之御手入方行屆候ニ付、諸事御大事之場と相考候ニ付、不容易ケ條之內、　公儀ヲ背候方之工之事、堀田樣之御身ニかゝるヘキ一大事計を內々申上試候處、甚御悅ニて御內々御目錄三百疋被下候ニ付、達ゐ御斷申上候へとも無據頂戴仕、翌日直ニ右たけの菓子を獻上仕置候、先々是ニゐ　御家へ御迷惑等之筋ハ御座有間敷、猶又、右邊ニゐ已後御守護向之義ニ付ゐ、御相談被爲在候ニも御都合宜敷候ハヽ、於拙者難有仕合ニ可奉存候、其邊之心得ハ無油斷不申上して、堀田樣之御心得方ニ有之樣取計、至極都合宜敷

相成候間、御安心可被下置候、

右之次第ニ付、去廿四日出ニ奉申上候密書之内、表向密書と認置候分一通、十七日御荷物便ニゐ廿九日頃江戸表に着之體ニ被爲遊、尤、拙者より京地ニゐ堀田様へ申上候事ハ、一向御存無之様被爲遊候ゐ、直様右上書、御手元より、御内々堀田様之御手元へ、虚實承知候へとも、不容易義と存候間、贈申上候様ニと被仰進候ゐ、贈候ゐハ如何可有御座候哉、此段同役方六之丞へも被仰付、急ニ御賢考奉願候、

午三月在京中　　長野主膳

上

○長野主膳入京スルヤ、嫌疑ヲ避ケンガタメ、特ニ彦根・京都間ヲ往來シ、老中堀田正睦ノ退京ニ先ダチ、三月四日京都ヲ發シ、十八日歸府セリ。次ニ、主膳ト彦根藩士宇津木六之丞、九條家家臣島田左近トノ間ニ贈答セル書信ヲ掲ゲ、其ノ在京中ノ行動ヲ知ルノ資ト爲ス。

〔彦根藩士長野主膳書翰〕○井伊家秘書集錄所載

○二月十六日同藩士宇津木六之丞宛

以手紙得御意候、先以

京都出發彦根ヲ經テ歸府スベシ

彦根藩京都守護ノコト

君公益御機嫌能被爲遊御座、恐悦至極御同意奉存候、　貴館彌御安泰被成御勤候條奉壽候、次ニ小生無異儀滞留罷在候間、乍憚御安意可被下候、抑小子上方ニて存外長逗留ニ相成、申上様も無之次第恐入候得とも、先便も申上候通、何分蒔繪今少々之處十分ニ出來不申、右ゑ讃岐守様ニて後々迄も御持用可相成様仕度、尚又西陣織物之義も、磯崎又右衛門より毎々相談有之候ニ付、同人義拙者方へ同宿爲致吟味仕居候、漸々件之品出來上り相成候ニ付、御人形共ニ明十七日御荷物便ニ指出し申候、拙者ハ明後十八日當地出立仕、彦根表ニて、彼の佐倉御家老之家筋之義、今一段取調へ候上、早々下向仕度奉存候、少々遲ク可相成候得とも、宜敷御取成奉願候、猶又別紙一通存付候義、密々申上候間御良考奉願候、尤、他見ハ堅ク可憚事ニ御座候、以上、

二月十六日　　長野主膳

うつ木六之丞様

一上著後世間之風説甚敷御座候得共、先便も申上候通り、紛々たる事而已ニて、取留候儀も無御座候處、其後御内々向ニて御家御守護向等之事、不得其意風聞有之候ニ付、大ニ驚種々心配仕御内間相考候處、果て大變之義出來仕居候、子細者去年十一月十六日參著ニて、水老公より近々役人共爲

齊昭鷹司太閤ニ書ヲ贈ル

叡慮伺上京可致候間、打拂と御決定被仰出候樣仕度、左なくゐハ天下治り不申との事、大閤へ申上ニ相成居樣子ニ御座候得共、右ハ常之御氣風之事ニて、佐倉侯御登り之上ハ、御別條も有御座間敷と存居候處、其御深意段々相伺候處、右打拂ニ不決テハ天下治り不申との事ハ、實ニ天下之爲思召て之事ニも無御座、全く一橋殿ヲ西城へ御定被成度下心ニて、一橋さへ將軍ニ御直り候ハヽ、天下も治平可相成、第一

齊昭ハ慶喜ヲ將軍繼嗣タラシメントス

朝庭ニも御安心之場ニ相成、御守護之義も御自分御登り候て、御安心相成候樣可仕樣之御文言も有之趣、其後十二月二日ニ申上ニ相成候處ニてハ、夷船之事よりも、第一ニ一橋ヲ西城へ御定相成候樣、以

齊昭勅書降下運動ノ噂

勅書被　仰出度旨申上ニ相成、其節唐畫三幅對と金百兩之御進物之由、尚又正月中旬頃御臺樣（敬子）之思召之由ニて、西國方（薩摩藩ヲ指ス）之大名より直書ヲ以左府公（近衛忠熙）へ御願ニ相成、　大閤御含ニて左府公と傳奏之内御壹人と御腹を合せ、　左府公より右西國大名之書翰を

主上へ御上ケニ相成、何分右

勅命下り不申ゐハ御爲不相成との事、右ニも色々意味深次第柄も有之、　殿下へも内々申上ケニ相成候由承之、ケ程之御隱謀有之事とハ存外之事共ニて、拙者愚存ニてハ、今度佐倉侯御上京之折柄、右樣之勅命等下り候ゐは、たとひ佐倉侯ニも一橋之方可然思召

天下ノ安危堀田ノ答申ニヨリ決ス

候共、ケ樣ニ相成候てハ、御主職之甲斐も無之、其上西國之外樣衆等御荷擔ニて、　帝都御守護向等之事迄御申上之事も不得其意、第一公邊ヲ輕しめ、御役方ヲ無用之者ニ被成候御所行言語道斷、惡敷申さハ隱謀之躰不容易御儀ニ付、佐倉侯之御答より、天下之安危茲可定程之義、御答振ニより佐倉侯之御身之上ニ御障等出來候樣ニゐと、第一國家之御爲ニ不相成、且御同侯ニも不一方、

九條關白ノ痛心

君公とも御別懇之御間柄ニて、同侯之御上京御大事ニ思召次第ヲも奉伺居候事故、江戸表迄申上度奉存候得共、其日間無之、又拙者も是迄同侯之御家中御近習ニ知音之人も有之候ハヽ、内々申上度存候得共、無其義、押て申上候ハヽ、却て亂心同樣ニ可思召、夫も天下之爲ニて候へハ、拙者一分之義ハ不苦候へ共、　君公之御名ヲ出候事恐入候ニ付、心中ニ相任不申、何分當今左樣之御沙汰無之樣ニと、色々手ヲ盡し候へ共、實以殿下家御存無之樣子ニ付、左候ゐハ彌横道ニ可申出のと、大ニ心痛仕居候處、去月下旬、又兩公より段々御催促之趣ニ付、御内々殿下へ御相談被爲在候處、殿下も御驚ニゐ篤と相考候間、何方より何事申上候共、尚亦申上候迄ハ、其儘ニ御前ニ御指置相成候樣ニと御申上ケニゐ、其後深御配慮之趣ニ御内々伺候、扨其頃拙者より、右樣之勅命出候ゐは大變と申居事共、内々被爲聞候哉、此間何方よりともなく議奏之手ヲ經候

九條關白ニ意見ヲ開陳ス

繼嗣問題ニ就キ勅書降下ノコトナカルベシ

て、拙者へ内問ケ間敷相見へ、關東にて西丸相續之儀ハ如何成風聞ニ候やとの事ニ付、是も定て殿下御内心之御方々より御廻し候事と存候間、右ハ色々ゟ申候得共、皆々自分勝手之引方にて候間、正路之事ハ拙者共存不申義と申拔ケ候處、彌深御尋之次第、全々この御隱謀之覺有之義共ニ付、右ハ大將軍家と御老中衆之思召ニより候て子細無之、其他にて申事ハ惣て御取上ケニ可相成筋とハ存不申と手强ク答候處、幸ニ其儀上へ迄も相聞候樣子にて、先只今之處にてハ、此度被仰出候樣ニも相聞へ不申、扨愚察仕候處、西國大名之内直書指上候方へ御返答一段之場と相見申候、是以如何相成候事哉存不申候へとも、先々是迄ニ手ヲ盡し候事、實ハ被仰付候義にても無之、風与承り候ニ付、平日御別懇之佐倉侯之爲ニと存、是迄心配ハ仕候得共、併何も私事之計ひ仕段も幾重ニも奉恐入候へとも、先々此分にてハ、此度佐倉侯御在京中、表向御發覺と申義ハ有之間敷候へとも、遲速而已何レ相發し不申てハ止申間敷、扨々意外之事共ニ御座候、右ニ付、色々愚考仕候義、容易ニ君公之御耳ニ入候ゟと、其儘ニも難被遊、左ゟと急變も難計、大事之御事ニ候間、篤と御良考之上、可然御取計可被下候、以上、

井伊ノ耳ニ入ラバ急變起ラン

〔長野主膳書翰〕○井伊家秘書集錄所載

繼嗣問題ニ就キ關白井伊ニ意見ヲ訊ス

長野ヨリ井伊ノ意見ヲ上申

○二月宇津木六之丞宛

以手紙申上候、追々暖氣相成申候、

君上益御機嫌能被爲遊御座、恐悅至極奉存候、貴館彌御安泰被成御勤候條奉壽候、次ニ小生無異儀罷在候間、乍憚御安意可被下候、然ゟ十五日出宿繼之御狀拜見仕、右御返事旁前以認置候上書共、廿日夜彦根表より差上候事ニ付、最早御覽御承知被下候事と奉存候、其夕京都より御飛脚到著ニ付、直翌廿一日より上京仕候處、廿二日夕方殿下より御使ニゟ被仰候ニて、

西丸御相續之事、既ニ以

勅命御定メ有之候歟、左無ゟ水府・薩州等へ御聞濟有無之御返事無之ゟハ不相成場ニ至候ニ付、彦根樣御相談、且、彦根思召之處御聞被遊度以御使可被仰進筈ニ候へとも、幸ヒ義言上京之事故大行不相聞樣、當人より江戸表へ申遣し、在留中ニ慥成御返事有之樣、取計可申旨被仰出候、扨拙者存意にてハ右不容易御義、右等之條江戸表より御直ニ被仰進候ゟ、万一思召通り不相成時ゟ、御家之御威勢無之樣

殿下始可思召、又其儀自然露顯等之節ゟ、御家之御大事ニ可相成義ニ付、色々工風仕、主人存意通りハ拙者兼ゟ伺承知仕居候間、拙者より御答可申上旨申上、先々江戸表へ御直

帝都守護ノコト

堀田對朝廷ノ形勢漸次惡化ス

之御掛合ゝ無之樣仕候、其趣意ハ御直ニ申上候間御伺可被下候、扨右樣之義、折々俄ニ出來候間、拙者ゝ京地ニ居不申ゝ、皆々御直掛合ニ可相成、左候ゝ品ニより御迷惑筋も可有之ゝ深く心痛仕候へとも、併御心外之御風聞等御請被遊候段も不容易奉恐入候義ニ付、何分一日も早く歸府仕度、色々心配仕候事ニ御座候、

一御守護向之事今一段之處ニゝ御座候へとも、何ト歟工風仕堀田矣御歸府之上ニゝ、都合能御相談可相成道行さへ付候ハヽ、何分捨置候ゝも出立可仕と奉存候へとも、右ヲ其儘ニ仕、隱謀之御方々之意ニ任せゝ、實ニ國家之大事此處ニ御座候、

一堀田樣ニも始メゝ甚御都合宜敷、申上振ニよりてハ關東御任ニ可相成御治定之處迄、御內々ヨリ伺、安悅仕居候處、御間ニ合候御役人御召連之故歟、本能寺ニテ五度之御對話之內、折々堂上御氣障之事共出來、就中夷人ニ通信之事實ハ、武器不備候ニ付、當分其儘穩便之御取扱抔ゝ申樣之事申上ニ相成、第一大將軍家ニテ武器不備との事被　聞召、御不安心ニ思召候處より色々之事も有之、其中ニて京家御役人より書狀等出候ハヽ、內々取調度抔小量之謀計等及露顯、甚御人氣ニ障り候廉不少、扨々御氣之毒恐入候義ニ御座候儀、以今　殿下ニゝ、堀田矣より御逢ヲ被願候ハヽ、何時ニゝも御對面被遊、御直之御話も可被遊思召ニ候處、無其儀、未九日之後一度も　御對談ゝ無御座候、是全堀田矣、輕

堀田ノ失敗ハ部下ニ依賴セシニヨル

堀田以外何人ガ其衝ニ當ルモ失敗セン

キ御役方正道不辨人々之利口ヲ御憑被成候處より、右樣之御失ゝ出來候事ト奉存候、唯今之處ニテゝ、

殿下ニ爰堂上方御一統之存意も有之處、漸々關東御任と申處迄、御治定相成候位ニ御働御座候へ共、何分關東方右樣之振合、堂上之御人氣も治ゟ兼候ニ付、彌此通ニて候へハ、猶於關東も篤と御勘考有之候樣との御沙汰之外、致方ハ有之間敷、昨日御內評今日御治定之御樣子ニ御座候、扨、堀田矣御登ニて自然右樣之振合ニ相成候ゝハ、此上何人ヲ以御治定可相成共不奉存、乍去御氣合不相成候樣之事有之候ゝ、京ニゝ御腰押も多く有之樣子ニ付、實以國家之安危此處と恐入心痛仕候、右ニ付ゝも御家抔へ御疑惑等生し候ゝ、彌以關東之御大事ニ候間、何分精々早々歸府も仕度、猶又、前件御大事之御時節ニ付、別封密書堀田矣ニ懸御目、此上ゝ諸事御相談被遊、御添心被仰進候ハヽ、國家之御爲無此上御事と奉存候處より、別紙其意ヲ含認置候間、篤と御良考可被下候、

密書ヲ堀田ノ覽ニ供フベシ

〔長野主膳書翰〕（井伊家秘書集錄所載）

○二月宇津木六之丞宛

以手紙得貴意候、然ゝ廿日夜立、彥根表より宿繼飛脚ニて申上候通り、廿日夕方京都より御飛脚着ニ付、廿一日立ニて廿二日京着早々申上候處、夕刻御使へ可被仰出候ニゝ、

繼嗣問題ニ關シ主上ニ御催促

西丸一件之事、大閤と左府公と
主上へ御催促ニて、只今彼兩公と夷船之事よりも、取頻り薩州直書之御返事を急ぎ申上候
ニ付、毎々右返事可仕旨被命候、右と全く兩公之所行故ニと候へ共、併
殿下ニも、聊御私之思召ゟ無之候間、實ニ一橋之方國家之爲ニ可相成ゟ、直ニ
勅命之御沙汰可然旨取計可申候へ共、倩考へ候處諸人所望之人ニて候ハヽ、右迄内密之計
略ハ有之間敷、其上水戸と自分之子ヲ以賢明之人と申、荷擔人と内間と申ニても無之、今
少々不審ニ思召候處も有之候ニ付、關東内間之樣子も御聞被遊度思召候へ共、たとへ御近
親さり共、國家之爲惣て御私之計ひハ不被遊、彥根ハ表ニて申さハ、關東内間之人ニて、且
ゟ　帝都之守護をも可致家也、内間ニゐ申さは、當家累代之間柄ニ付、此度彥根ニ御尋、且、
御相談被遊候、抑、西丸之主御定メ之義、
勅命ヲ以御差圖有之候てハ可然哉、否之事、諸大名之心得方等、彥根存意之旨被仰越度、御
直便ヲ以可被仰進候へとも、幸ひ義言發京之事故、大行ニ不相成樣同人より伺ひ候て、在
留中ニ御返事有之樣取計可申との御沙汰ニ御座候、

齊昭ノ慶喜ヲ推スニ就キ不審ノ點アリ

右ニ付、義言御答、
右被仰出之御趣意奉畏候、早々江戸表主人方へ申入、御返事候ハヽ可申上候、併今より江

井伊ニ代リ長野主膳ヨリ意見言上

繼嗣問題ニ關スル井伊ノ意見

戸表へ飛脚相立候共、御返事有之候迄ゟ余程之日數も掛可申、且、拙者も追て申上、急々下
向仕度譯柄も御座候得共、此一件と　天下之大事ヲ思召候處より、御懇命之次第ニ付、拙
者一分ハいつ迄も逗留仕候ても宜方御座候得共、其内ニと御老中も歸府可相成、尚又、此
義ニ付てハ主人存意之旨ハ、兼て承知と仕居候間、乍恐拙者より御答奉申上候、兼て主人
之思召承り候處ニてと、元來紀水いつ方ニて爰御人之好嫌と更ニ無御座、又薩州申上候如
く、當時之御事一ツニゐ爰御年長之御方と申も理之當然ニと御座候得共、併世間之樣子相
考被申候處、夫々存意之旨相違之廉も可有之候へとも、終ニ野心を指挾異存申張候大名も
無之、治平打續候事と、全く大將軍家之御威德ニテ、第一
東照宮之御恩澤、天下ニ溢レ候故ニテ御座候、然と天下之治平と、
大將軍家之御威德ニ有之事ニテ、賢愚ニ而已有之儀ニテハ無御座、是實ニ
皇國之風儀ニシテ、外國と異る處ニ候、然ルよ今御血脈近き御方をおきて、發明之方ニと
申候ハヽ、外國流ニして正統ヲ可尊信
皇國之風儀ニと無之事ニ御座候間、主人ニと何國迄も御血脈近き御方ニ、天下之人望ハ可
有之と被思召候、此一條ヲ以主人之無私所存と御賢察奉願度、其餘と可申上よしも無御座
候、尤、　大將軍家ハ武家一統之棟梁ニテ御座候へと、　大將軍家之威德と天下治平之根

天下ノ治平ハ將軍家ノ威德ニアリ賢愚ニヨルニ非ズ

繼嗣ハ血脈近キ者ヲ可トス

外様大名ノ荷擔ニテ西丸相續ノ内願ハ不可

元ニ御座候間、私意ヲ以可論義トハ不奉存候、

尙又拙者共之愚存ニ仕候ゐも、如　台命大將軍之思召ニ可有之義ニて、御相談之筋も候ハヽ、御内間之大名ヲ以可被申上候、然ルニ外様之國持衆之荷擔ニテ、西丸御相續之内願ハ、第一不得其意事共ニ御座候、ヶ様之義を御取持被遊、万一相違之筋も出來候節ハ、國亂之基本是より早さハ有之間敷奉存候、

右申上候條、趣意相違之義も御座候ハヽ、主人より早々可被申上候、其邊之事ニテ候ハヽ、此御返事ハ義言歸府之上迄、御猶豫奉願度候、

右之通申上候處、尤之義ニ候間、猶爲念、早々江戸表へ申遣候ゐ、別義無之候ハヽ、返事ハ義言歸府之上ニテ可然旨被仰出候間、猶此上可相成ハ、別段御返事ニ及不申樣ニ迄仕罷歸度義と奉存候、以上、

〔長野主膳書翰〕（井伊家秘書集錄所載）

堀田ト兩役トノ對話

○二月二十五日宇津木六之丞宛

昨夜彦根へ之飛脚便ニ、庵原（助右衛門、家老）より宿繼ニゐ指上被下候樣、御願書狀差出候跡へ、使參候ニ付、龍章（島田）同道外樣へ參候處、御内々被仰越候條々、廿二日兩傳、久我大納言・萬里小路・德大寺ノ議奏三人、本能寺へ御越ニゐ、堀田矢と御對話之次第ハ、先日申入候通、只今聢と

更ニ諸侯ノ意見ヲ徵シ御沙汰アルベシ

勅定被仰出候事も難相成と之御沙汰ニゐ候處、猶、叡慮之旨　勅答奉伺度旨達ゐ被申上候得共、此度　勅定ニゐ被仰出候ゐハヽ、二度取返しと出來不申、勿論貸地交易之事御聞濟相成候ゐ、實以國家之爲ニ候ハヽ、如何ニも右之勅命も可被仰出候得共、諸大名之中（中ニもカ）と異存之人々も有之趣ニ相聞居候間、右樣一致無之事ヲ容易ニ被命候てハ、國家之爲ニ不相成、第一叡慮之旨ヲ徒ニ致候ゐと不相成義ニ付、彌勅命之沙汰被相願候義ニ候ハヽ、今一應諸大名内外私等無之所存ヲ被聞召、其上ニゐ御沙汰可相成候間、篤ち勘考候樣との御事ニゐ御座候處、堀田矢ニも甚御困却之故歟、傳奏之中ニ壹人掛りニゐ、大閤へ御入魂被成度思召之條々及露顯、扨々大變ニ相成申候、今一兩日之處ニゐ進退可極程之處ニ至、勿論大閤答ハ、此上

堀田陪從小吏共ノ所爲

主上ニも更ニ御用ハ無之、東坊城家ハ何時傳奏御取上も難計程之場ニ至り、尙又、朝議之御模樣ニゐと、此上ハ堀田一分不相立候場ニ及候とも、不及是非次第と御決定之場ニ至申候處、

殿下ニて、始メ拙者上京之節、堀田ハ別儀無之、私意ヲ以計ひ候人体ニゐ去無之ト申上候一條ヲ思召被出、全ク附添之小役人共之所爲ニゐと無之哉と、御氣之毒ニ被思召候處より、

難被仰出事こゝ候へ共、此次第龍章之心得ヲ以、義言へ申聞候様との御沙汰ニ付、何分指當候事ニて御座候得共、今明日之間御猶豫奉願上度旨申上、尚又内々思召之趣も有之義ニ付、何卒堀田様　殿下へ御對面被相願、何事も御打明ケ御對話候ハヽ、御都合宜敷可相成と奉存候へとも、右之次第ヲ堀田様へ申上候手續無之、彼御近習たりとも容易ニ詞をかけ候ゝ、自然淺野・川路等へ相聞へ候ゝと、却ゝ一大事ニ御座候間、精々御内間を治る外無之と奉存候、今日兩傳奏ヲ御招待相成候間、何事ニこの存不申候へとも、自然廿二日殿下・大閤よりとして下り候

勅答ヲ返上抔と申候ハヽ、彌堀田矣ヲハ御見捨ニ可相成ハ必定ニ御座候得共、御一分不相立處迄も可及候、左候ハヽ彌水老公之思召へ近寄可申、左候ゝと彼御一統之爲ニ、公邊之御安危ニも可拘と恐入候義ニ御座候間、自然堀田矣之御一命ニもかゝわり候場ヲ見込候ハヽ、無是非國家之爲、拙者一分ヲ打捨候ゝも、爲御知申度候へとも、是又主人有之身として、身ヲ自らの物ニ仕候振合ニ相聞候ゝと、後聞も恥敷候へハ、何と歟此上工風仕、品ニより何方へも障無之様之計方も候ハヽ、堀田矣へ之爲ニ、爲御知申上度義と奉存候、其節ハ本文表密書ニ認置候通り、京都へ

堀田ニ朝議ノ内情ヲ告ゲント欲ス

彌千代様之御用ニゝ罷登り居候處、此沙汰承り候ニ付申上候との振ニ可申上候間、左様御承知可被下候、

二月廿五日

長野主膳江戸着

音物ヲ謝ス

〔長野主膳書翰案〕〇井伊家秘書集錄所載

〇三月二十一日九條家家臣島田左近宛

追々暖和之時候相成申候、先以御揃彌御安泰之條奉賀候、次ニ小生四日御地夕立ニ相成、六日朝歸藩、八日彦根出立、道中指急候得共、大井川出水ニて逗留仕、併無滯（三月十八日）一昨々日著府仕候間、乍憚御安意可被下候、抑御地逗留中段々御懇情被成下、殊更出立之砌ハ主人方へ御菓子被進御贈早速披露仕候處、毎々厚　思召之段難有思召候、其節拙者へ迄不存寄拜領物冥加ニ餘り候仕合難有奉存候、貴君かも御品々頂戴毎々難有奉存候、乍憚淺田ゟ・岩崎ゟへも、宜敷御傳聲奉願候、

九條尚忠ノ書ヲ井伊直弼ニ呈ス

御書一通被仰付候通、道中大切ニ守護仕、慥ニ披露仕候處、何レ御受ハ跡かゝ可申上旨被仰候間、此段宜敷御取成置可被下候、

一被仰付一條六日付ニて主人方かゝ、拙者宛ニゝ御書付出候由ニ付、途中行違ひニハ相成候得共、此節御入手拜見被成下候事と存候處、彦根表かゝ直様此方へ返し越、昨日著仕候、扨々不都合之次第ニゝ延引相成恐入候、歸府即刻　君前ニゝ段々厚き　台命之條々委敷

台命ニ就キ老中評議アリ

幕閣ノ内情ヲ密報スベシ

堀田正睦ノ書翰

井伊ヨリ堀田ヘノ書翰

申上候處、追々書取こても承り、不一方難有奉存居候處、尚又筆紙こも難盡　御懇命ヲ蒙り候事、冥加こ叶ひ候事と實こ難有、期ヲ以テ　思召こハ可奉報と而已被仰候、

一當地様子伺候處、先日之　台命ハ御老中評議相成候由、伊賀守殿々直こ御聞取相成居候、右御老中評議相成候事、御當席之方々へ、内々たりとも御咄し相成候事ハ、　將軍家へ申上こ相成候事こ定り候由、仰こ候、

一關東々御答之趣ハ何共不相分由、御奥役之人々こ内々御聞取候事ハ、其儘主人御自筆こる拙者迄被申越候こ付、其儘御目こ掛候間、必他へ不洩様申上候迄ハ無之候へ共、宜敷奉願候、内々思召ヲ伺候處こてハ、右様之御答振こるハ、彌長引可申哉と御心配之趣こ御座候、

一先日京地出立前、備中守殿々參候自翰ハ、其先被申遣候事之返事こて、文中何事も無之、拙子彼役人こ出合候事等ハ更こ無之候、其外備州殿御心配之趣こも不聞申、只々長逗留こ相成御迷惑之趣、併悪敷方こモ無之、不遠落著こ可相成、拜顔萬々可申述と様こ被申越候、右ハ御内間之様子實こ御存無之歟、又ハ被隱候事歟と推察仕候、思召之如く手續を被求候等之様子ハ一向相見へ不申候、

右こ付、今度又々主人々御返事として御直翰被遣、其御文中こハ、當時朝廷之御爲、國家ヲ思召候事も厚々、實こ御爲こも相成候御方ハ、　御當職御一人こる、其他ハ三公たりとも、實こ國家之爲ヲ思召候方ハ有間敷、然ル處輕き御役人共、自分輕薄之趣意相立不申候處より、却る御當職之思召をハ忘却、彼薄情之諸公ヲ以テ憑こ存候様相成候ハ、一大事たるへき趣こ、夫とおく被仰遣候間、右こるハ、拙子京地こる申上候處之次第も、御さとりこ相成哉と奉存候、扨々　國家之御爲と存、椽之下の力持ヲ計致候ても、ナマリの錐こる通りこるね、あまり申せは却るあらぬ方こうたかれ、世の中之有様ハケ様成ものかと、初る驚申候、何も不取敢　御書慥こ主人へ指上候事と、件之御返事と申上度、餘ハ追々可申上候、京都へ之御返事振も伺度奉存候、恐々頓首、

殿中大亂筆之、

三月廿一日　　長野主膳

島田左近様

〔宇津木六之丞書翰〕（井伊家秘書集錄所載）

○二月十五日長野主膳宛

以書付得御意候、然ル堀田様京都より當地へ被仰越候ハ、御家（井伊家）・仙臺様・因州様其餘こも、此度堀田様御上京こ付、江戸表より京地へ御家來被指出候由、上方へ打拂之御沙汰こ相成

長野ノ上京ニ就キ井伊家嫌疑ヲ受ク

候ハヽ可然とて、腰押被成候様子ニ相聞候間、急ニ探索致候様被仰越候由、石谷様より内々被仰上候、素より右様之思召ニハ更ニ無之、國家之御爲深く御心慮被遊候處より、貴様御指登しニ相成候事ニ付、如何様御疑惑生し候ゑも、聊御厭ひ被遊候譯ニハ無之候得共、俗ニ申痛くもあさ腹被探候様之事ニ相成候ゑと、御心外之御義ニ付、九條様初、今度御登り後御内談被成候方々にも、前文之譯抔密々御咄し被成、尚其御地之模様御心得ニ相成候御義ハ、急便を以爲知被吳候様御談し置候ゑ、貴様ニハ御内々之乍儀、御書物ニゑも御求之御用ニ御登り被成候振合ニ御取計、早々御引取被成候方可然思召候間、此段急便ヲ以得御意候様被仰付候間、左様御承知可被成候、以上、

宇津木六之丞

二月十五日

長野主膳様

〔宇津木六之丞書翰〕（井伊家秘書集錄所戰）

○二月十七日長野主膳宛

速ニ歸府スベシ

御京著後、二月八日御指立之御札相達申候、貴地御心配之次第夫々承知、則御紙面を以御上へも申上御承知、内膳殿（二浦家老）へも委細申上置候、扨々御痛心奉遠察候、何分爲御國御丹精奉祈候、扨貴様御登りニ付、案外之風評生し、御心外千萬成事ニ候得共、表立御申解被遊候事ゑ難相成事ニ付、兎角惡說御受不被遊候様被遊候思召ニ付、一昨十五日、三日半町飛脚ヲ以、別紙之通得御意候様被仰付候ニ付、もとや御承知之事とハ存候得とも、萬々一、右書狀延著致候ゑと大切之事ニ付、寫爲念御廻し申候、猶篤と承候得ゑ、堀田様より被仰越候事ニハ無之、矢張江戸地にて風說有之處より、探索方被仰付候て急速京地へ御役方出立致候趣ニ御座候間、其御地ニゑ御入魂被成候先々にても、右之意味篤と合點爲致、後難無之様、吳々御取計肝要之義と奉存候ニ付ゑハ、堀田様御下り前後、貴様にも御下り被成ゑハ御滯留彌以御疑惑生し可申間、此方より今一應被仰越候迄ハ、彦根表ニ御滯留、實以彦根へ之御用向にて御登り被成候姿ニ、一藩にゑも心得候様、御系譜之義にゑも取頻り御調被成候歟、何と歟御工夫被成、吳々も後難無之様、御良考可被下候、以上、

彦根ニ暫ク滯留スベシ

宇津木六之丞

二月十七日

長野主膳様

猶々、今以春寒退兼候、折角御厭專一ニ奉存候、兩度之御札正ニ相屆候旨、御留守居へ御傳へ、拙子より別段返事遣し不申旨も、御斷置被下候様奉願候、以上、

〔宇津木六之丞書翰〕（井伊家秘書集錄所戰）

○二月十七日長野主膳宛

別紙得御意候、此度御上京ニ付テハ、

殿下ニも殊之外御満悦ニゐ、三人五尺之御直書被進候ゐ爰、猶御應對ハ難相成候處、貴様御差登しニ付、生たる御書翰被進候次第迚、御機嫌之次第御承知被遊、

御方様御實意も相顯れ、御満足ニ思召候、御守護一條ニ付ゐハ不容易御心配之義有之、種々御丹精ニゐ假成御安心之場迄御仕寄被成候由、右等ハ御案外之義ニ御座候處、程能御取計ニゐ御満悦被遊候、堀田様ニも五日晝時無御滞御上著、九日御參　内太閤・議奏衆二人・傳奏二人御列座、關白殿と堀田矦御對話之筈ニ相成、御對話之始終、

勅問　勅答之次第、幷關東ニ被仰出候之譯柄等、此度貴様御上京之印ニ委細御書取、御贈りニ可相成間、長逗留迷惑ニハ可有之候得共、右壹條片付候迄、御滞留被成候様、段々御念頃之御沙汰之旨、夫々御承知、全貴様御忠精より、御上之御厚情御忠勤之次第貫通致、不一方殿下ニも被爲思召候義と御大慶被遊候、右様之折柄ニ付、猶京都之御滞留何角之御用向、篤と御取調之上、御歸府被成候(経脱カ)被遊度思召候得とも、本文得御意候通惡說有之、殊ニ若州よりも御役人登り候由、右去堀割一條之意趣も有之事ニ付、如何様之惡計可有之も難計、川路左衞門尉殿抔ゝ油斷難相成人物、自然關東より御登り之御役方、御存意通りニ相成不申節ニハ、全

堀田ノ一件落着迄滞留スベシ

川路ハ油斷ノナラヌ人物

歸府ノ遲速ヨリ後難ノ防止ヲ考慮スベシ

御家之腰押抔と、御心外之御迷惑掛り申間敷物ニも無之ニ付、今一應被仰越候迄ハ、彦根御滞留被成候様ニと、本文ニゝ相認候義ニ御座候、併貴地之御模様ニより、堀田矦御歸府之頃合も、いつニ成候哉難相分との模様ニ候ハヽ、却ゐ早々御歸府被成候方、他より疑念も掛り不申譯ニ可相成哉とも思召候間、御歸府之遲速より後難之防き方、篤と御考宜御取計被成候様被仰出候間、本文ニ今一應御沙汰御座候迄、彦根ニ御滞留と申義ゝ御取消と御心得可被下候、　殿下ニも格別之思召ニ候處、俄ニ御引取被成候ゐ者、思召如何可有之も難計ニ付、本文之譯柄密々言上、御氣障りニ相成不申様、御取計被成候様ニと思召候、當地之模様ゝ、本文之次第ニ付、油斷相成不申事ニ候得共、又貴地之模様も有之事ニ付、兎ニ角兩地之御都合御考量之上、宜御取計被成下候様被仰出候、彌貴地御引取ニ相成候ハヽ、猶、殿下始に、夫々深く御入魂、貴地之御模様追々被仰進候様之御都合、第一御守護之一條等、飽迄御配慮之上、御引取被下候様仕度、此段尚得御意候様被仰付如斯ニ御座候、以上、

二月十七日　　宇津木六之丞

長野主膳様

〔宇津木六之丞書翰〕（井伊家秘書集錄所覆）

○二月廿七日長野主膳宛

去十四日同廿日付兩度之御書付致拜見候、

春寒退兼候處、先以

御上益御機嫌能被爲遊御座、就中昨廿六日曉、御男子様御誕生被爲遊御座、御繁榮恐悦

不過之、御同前ニ難有奉存候、然ル京地之御様子、江戸表之御模様与事ニ寄り、貸地交易

等之義決ゐ不相成、堀田矦決定無之候ハヽ、

直弼ノ誠意貫通

將軍家へ直ニ被仰達候与申所迄之御事ニ候處、

御上思召之所、　殿下御貫通詰ル處、　關東へ御任セニ御治定之旨、御内々慥ニ御伺ひ

帝都守護ノ件

御安悦之由、尤、此度之御一條も御三家之内ニゐ、御連名同様之上書も有之、天下之御大

事ニ可相成所、手安〳〵右之場合ニ相成候事、全

御上之御忠義、一天ニ通し候御高德と難有被思召候由、併堀田矦始誰も不存事ニゐ、無

此上御陰德天下へ之御奉公と相成候段、委細被仰下候御紙面、再三拜誦不覺感涙仕、扨

々難有御同意奉恐悦候、

一御守護一條ニ付ゐも、御案外之事共ニて、深く御配慮被成候由、御他家ニゐ御守護被仰

付候様之義御座候ゐて、

神祖以來　御代々様之御掟も相立不申義ニゐ、飽迄右邊之被仰出て無之御義とハ奉存

候得共、既ニ相州御固被爲蒙　仰候様之大ひ成間違も有之、一旦被仰出候上ニハ容易ニ

御取戻しニ相成不申、危き御場合ニ御座候處、段々御働ニゐ九分九厘御安心之由被仰下、

扨々難有、右様之御心配可有之とハ、露程も心付無之處、御紙面拜見、實ニ汗背仕候へ共、

先々御安心之趣承知難有次第、吳々も危き事、右等ニ御危難御逃れニ相成候事ハ、全ク

御上之御精忠貫通ゐたし候故之御義ニハ候得共、一ツニハ貴様御忠魂と乍憚感伏仕候、

此上增御人數御差出し之義、如何ニも

增人數差遣ノコト

帝都之御爲ニ相成候御義ニ候得ハ、少しも御厭ひて無之候得とも、平日多人數差出し被

置候よりて、期ニ臨急發多人數被差出候方、京地之人氣も落著、出張之御人數勇氣鋭く、

天晴御實備、左も無之、平日如何程多人數京地ニ被差置候ゐも、自然之節加勢之人數無

之ゐハ、虛飾と相成可申与歎息仕候義ニ御座候、併、右様申候得て、失費を厭ひ言葉を工

ニ申成し候様相聞候てハ、口惜き次第ニ奉存候、御如才て無之義ニ候得とも御指含御取

扱奉願候、先年大坂へ異船渡來之節も、御手際よく御人數被指出、其後も急發之義ニ付

ゐハ、段々御手當御行屆ニ付、聊御差閊筋ハ無之候得とも、八幡邊・大津近在御預り地ニ

相成候得て、自然之節、人夫遣ひ方等ニハ至極之御都合と奉存候、

一去十五日出之紙面御披見、貴様御上京ニ付案外之風說相立候次第、夫々御承知被成候由

用向ヲ終リ歸府スベシ

ニ付ハ、早速御歸府可被成之處、前條之次第、且、西城之一件も有之、　殿下より御密旨も被爲在候付、暫く御滯留、猶又、御上京被成候次第拵委細被仰下、御尤ニ承知仕候、則被仰下候御紙面入御覽候處、御忠勤之程ハ被仰出候迄も無之、其御地之模樣御承知も無之事ニ付、御歸府之儀被仰遣候所、其儘御滯留御用向御勤被成候御決斷、是ト申も御忠魂より出候と御感賞、御取扱向御行屆之義迚、一段之御首尾ニ候間、御安心可被成候、其後宿繼御飛脚を以、御歸府之遲速ハ御考量之上、宜御取計被成候樣可申進旨被仰出候ニ付、右紙面もとや相屆き、御安心可成とハ被爲思召候へとも、爲念今一應申進候樣被仰出候、素より御精忠ニる貴樣御上京被仰付候事ニ付、如何程惡說有之迚、聊御厭可被遊筋ニハ無之候得共、可成丈ハ御用心專一との思召ニる、御歸府被成候樣被仰出候事ニ候へ共、追々被仰候通り一大事之御場合之事ニ分付、貴地之御用向十ニ御取調へ程合御考、御歸府被成候樣被仰出候、此段御報得御意候、以上、

二月廿七日

長野主膳樣　　宇津木六之丞

〔島田左近書翰〕○井伊家秘書集錄所藏

○三月十八日長野主膳宛

勅裁案ニ對シ廷臣異議アリ

態々以飛札致啓上候、先以

大守君益御安泰被爲遊御座奉恐悅候、當御方御惣容無御別條被成御座候間、左ニ御承引可被下候、二ニ貴君彌御安康可被成御勤務珍重奉賀候、扨早春長途御內使被成御勤御苦勞之御事、實ニ　殿下こそ御悅喜不淺御滿足ニ被思召、厚御挨拶可申入旨被仰付候、付てハ、御歸府後關東表內外之御模樣、猶又、委敷承知仕度內外共否御密旨共被仰越可被下候、又々御歸府後當地之樣子左ニ申入候、

一當三月十一日、如別紙御返答ニ可相成、

宮中御評決濟ニ相成、先々御相方御安心之場ニも可相成と存居候處、俄ニ十二日ニ相成

(鷹司政通)太皷殿發頭ニる、大ニ模樣變りニ相成、決る此度之事御沙汰止ニ被仰出可然抔被申出、其外粟田宮・左府殿・內府殿、皆々鷹印之强意ニ隨從被致候大變事ニ相成、是迄之評決とハ皆々裏をかゝ迄、此上如何樣之變事出來も難計、加之十二日夜堂上現任一組、其以下都合三組ニ相成、〆百五人當殿へ被參、此度之一義是非御赦許ニ不相成候樣と之衆意被申上、其外十三日、非藏人六十人、是も夜分參殿、一同歎願同意之次第、夜分旁以一寸騷動之事ニ御座候、其外此頃ニるも追々存意書付日々被差上、實ニ此末如何可成行事ニ御座候哉、事儀御安心之場ニハ一寸モ不相成、官武之混亂ニ可相成哉、何も御賢慮可被下

東坊城聰長傳奏辭退
都筑峰重變死

川路聖謨青蓮院宮ニ謁ス

諸藩ノ老臣上京

候、

一當九日、東坊城殿と取違、德大寺殿之退出之節、其輿ニ向ヒ大亂雜之義出來、既ニ駕より引ズリ出し、双傷ニモ可相成程之大變出來、實ニ大變萬代未聞之珍事ニ御座候、依ゐ傳奏御役可被召上程之義ニ付、所勞と相稱し引籠被居候處、此頃ハ彌表向御役辭退ニ相成、且又、附武家都筑駿河守急病死、内實ハ昨十七日、變死之事云々、堀田公ニも貴君々御心添之砌ニ、内々之事共ニ相成候ハヽ、實ニ程克歸府ニ可相成之處、此節ニゐも如何樣成變事出來も難計、薄氷ヲ踏心地と相考申候、

一諸國之諸侯より堂上方へ、追々表向被申出候族も多分有之、迚も御聞濟ニハ不相成模樣ニ御座候、

一川路、粟田へ參上、先達て御咄し申入候事之外ニ、珍說甚多分有之、云々、尤不殘實說之事ニ候事、云々、

一此頃ハ、日々々々御參　内三公方、其外大評定御座候得共、彌御治定被　仰出之邊ニハ不相成候、且又此六七日已前より片倉小十郎内々上京、其外諸方之老臣追々上京、何等之事ニ付ゐと申事ハ相分り不申、乍併上京ハ致居候ニ相違無之候、

一傳奏跡役、附武家頭役等之事、其御地之取沙汰相分り候ハヽ御申越可被下候、

延議變更
極密他言ヲ禁ズ

一前書之外ニ、内外之虛實共、何もく御書付一寸も早々被仰越被下候樣、内實ハ御賴も被仰進度被思召候御事ニ御座候、尤御賴不被仰入候共、何角御申越可被下候、日夜待暮し罷在候、何事も可然御申上被下、内外共早々御申越被下候樣奉賴候、乍併、御書付ハ御一覽之上、火中可仕候間、他聞洩達之御氣遣御無用可被下候、

三月十八日　　在留　龍　章

義　言　君

幕下

御深秘之中之深秘

一先般ヶ條書ヲ以言上候御次第、段々猶又御勘量被爲在候處、貴公御歸府後、又々宮中之御模樣少々御變し之樣ニ有之候間、御深密之ヶ條ヲ以、火急々々ニ御治定、　勅答被仰上候樣、右一條深秘之御事ニ付、雖爲親兄他言決て難相成義ニハ候へ共、國家之大事ニハ難代被　思召候ニ付、先達内洩ニ爲有候條、深御心底御組分ケニ相成候ハヽ、實ニ治世ニ太平を重る事、必然之御事と思召候、乍去、事及遲滯候てハ、實ニ不宜旨御勘考御見貫被爲在候條、此段御職掌ヲ放レ被仰進候段、厚御組分ニ相成候樣仕度、日夜祈念罷在候、

太閤ノ變説ハ惡ムベシ

一所司代本印（本多忠民）御用之義ニ付被召返、京都空居ニ相成、加之御返答及遲々候てハ、此節柄い
ろ〳〵上中共氣合相變り、扨々　殿下ニも御苦心御察上可被下候、何事も及遲滯候てハ
不宜之由、前件御治定之上、
勅答之御次第御遲滯ニ相成候てハ、實以不宜段、早々吳々言上可有之旨被仰出候事、
俄ニ手裏ヲ返セ之變事ハ、太閤殿是迄之下説ヲ妨ゐめニ、右樣之手段、實ニ相違無之、
實ニ可惡之手段不過之候、乍併御當方ニハ御初一念不變、信心堅固之御心底ニ付、何も
〳〵御案しハ一切御無用可被下候、
別段乍恐不奉呈愚書候間、御序ニ御前可然御取成被下度奉希上候、隨分〳〵貴君ニモ御
自愛專一ニ奉祈候、紺屋町彌兵衞之御赦之事、何卒御配慮被下度奉願候、此手紙著次第、
早々御返書御遣し可被下候、先書之御落手書御遣可被下候、
堀田公と通信の事、忽ニ御他言御無用之事、當五月御歸城被遊候哉、伺度候事、
御歸國御座候ハヽ、早々御上京被下度、委敷義ハ拜顏無之ゐハ萬々難申盡、此節御府内
之御樣子、委敷早々爲御聞被下度奉願候事、

〔長野主膳書翰〕（井伊家秘書集錄所載）

○四月島田左近宛

朝議一變ハ驚愕ノ至

京都ノ情勢不明

關白ハ弱ク太閤ハ强シトノ世評

井伊直弼關白ノ意中ヲ幕閣ニ傳ヘントス

去月十八日附之芳翰忝拜誦候、時下薄暑相催候處、益御機嫌能被爲成恐悦至極奉存候、
貴君愈御安泰御勤務之條奉賀候、抑早春來上京仕居候義ニ付、御懇之奉蒙　台命、冥加
至極難有奉存候、扨三月彌宮中御評決之處、十二日之變事ニ相成、加之不一通狼藉之次
第承之驚入候、　御沙汰向之事ハ、成行ニゐ候へハ致方ハ無之候へ共、ヶ樣成時節ニハ
正道ヲ非ニ見る人多き事、古來其例不少候へハ、乍恐　御殿之御上而已御案事奉申上候、
都筑之變ハ何等之次第ニて候哉、早春御付兩人東坊城殿へ被參候一件より事起り候樣
之義ニてハ、左迄ニも及間敷候へとも、承度義と奉存候、將又、太鼓殿ニハ一旦御辭職ニ
迄相成候處、何故右樣之事ニハ相成候哉、其後之樣子をも伺度義と奉存候、
一不仰越候共、歸府後ハ御考端ニも可相成義ニ付、内外共申上度無油斷掛念仕居候へとも、
公邊之樣子一向ニ相分不申、下説紛々たる事而已ニ御座候處、國元ゟも追々京地之樣子、
風聞ニゐる申越候ニハ、　殿下ハ御弱く、太鼓殿彌猛威ト相聞候ニ付、主家も甚御心配、
殿下ハ國家永久之政を御計被遊、
天朝を思召之餘り、關東をも外ニハ不被遊候處、其御正道ヲハ不存知、却ゐ太鼓殿之如
く私之望ゟ、國家之大事をも不顧方之荷擔ヲ被成候御方ヲ實と存居候俗士之言ニ、世上
迷ひ候ゐハ一大事ニ付、主家もたまりかね、　殿下之思召をも閣老方へ爲御知度思召、

勅旨ニ對スル答申ハ堀田ノ歸府後相談スベシ

條約ヲ破棄セバ爭端ヲ發セン

彦根藩京都陣屋地ノコト

安政五年二月二十六日

先月末ゟ被申遣候へ共、日々御用繁之由こゐ、漸々今月四日、伊賀守殿宅こゐ御出合、種々御政談之中ニ、養字之次第も極内々御咄し相成候處、伊州殿こも初て御驚之由ニテ、西丸養君之事上方ニテ一通御聞被遊候ゐハ、道理ニ思召候も御尤ニ候へとも、關東ニテハ中々左樣之振合こゐハ無之、尤、中ニハ一印を望候人も有之候へ共、右ハ其徒而已ニゐ多分其意ニ無之段、達　上聞置度事と被申居候由、是ハ京地こゐ當方ゟ實事申上置候事を御存無之故ニて御座候、

一尚又、今般被仰出候

勅旨之御答ハ如何可相成と御尋ニ候處、伊州殿被申候ニハ、堀田も一先引取候樣申遣候間、歸府之上相談可致との事ニ付、主人ゟ次ニハ貴所ニて御上京相成候樣致度と被申候處、伊州殿被申候ニハ、此上誰ゟ上京候共致方ハ有間敷、乍去、夷人取扱も漸々是迄ニ折合候處、今分約條ヲ破り候ハヽ、忽爭端ヲ開候覺悟ハ勿論之事こゐ候へ共、去共無謀之戰爭ヲ企候てハ勝算も無之、實ニ國家之一大事ニ付、未同役へも不申遣事ニハ候へとも、今一度同列連名之上書ヲ以、　殿下へ申上候樣可致歟と被申居候由、

一去月中旬、在京之勘定所ゟ、當家留守居ヲ本能寺へ呼出し、陣屋地之事、鞍馬口ハ社地も有之、

堀田ノ京都滞留ハ惡評

禁裡御年貢も有之、且居住之人家も取拂候ゐハ難澁ニ候間、千本こゐ御渡し相成候ゐハ如何と、御尋之旨江戸表へ伺來候、凡此時節柄、外警衛ハ格別、御守護可仕當家之陣屋ハ、少しこゐも　御所近邊よてとうそ仰らるへきよ、ちけたゐれたる千本こて陣屋を構候樣とハ、按外之事共と、主家も甚被驚、御不滿之思召候ニ付、右ハ先達て申置候廉も有之候へハ、小子ゟ荒安へ迄可申遣歟と存候へ共、社地人家等之事ハ、是迄ニも役方承知ニゐ候處、今更右樣之事申出候ハ、又奸曲之徒、當家之守護を妨、惡評ニても爲致候謀計ニやと、他人も心付候位之事ヲ、前後之思案も無之被申越候位之處へ、何を申ても糠ニ釘とやらんのたとひの如しと存、書狀ハ出し不申、尤主人ゟ直書を以、堀印へ被仰進候事ニ御座候、右鞍馬口ニ故障申出し候事ハ、何人之所爲ニ候哉、御まらべ被仰越被下候樣仕度奉願候、

秘中秘

以下萬一他聞候ゐハ、當家之大事こも可及義ニ付、御用捨奉願候、尤小子一分之愚意と思召可被下候、

一備州殿長在京ニ付ゐハ、追々人氣不宜、惡評甚敷事ニ御座候、右ハ元來重立候處こゐハ、左樣之筋有間敷候得共、是迄應接掛り之小役人之中ニハ、夷人ゟ品物ヲ貰受賞翫致居候

安政五年二月二十六日

人も有之由、其上自分御役宅へ夷人ヲ呼セ、酒宴等相催し候者も有之由ニて、彌人氣立候抔と申風聞も有之、又其徒之内意ハ、右等之義、内實好候義ニ無之、國家之爲ヲ思ひ候處より夷人ニ取入、當方之申分相立候樣之計ひと申方も有之、是非ハ不分明ニて候へ共、是等ハ小事ニ候へハ、今分可申上程之事ニも無御座候へとも、惡敷御聞込ニても如何と奉存候ニ付申上候、尤交易場所ハ、たとひ少々御免相成候とも、銘々御役宅へ夷人ヲ呼寄候樣之事、行々ハ御指留メニも相成可然義と奉存候、

齊昭ノ内奏ハ卑劣千萬

一勅旨諸侯之赤心被　聞食度　思召候條、乍恐御尤至極之御事、實以當今之時勢、既ニ水府老君之如く、昨冬　公儀へは、御自分隱居之方として、過言申上候段御斷之上書迄致し置、直樣裏に廻り過分之内　奏等被致候始末ハ、卑劣千萬成御所爲ニる御座候處、其巧言ニまよはされ、歴々之諸侯も同心有之事ニて候へハ、外夷之御扱ヒよりも、御内間之居合肝要之場ニて御座候得ハ、堀田家歸京之上、閣老御評議之樣子ニより、　將軍家ヲ始御年寄衆へも、主家ゟ急度被申入候思召ニて御座候、其上　公議を僞り、私之謀計ヲ以、内　奏等致し、

天朝ニ迄奉懸　御心配候徒於有之ハ、急度御沙汰ニ被及候る可然御事ニる候處、是迄海防掛り致居候御役人ハ、自分之先非ヲ恐レテ可改所存ハ無之、却る

島田左近京都事情報告書

勅命をも私ニ計ひ候用意之族も有之候てハ、以之外ゟる事、

將軍家思召ニハ、更ニ不相叶事共ト奉存候、

右之通、未萬端不決ニ付、先日來、　令旨之御答も彼是延引相成恐入候事と、毎々被仰候、此度も右延引等閑之段幾重ニも御斷、小生より申上置候樣被申付候間、宜敷御取繕ひ奉願候、猶追々樣子相分次第可申上、先ハ御無沙汰御斷旁如斯ニ御座候、以上、

〔島田左近書翰〕○井伊家秘書集錄所載

○四月十日長野主膳宛

三月廿日、堀田侯ヲ

禁中に被召、御渡相成候書付寫、

墨夷之事、　神州之大患、國家之安危ニ係り、誠ニ不容易、奉始　神宮、　御代々へ被爲對、恐多被　思召、　東照宮已來之良法ヲ變革之儀ハ、闔國人心之歸向ニも相拘、永世安全難量、深被惱

睿慮候、尤往年下田開港之條約不容易之上、今度條約之趣ニるハ、　御國威難立被　思候、且諸臣群議ニも、今度之條約、殊ニ　御國體ニ拘、御患難測之由言上候、猶三家已下諸大名へも、被下　台命、再應衆議之上、可有言上被　仰出候事、

三月廿二日、本能寺旅宿へ行向、兩役廣橋前大納言殿・萬里小路大納言殿・裏松大藏卿殿被差出書付、

一昨日　勅答之趣、得と奉拜見候處、深被惱睿慮候段、奉恐入候儀ニ御座候、然ル處、墨夷之義ハ、掛合向も相詰候上之儀ニ付、此上之異變難計候處、　勅答之趣も有之候上ハ、此後何ゟト歟御決著相成候迄ハ、於關東寛猛兩樣共、　勅答ニ對し御取扱被成兼候間、萬一差向事端取縺候義も有之候節ハ、其機ニ臨、片時も難申延義出來可仕も難計、其節ハ、一方へ御決斷御取計有之候て可然哉、左候ハヽ、英夷等渡來之節も、同樣御心得可有之哉、非常之義ハ、何時と申義も難相定候ニ付、無餘義御旨意奉伺、關東へ申遣度奉存候間、早々　御沙汰有之候樣仕度候事、

又一紙

墨夷一條ニ付、人心居合方之義、深被爲惱睿慮候段、先達る關白殿・太閤殿より御書取ヲ以被　仰出、早速關東へ差出候處、人心居合方之義ハ、關東ニ於テ御引請被成候ニ付、被爲安睿慮候樣被仰越候處、猶又堂上方御建論之義も有之候ニ付、右御書面類夫々昨日御渡し被成、篤ゟ熟覽仕候處、何ゟも憂國深忠之御赤心より、夫々被仰立候義と感激之至御座候、乍去、右群議之趣ニて、却て一層被爲惱睿慮候義とも奉存候間、夫是委細之事情、川路左衞門尉・淺野和泉守・岩瀨肥後守等、是迄夷人引合等仕候もの共ニ付、關白殿・太閤殿御初、其外可然御方々へ、御直ニ言上爲仕度廉々も數多有之、其次第ニ寄、昨日御渡し有之候奏議之諸卿へも、一々無殘處、御詰問等ヲモ蒙り、巨細之事情相悉し、聊モ御隔意おく、何ゟ之道、國家之御爲宜敷、始終被爲安宸襟候御場合ニ歸し候樣仕度奉存候、右ハ舊來之御作法も有之、不容易御義ニハ可有御座候得共、御沙汰之如く、國家之安危ニ係り候御一大事ニ付、非常之御取扱ヲ以、前文御直言上等之義、何ゟ之御場所成共罷出、御手數不相掛、只管御大事之御用談貫徹仕度、左候ハヽ、諸大名始、闔國之人心居合方ハ勿論、外夷之事情、後來御國威御更張之御見据、往々奉休宸慮候大略迄、十分ニ奉言上候樣仕度奉存候、實以國家治亂之岐路、億萬之生靈生死之堺、何分ニモ非常之御取扱、厚ク被　仰立被下候樣仕度候事、

此一紙、三月廿二日差出、內密ニ申上候、是ハ淺野和泉・川・岩等之作ニゐ、とふ成ともして、小路付申度心底ニ有之候、尤事情申張、寛猛兩樣之御決談、一方へ御決斷抔、難文ケ條ヲ以、今朝申出、一朝一夕ニ御返答伺度抔、種々申張、其餘之次第數多、餘ハ口上之事故、委曲ハ拜眉おらてハ難申盡候、此前後タリ共、

殿下ニモ段々御心力ヲ被盡候御事ニ御座候、此義も拜顔あらてハ難申盡、何も〳〵御憐察被成上候様仕度奉存候、前條之難文種々申上候ニ付、今ハ　朝廷ニも、　殿下ニも堪忍袋ヲ切て、被　仰出候御書付、如左、

堪忍袋ヲ切テ仰出サレノ書付

堪忍袋ヲ切て被　仰出書付、

三月廿六日、

一永世安全、可被安
　睿慮之事、

一不拘國體、後患無之方略之事、

一下田條約之外、御許容不被遊候節ハ、自然及異變候も難計ニ付、防禦之所置被　聞食度候事、

一衆議言上之上、
　睿慮猶難被決候ハ、　伊勢神宮　神慮可被　伺定議も、可有之哉之事、

右之通書付御渡之、

勅答品々被　仰出候、堀田公始一座之面々大當惑之模様、目ニ見ゆる如く氣之毒難盡筆紙候、實ハ　右神慮ヲ以　勅答ニ相成候様ニ相成候ゐハ、治世之變革關東之御趣意ニ相振(驚)候哉ニも　思召、深　殿下御配慮之御事、御賢察被成上候様御申上可被成候、乍併何も〳〵右様前文之如く、嚴敷押へ付候様書付被出候事故、無御據御次第、萬端共、御賢察被成進候様仕度奉存候、乍去、此極ニ至り、其旨時勢之令然天然之理順歟と恐歎〳〵、

淺野長祚ノコト

前條之三人合作之書類之外ニ、岩印(岩瀬忠震)兼ゐ於關東差上候よしニゐ、營中評議之外ニ利害得失ヲ論辯之次第書、紙數十七八枚中字十行位ニ書連り書類、卽日差上候へとも、一切御取上無之、翌々日早々御取戻しニ相成り、無詮事ニ御座候、則前書ニも、殿下・太閤殿其外可然御方々抔申立、理不盡之次第、向ヲ不見仕方、重々氣之毒之至、是ハ土地案内人氣熟勘之淺野和泉守(長祚、京都町奉行)之差圖ニ御座候旨、其節ニ内調付候、猶又今度堀公へ十分氣ニ入、輕薄之所行多分有之、堀公へも其邊ニ御心付有無ハ不存候得共、彼ノ付武家都筑駿河守卒去後、十九日ニ堀公ゟ被相伺、淺野和泉守事此頃御用多之時分ニ付、附武家加勢爲仕度被申上候得共、彼人ハ
　禁中御爲方不宜、且曲事之沙汰も不無之ニ付、御差留被　仰付候、實ニ淺野氣之毒之事ニハ候得共、餘り　朝廷ヲ輕卒被致候道理歟、天命之令成事ト奉存候、

一上之養之字之事も、三月廿四日迄ニ、段々太閤殿・左府公・内府公(當時前内府嚴也)、種々御賴ニ相成候ニ付、實ニ餘り〳〵殿下御壹人御默止ニ相成候てハ、亦々變論モ生候義、且ハ今更此

川路聖謨等ノコト

頃よりハ　睿命之御時宜ニ相成御座候義ニ付、實ニ無御據、無急度一印殿ト御名當ヶ無之、賢明之君ヲ武將ニ仰かねハおらぬトのミ、無急度御傳言ニ付、被仰進候場ニ相成御座候間、此段左ニ言上被成下候樣奉願上候事、

一川印・淺印之不埒之事ハ不申上候共、素ヶ御承知之御事ニ御座候得共、猶又今度御使之心配ニハ引替、實ニ表裏のミ多端有之、其一ヶ條ハ右兩公之勘考ニハ、兩樣共和戰共同樣之事ニハ、どちらへ御返答ニ相成候共、爭戰ニ可相成抔、其外不遑書記、多端之義ハ御賢察可被下候、

一先達る三月十七日迄之始終申上置候通、其後之處ニるハ爲差珍事も先々無御座候得共、何事も拜顏おらてハ難申盡、猶三月十日已來眞實之通路出候より、日々懇談、只々天下之御爲ト計り一途ニ相心得、日夜其事のミ工夫心配のミニ暮居候事、乍憚尊君御在京之砌、彼筋へ御申込之如く、實ニ身命を投して成共、一眞を貫徹仕度トのミ懇配仕候義、御賢察可被下候、乍去、國家之御爲ハ勿論、關東之御爲ニ深御配慮被爲在候上ヶ、　朝廷へも其御實心貫通可相成、拙者一世一代之懇配ヲ盡し申上候箇條も二端御座候、是亦、御上京之上可申上候、實ニ我慢自稱申上候樣ニ、若し御聞取ニ相成候てハ恐縮仕候得とも、中々左樣之義ハ毛頭無之、只々私心ヲ離さ、國家之御爲、且ハ　朝廷　公儀之御爲トのミ御配慮被爲在候事のミ、

條約勅許反對ノ氣勢

公武共へ口上のミ之御取次不間違樣ニ貫通仕候事ニて、決て〳〵御不爲ニ相成候義ハ決る不仕候段、不惡御賢察被下可然御取成　言上被下度奉賴上候、

三月廿日、又候、諸臣一同堂上堂下、幷ニ伊勢司官ヶも歎訴之次第等有之、混雜之事共之ヲ數ふニ不遑候、加之先達る粟田宮御發起之由ニて、山門・寺門其外鎭西・西山四ヶ之本寺、且攝末ニ至迄、今度之條約被爲　聞召、　勅許ニ相成候るハ、此行末是非大患を相招端ニ可相成、且又、彼國ハ切支丹之本國ニ、夫ニ今度畿內近邊並ニ、其外數ヶ所通商交易竝諸陵近邊も不憚雜居常住相成、其上耶蘇宗拜禮ト歟稱號相付キ候テハ、譬其官吏構內のミたりとも、元來彼宗門ハ御國禁之重事、寛永已來之御制禁も、今更ニ時世之御變革トハ乍申上、餘り〳〵何も角も御差許ニ相成候事ハ、實ニ歎テモ餘有事ト愁訴喧々タル事ニ御座候、尤其宗門破滅之基ヲ歎候事ヶ、申上置候次第ニるハ無之、且上下之差別もおく、其佛ヲ念それハ眼前ニ水火ヲ動搖し、金銀・米穀ニ不拘心願之儘相成候處ヶ、强欲之我慢ものハ自然と其宗門ニ歸依隨喜可仕、夫ヶ段々超過いたし、彼國賊之甚敷場合ニ可至も難計云々〳〵、右歎願申出候得共、殿下御心得ニハ、何モ混雜之多端ハ御取上無之、皆々御政務方萬端ハ、寺社奉行方へ可申出樣、被　仰遣候事ニ御座候、何事も言上被

荒宗裕ノコト

安政五年二月二十六日

下度奉願候、

一當四月五日辰半刻、京都發足於外席面會之節、日々面會不仕日無之候荒宗裕と申候ニ、彦根公藩長野貴君ヲ知已如何哉、初る被尋候ニ付、存居候人物こて、至て誠忠之人ト見請申、國學等も急度出來候人物と申答候、夫より貴君之外ニ種々雑話有之、跡こて又々貴君之尊名ヲ出し、二月下旬・三月上旬比御面會ハ不被成候哉と被尋候ニ付、其時分ニ四五度面會申候由答置候、尤拙者へ咄しニハ、今度松平宮内大輔君（穎慶、高松藩世子）へ御婚姻、八千代君御用ニ付、上京被致候よし、外ニアメリカ一條之雑談も少々有之候とのミ答、猶又、其御主人様御誠忠、且貴君之美情共咄し置候のミこて、堀田公御上京一件之義ハ、一寸も不申出候間、此段ハ急度左ニ御心得置可被下候、貴君之美談申聞候節、再三再四稱歎賛のミこる、今少し早く拙者と如斯懇談ニ相成候ハヽ、誠ニ難有事のミ抔と申出、尊君之事のミ稱譽被致居、今少し打明てくれられ候ハヽとのミこて、外之事ハ何も不被申出候、氣之毒之氣色ニ相見へ申候、誠ニ貴君之御遠慮ゟ今度之路頭相分り、猶今更分明之様子ニ相見へ申候、尤貴君御伺之外ニ御心添之一條、其節ハ川印・淺印・岩印・東坊城印・都筑印等を信仰、賴切テ被居候事故、此節貴君へ宗裕之返答ニ、此比大分工夫相付キ候抔とのミこて、今一段之場合ニ心付キ不被申候段ハ、是又天命之令然事と奉恐歎候、乍去、今

又此場ニ至、加之、其主人様ハ勿論、義言公之義言ヲ、猶更感激被致候事難有次第ニ奉存候、其旨逐一言上仕候處御滿足之御氣色ニ御座候、尤國家之御爲ニ斯迄御配勞之御義、不淺忝思召候、實ニ可然可申入吳々被仰付候、此段言上可被下候、

三月廿四日、旅宿へ行向堂上、

廣橋大納言光成卿

久我大納言建通卿

德大寺大納言公純卿

御口上御返答云々畢る、早々歸府之上、否言上可有之旨被　仰出、

彼方ゟ被差出候書付、

一昨日相伺候、差向候異變之節、寛猛兩様之内御取計之義ハ、此度　勅答之趣ニ付、猶關東衆議之趣言上仕、御決答被　仰出候迄之間、萬一異變有之候節之心得方相伺候義ニ付、右之御沙汰無之内ハ、衆議仕兼候との義こてハ無御座候事、

書付畢、

右書ハ、寛猛兩様之内、一方ニ御決斷ト先書ニ相當り候邊ニ付、無御據　神勅神慮ヲ以御返答可被仰出旨ニ相成候付て之書付と奉存候事、

安政五年二月二十六日

又、

三月廿六日、廣橋殿・久我殿・坊城中納言殿旅宿へ行向、御應接相濟、其上御渡之書付、

去廿二日、書取之趣及　言上候處、今度之條約迚も　御許容難被遊　思召候、衆議中自然差縺候時ハ、先件之御趣意ヲ含ミ、精々取鎮メ談判之上、彼方及異變候節ハ、無是非儀と思召候、　右睿慮之旨相立候樣　思召候間、宜被差含御取計可有之事、

三月廿六日、廣橋・久我・坊城被行向候節ニ被差出候書付、

此程、私儀歸府仕候樣被　仰出候處、委細口上こゐ申上候通、先當表ニ罷在、就てハ御用辨之ため、岩瀨肥後守儀江戸表へ早々出立爲仕候義ニ御座候事、

三月廿九日、傳奏廣橋家へ被差出候書付、

私　儀

歸府之義御沙汰被爲在候節、暫出立見合セ申度旨奉申上置候處、猶奉伺候廉々御沙汰も御座候ニ付てハ、　勅答被　仰出候砌、早々歸府可申上旨被　仰下候義ゑ御座候事故、此節ニ御暇被下候樣仕度奉存候事、

四月朔日、御暇被　聞召、

同三日、御暇參　内、定例之通拜領物被　仰付、別段　思召之拜領物ハ、今度ハ無之、

五日、辰半刻京都出立也、

四月三日、御暇參　内之節、於　宮中被相渡御書付、

蠻夷覬覦之時節ニ付、　神宮並京師殊更ニ警衛之儀、就中、武備相整可然國持之大藩、早々被　仰付候樣被遊度、於京師ハ、先年來井伊掃部頭以下被　仰付候得共、猶又、右御警衛防禦之御備、如何樣被　仰付候哉、平常御手薄之事故、御内評之儀被　聞食度候事、

但シ、自　神宮祠官、申立之儀モ有之候間、早速御沙汰ニ被及候樣　思召候事、

書付畢、

右之條々、以　思召被　仰出候、乍恐可然言上奉希上候、恐々謹言、

四月十日　　龍　章

長　野　義　言　君

猶以、前書之條々、夫々被　仰付、　井伊君へ可申入旨ニ御座候事、

今曉、京都地震數回、廷臣、參内、天機ヲ候ス。北陸地方、マタ強震アリ。

〔非藏人日記乾〕〇東京帝國大學所藏本

二月廿五日、辛未、晴、議　奏當番坊城中納言（俊克）殿、傳奏衆參侍、〇中略、

京都地震諸臣參内天機ヲ候ス

一入夜子半剋地震、丑半二剋前再震、依是王・丞相方、窺　御機嫌有御使、諸家同列等同之、
廿六日、壬申、陰天、申剋許地震、入夜雨降、〇中略、
一左大臣殿（近衛忠熙）・座主宮（入道尊應親王）・近衛大納言殿（忠房）御參、
一就地動伺　御機嫌、交々有御使、

〔非藏人日記坤〕〇東京帝國大學所藏本

二月廿五日、辛未、晴、當番議奏坊城中納言殿、傳奏參侍、〇中略、
一子半剋地震、依之諸家窺　御機嫌、有御使、
廿六日、壬申、陰晴夕景雨、當番議奏裏松大藏卿（恭光）殿、傳奏參侍、
一座主宮御參、
一申剋地震、依之諸家窺　御機嫌、有御參御使、

〔坊城俊克日記〕〇孝明天皇紀所載

二月廿六日、地震ニ付、子半刻許丑半刻許又一震、兩役近臣輩參入、當直等伺天氣、暫時參御前、寅半刻許各退出、

〔橋本實麗日記〕〇東京帝國大學所藏本

二月廿五日、辛未、晴、今曉地震二度、

廿六日、壬申、晴、未巳後微雨、巳剋參　内、當番之、〇中略、今日申剋計地震、可參御前、議卿大藏卿、被示、新廊下邊迄參之処、先相鎮之間、不能其儀、

〔中御門經之日記〕〇侯爵中御門經恭所藏本

二月廿六日、申、曇晝後雨、
一子半計地震、寅前刻又震、
一參番例刻、
一申前刻地震、今曉ゟ少々强ク、四五輩伺　御機嫌被參入、當番以表使伺　御機嫌、無參入
當番以表使伺　御機嫌、今曉兩役巳下二十人計參上ト云々、
一宿依所勞退出例刻、

〔中山忠能手記〕〇宮内省圖書寮所藏本中山忠能履歷資料所載

二月廿五日、夜子剋過地甚震、丑剋計又震、參　内、自未前剋夜丑剋迄、大坂大火、
一地震、勢州ノ方元ノ由也、〇中略、
廿六日、雨、申剋過地震、自午後、小動三四度云々、

〔六角博通雜記〕〇子爵東園基愛所藏本

二月廿五日、晴、〇中略、

當番晝參勤、〇中略、

丑刻前地動大ニ長シ、前年大坂津浪時之如シ、右ヨリハ輕シ、誠ニ大ユリ之、

後聞、加州大震由、東海道坂之下も大震与、

又寅刻前一震少シ嚴敷、　後聞、近習衆十余輩内々　番所倉橋子孫參　内、　内侍所

三人　　被伺御機嫌、

浪華道頓堀出火、大火、今戌半計、明辰比終、

廿六日、小雨、申刻前地動、又大ユリ之、長シ、　家君御參　内、七輩計參　内由、

戌刻前小震、〇中略、

廿七日、　曉天小震、

〔雅俗日簿〕〇山科言成日記　宮内省圖書寮所藏本

二月廿六日、陰晴不定、雨降、今曉子剋過地震、到丑半剋三度許聊嚴動、予少將等(山科言綱)參　内、伺天氣附于御帳、少將自予以前參　内參合、人々召御前云々、　主上下御之節之由、而先及靜謐之間、不令下御、入御々寢御間云々、人々退出見合、寅剋許彌靜謐之間退散云々、議奏衆以表使、附于女房伺云々、賜酒肴拜領了退出、先無難珍重〳〵、末代之義、毎々天變可恐〳〵、申剋許又地震、〇中略、

廿七日、朝曇、午後屬晴、地震微動云々、

〔土山武宗日記〕〇宮内省圖書寮所藏本

二月廿六日、

一今曉丑剋前地震ニ付、着麻上下出勤、丑半剋頃再震、御附大久保隅州(忠良)寅剋頃出仕有之、同役何レモ不參　表、傳奏衆・議奏衆不殘、近習衆少々出仕之由也、寅半剋過退出歸宅、

〔平田職修日記〕〇宮内省圖書寮所藏本

二月廿六日、〇中略、

一今曉丑刻地震一度有之、掛物類振候也、一度候得共長引、仍家内一紡、庭江走出候得共、跡無之故、内江入候処、又寅刻比一度有之、地震與存、位事也、申刻比又地震一度有之、座居地震與存、見合候得共、不止故、庭江出及見候ニ、家振候也、

〔中山績子日記〕

二月廿五日、

御機嫌よく、聖廟御法樂五十首、御湯あらせられ、右府(鷹司輔熙)より、御機嫌御伺、御鉢植糸櫻・海棠、御まお上られ、近江守(准后家司高松公雄)伺、よかの半過、大分地震ニて御床ゟ出られ、公家しゆも、御庭へまいらるゝ、御き嫌伺、いしも參る、

廿六日、

御き嫌よく、方々より、地震ニ付、御き嫌伺あり、右府ゟ御參り、御小座敷よて御對めん成、

地震ニ就キ參内天機ヲ候ス

禁裏附大久保忠良出仕

主上御床ヲ離レタマフ

尊融親王參内

夕ゝさ青門(入道尊融親王)へ御參り、御ゐいめん、

〔川路聖謨都日記〕○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

(二月)廿五日　晴　○中略、例之通備中守殿へ參る。○中略、九ツ時過よ歸候。間もなく八ツ時ゝ。寐候と地震。よゝとゝ乃事ゝ。被起申候。一同庭へ出申候。○中略、

廿六日　雨ーゝく迄乃如ー。山近き故ゐるへー。八ツ時過よゝとゝ乃地震ゝ。禁裡附と。御機嫌伺昨夜も有。今日亦同ーゐるへーとゝ。(禁裡附大久保忠真)大隅守と退散ゝ。六ツ時頃ゟ急よ御用有之候る。備中守殿に再ひ出る。

宮津藩地震被害狀況

〔宮津藩主本莊宗秀通牒〕○維新史料編纂會所藏本　伏見宮侍御家諸留所載

四月三日、御用番ゟ御屆濟、

拙者在所、丹後國宮津領村之内、當二月廿六日、曉丑剋、夕申剋兩度之地震こる、田畑地割、潰家破損所等左之通、

一村高、四千八百八拾石六斗四合八夕、

一村數、拾貳ヶ村、

一城内所々破損、

一百姓潰家、三拾貳軒、

一破損家、五拾五軒、

一土藏潰、貳ヶ所、

一同半潰、十五ヶ所、

一稻家、壹ヶ所、

一氏神鳥居石、貳ヶ所倒、

一土橋、壹ヶ所震落、長貳拾間、

一人馬怪我無御座候、

右之通ニ候段、御用番久世大和守(廣周、老中)殿へ御屆申達候、右御案内申入候、以上、

松平伯耆守

富山大地震ノ狀況

四月三日

〔信州矢代驛問屋柿崎源左衞門上申書〕○久保來復所藏本　如坐漫館居紀聞所載

○二月二十九日植科郡奉行所へ

戊午、二月廿九日、矢代驛問屋訴、

當月廿五日、夜八ツ時比、越中富山大地震ニ付、早飛上村清左衞門殿・永井文右衞門殿、

右兩人よゟ承り候趣、左ニ申上候、

一御城諸方痛、矢倉御門・埋御門・鐵御門・搦御門石垣崩ミ、大地破ミ、泥水砂吹出し、通用も出來兼、神通川水留り、御城下通筋少々ツヽ痛、土藏等ゆゑり破ミ、

一稻荷町ゟ申処、拾四五軒潰ミ、卽死等有之候、

一新庄と申村、五百軒程御座候處、四分程も潰ミ、卽死等多分有之候、

一西岩瀨迄四防と申村、千軒余之處、濱邊續一里程、海水干揚ニ相成、右村方之者共、最寄山々へ立據申候、

右之外、在々所々痛候場多分有之候樣子ニ申聞候、

右之通承り候間、乍恐此段御訴申上候、以上、

矢代宿問屋
柿崎源左衞門印

安政五午年二月廿九日

郡御奉行所

〔水戸藩士横山甚左衞門書翰〕○公爵德川圀順所藏本御城書拔書拾遺所載

○三月四日同藩士飯田總藏宛

飯田總藏樣

横山甚左衞門

越前丸岡藩地震屆

越中新川郡ノ地震被害狀況

以手紙啓上仕候、（丸岡藩主、道純、左衞門佐ノ誤）有馬左衞門佐殿等ゟ之屆、別紙壹通差出申候、以上、

（朱書）「戊午」三月四日

別紙

・拙者在所、越前國丸岡、去月廿六日、曉丑ノ刻・寅ノ刻、其後度々之大地震、就中、寅ノ刻地震强、城内を始、家來住宅并城下領分村方・寺院等、皆潰・半潰・破損所夥敷御座候趣申越候、人馬怪我其外共委細之儀ハ、取調追ゝ御屆可申上候、以上、

三月三日　有馬左衞門佐（左兵衞佐ノ誤）

一松平大藏大輔ゟ（富山藩主前田利保）同樣屆出ル、但、越中富山、

〔松宇日記〕○水戸藩士西野宣明日記子爵澁澤榮一所藏本

三月五日、天氣晴、○中略、

廿五日、大坂大火、北越大地震云云、越前丸岡有馬在所、別而震災甚、人蓄死亡有之由也、

○二月二十六日、越中國新川郡地震關係ノ史料ヲ、次ニ收ム。

〔上條組裁許記錄〕○私立米澤圖書館所藏本

昨夜之大地震ニゟ、加茂宮川大橋ゟ同小橋迄之間、長貳百三拾貳間往還道割大破至極ニ相成、人馬通路必至ゟ指支、外ニ假道可附場所無之旨及斷候ニ付、詮義之上、加茂宮川之尻ニ

る、船渡申付候條、得其意、急速水橋川渡舟之内壹艘加茂宮川尻に相廻、魚躬村ゟ水主指出爲越渡可申、依る水橋川に去、常願寺川渡舟之内壹艘急速相廻不指支様可申付候、尚更右之趣高月村にも可申渡候、承知之印急速先々相廻後落着可相返候、以上、

午二月廿六日

上條組　下條組
高野組　西加積組
才許
十村中

御郡所

今度地震ニ付、御藏所御米等異變之義無之哉、取調理急速否可申上旨被仰渡奉得其意候、岩瀨御藏所異變無御座候、御米之義去、百印ゟ印ら印き印女印由印御藏高積之分、三石五石十石宛、上にゟ崩落居申候、此外相替候義無御座候、依る此段御案内申上候、以上、

午二月

大村
平兵衛

新川
御詰米所

右書付、村上様にも懸御目、外宜敷旨被仰付、今廿七日、御詰米所に雇手代を以、御達申上候、以上、

東岩瀨
勘左衛門
同
太三郎

前月廿五日、夜子剋過大地震こる、常願寺川筋山入等、所々大破至極相損候ニ付、立山下タ邊も所々相損候旨、風評高ニ御座候故、私才許組伊折村ゟ人足共爲致登山、立山下タ等異變之義無之哉、見まらべ參り候様申談指遣候、其節深雪こる山中見廻り兼候旨こる、人足共罷歸申候處、兎角人々無心元旨申立候故、又々人足爲致登山、見まらべ參り候處、早月川筋、伊折村ゟ道程四里程山入こる、字十唐谷ゟ申谷間、山幅四五拾間計崩居候迄こる、外早月眞川ゟ大變之義無之候、立山下タ地獄谷之内、毎年花硫黄堀出申場所、長幅四五間計、地面二三尺計陷、其廻り水涌キ出居、當年御用花硫黄堀立方、出來不申躰ニ見請申候段、此外立山權現堂幷苅込ケ池參詣人止宿所、寶堂異變之義無之段申聞候ニ付、右之趣、小紙を以

安政五年二月二十六日

御案内申上候、以上、

午三月

新川

御郡所　小林村　六左衛門

御改作

御奉行所

右之通、先月大地震ニゐ、立山下タ邊も所々相損候旨、風評高ニ御座候故、伊折村ゟ人足共爲致登山、見調理參候處、前段之通、申聞候ニ付、此段兩御奉行所ニ御案内申上候、爲御承知申進候間、御廻達被下度候、以上、

午三月廿三日

伊東彦四郎様　小林村　六左衛門

大地震田地損害歩數調書

神保助三郎様

岩城七郎兵衛様

結城甚助様

石割彌五郎様

〔越中國新川郡上條組記錄〕〇私立米澤圖書館所藏本

〔表紙〕「安政五年三月

二月廿五日大地震ニゐ村々御田地相損候歩數書記申帳」

波之近ニ御田地高低ニ相成、所々地割いゐし沙吹出候村々、

一三千歩程　新清水村

一八千百拾歩程　平塚村

一貳萬三千貳百歩程　伊せ屋村

一三萬貳千歩程　二ッ屋村

一五千歩程　石正村

一七千歩程　同村領

安政五年二月二十六日

一三千歩程　石山村
一三萬四千歩程　池田舘村　領
一千五百歩程　一田中村
一八千四百歩程　同　村　領
一壹万貳千歩程　池田町村
一壹万八千歩程　西光寺村
一六千五百歩程　池田舘村　領
一三万千五百歩程　池田町村
一三百歩程　池田舘村
一四万五千貳百歩程　放士ヶ瀬村
一五千七百歩程　同　村　領
一千貳百歩程　泉　村
一八千五百五十歩程　金尾村
一三千歩程　北馬場村
一壹万五千百九拾歩程　曲淵村
　　曲淵平塚村　領
　　小出村

一八百八十歩程　專光寺村
一千五百八十歩程　高堂村
一七百歩程　上川原村
〃
　地割いゐし候村々、
一千歩程　清水堂村
一七百五十歩程　池田村
一百三十歩程　金廣村
〃
一貳百五十歩程　高寺村
　但、用水淵こゐ割落申候、
〃
一八百八十歩程　下段村
　但、所々割下り申候、
〃

安政五年二月二十六日

一百九十歩程　小又村
但、山欠落潰地幷低地ニ相成申ケ所、
〃
一五百歩程　座主坊村
但、地割仕、欠落申候、
〃
一五ッ水溜堤　上末村
但、圍土居所々割落申候、
〃
一長貳百間程　池田村
幅壹間ゟ七八間迄、
但、山拔仕申候、
〃
用水双方ゟ震中ニ砂吹上居候ケ所多、
一四百拾六間程　放士ヶ瀨村

一四百五十間程　伊勢屋村
一貳百間程　二ッ屋村
一百間程　石正村領
一三十間程　石正村・池田館村領
一貳百間程　池田町村
一百五十間程　西光寺村
〃
一四百間程　西光寺村三ケ
此分ニ底割損、大破ニ相成居申候、
〃
一五百間程古川　同斷
此分所々兩淵震出シ、水つかへ居申候、
〃
一貳十間程　小又村
此分拔落申候、

安政五年二月二十六日

大地震損害家屋調書

〔越中國新川郡下條組記錄〕○私立米澤圖書館所藏本

（表紙）「安政五年

當二月廿五日夜之大地震こゑ潰家等相損候分相調理書上申帳

下條組」

一壹軒	行間五間 梁間三間	下砂子坂村	理助	
一壹軒	行間五間 梁間三間半	同村	茂左衛門	
一壹軒	行間七間 梁間四間	同村	佐右衛門	
一壹軒	行間六間半 梁間四間	同村	久兵衛	
一壹軒	行間五間 梁間貳間	伊勢領村	半六	
一壹軒	行間八間 梁間四間貳尺	下櫻木村	清左衛門	
一壹軒	行間三間半 梁間貳間半	狐塚村	五郎右衛門	
一壹軒	行間七間 梁間貳間半	小池村	三右衛門	
一壹軒	行間六間 梁間貳間貳尺	同村	次右衛門	
一壹軒	行間六間 梁間貳間半	五郎丸村	宗七郎	
一壹軒	行間五間 梁間貳間貳尺	同村	嘉右衛門	
一壹軒	行間五間 梁間貳間貳尺	竹鼻村	善次郎	

安政五年二月二十六日

安政五年二月二十六日

一壹　軒　行間六間半　梁間貳間貳尺　上條仲村　四右衛門

〃

此拾三軒皆潰レニ相成申候、

一壹　軒　行間五間半　梁間貳間半　下十郷土村　宗四郎

一壹　軒　行間四間　梁間貳間　江又村　藤三郎

一壹　軒　行間五間　梁間貳間半　同村　宗右衛門

〃

此三軒指續丸潰レ同様ニ御座候、

一壹ツ　物置納屋　堅田村　太左衛門

一壹ツ　屎納屋　同人

一壹ツ　物置納屋　五郎丸村　宗左衛門

一壹ツ　同斷、　同村　宗右衛門

〃

此四ツ皆潰レニ相成申候、

一壹　軒　行間五間半　梁間三間半　下砂子坂村　宗三郎

一壹　軒　行間六間半　梁間四間　同村　久右衛門

一壹　軒　行間五間　梁間三間半　下砂子坂村　三助

一壹　軒　行間六間　梁間三間半　同村　三九郎

一壹　軒　行間七間　梁間四間　同村　淺右衛門

安政五年二月二十六日

安政五年二月二十六日

一壹軒　行間四間　梁間三間　同村　與三左衛門
一壹軒　行間五間半　梁間三間半　同村　兵助
一壹軒　行間六間半　梁間貳間半　下砂子坂新村　宗四郎
一壹軒　行間七間　梁間四間　上砂子坂村　次郎三郎
一壹軒　行間五間半　梁間貳間半　砂田新村　庄五郎
一壹軒　行間五間半　梁間貳間半　開發村　甚三郎
一壹軒　行間六間　梁間三間　下經田村　清三郎

一壹軒　行間四間　梁間三間　四郎平
一壹軒　行間拾壹間半　梁間三間半　堅田村　太左衛門

〆此拾四軒半潰ニ相成申候、

一壹軒　行間拾間　梁間五間　上櫻木村　十兵衛
一壹軒　行間五間　梁間貳間四尺　伊勢領村　四郎兵衛
一壹軒　行間四間半　梁間貳間　同村　四郎三郎
一壹軒　行間四間半(〆)　梁間貳間壹間　同村　嘉左衛門
一壹軒　行間四間半　梁間貳間　小池村　善六

安政五年二月二十六日

一壹　軒　行間五間半　梁間貳間四尺　理八　同村
一壹　軒　行間七間　梁間三間　文左衛門　市江村
一壹　軒　行間五間　梁間貳間貳尺　文三郎　鏡田村
一壹　軒　行間五間　梁間貳間壹尺　庄七　同村
一壹　軒　行間五間半　梁間貳間　四郎七　五郎丸村
一壹　軒　行間八間半　梁間三間半　宗左衛門　同村
一壹　軒　行間五間　梁間貳間貳尺　新七　同村
一壹　軒　行間八間半　梁間三間半　宗右衛門

一壹　軒　行間四間半　梁間壹丈　權吉　同村
一壹　軒　行間四間貳尺　梁間壹丈　七郎右衛門　同村
一壹　軒　行間五間　梁間貳間　平藏　同村

此拾六軒指續半潰同様ニ御座候、

私才許下條組村々、右當二月廿五日夜之大震ニ為潰家等大破ニ相成候段及斷候付、手代を以爲とげ見分、小前之者共作小屋取直方之義、村人足等不行屆向々、組人足等を以夫々爲取直申候、依為潰家等取あらへ書上之申候、以上、

安政五年　若栗村　善助

安政五年二月二十六日

新　川

御　郡　所、、、、、三冊

御改作

御奉行所、、、、、壹冊

「(表紙)安政五年三月

當二月廿五日夜之大地震ニ為御田地等

相損候ヶ所取調理書上申帳

下砂子坂村

一貳百七拾歩　字川端割之内

但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成相損申候、

一長拾八間　字中川用水筋

但、割落大破至極ニ相成申候、

〃

下條組」

小　池　村

一四百八拾歩　字鬮面割之内

一三百拾七歩　字大割之内

但、地面吹割砂泥吹出御田地高低ニ相成相損申候、

〃

市　江　村

一三百拾貳歩　字表川原割之内

一百九拾七歩　同下川原割之内

一五百六拾歩　同所之内

一貳百五歩　同畑田割之内

一百七拾歩　同善四郎田割之内

〃

但、右同斷、

一百三拾間　字村卷用水

但、右同斷、

安政五年二月二十六日

一貳拾八間　御收納通道
但、道形立ニ割、片方落下り申候、
〃

魚新村

一六百九拾歩　字貳番早稲田割之内
一七百拾歩　同鍛冶屋敷割之内
一七百歩　同上御缺領割之内
一八百七拾六歩　同下御缺領割之内
一七百七拾四歩　同川端割之内
一五百三拾歩　同小田割之内
一三百貳拾歩　同大橋詰割之内
〃
但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成相損申候、
一長貳拾三間　往還道加茂宮川大橋ゟ小橋迄貳百三拾貳間之内
但、地面吹割横立ニ壹尺ゟ貳尺程迄落下り、大破至極ニ相成申候、

一長五拾九間　右同斷、
但、右同斷、貳尺ゟ四尺程迄落下り、大破至極ニ相成申候、
一長七拾七間　右同斷、
但、右同斷、四尺ゟ五尺程落下り、大破至極ニ相成申候、

鏡田村

一四百五拾歩　字上川原田割之内
一六百八拾歩　同與四兵衛屋敷割之内
一八百六拾歩　同早稲田割之内
〃
但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成損申候、

堅田村

一八百歩　字神田川原田割之内
一九百五拾八歩　同火の爪川原田割之内
一千百貳拾歩　同五反割之内
〃

但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成相損申候、

五郎丸村

一七百三拾歩　字半次郎下割之内
一八百貳拾六歩　同中川原田割之内
一九百七拾歩　同下川原田割之内
〃
但、地面吹割砂出御田地高低ニ相成相損申候、
一百七拾間　字半次郎下割ゟ川原田割小卷用水
〃
但、割落所々大破至極ニ相成申候、

竹鼻村

一六百貳拾歩　字三平割之内
一六百八拾五歩　同貳枚瀬待割之内
一千百歩　同南條割之内
一三百四拾歩　同畑田割之内

一八百九拾歩　同清田割之内
一千百八拾歩　同中割之内
一千三百七拾歩　同尻割之内　三番割之内
〃
但、地面吹割砂泥吹出御田地高低ニ相成相損未ダ割候餘程之ケ所も御座候、
一三百貳拾間　小卷用水
但、左右ゟ埋損候ケ所幷割落大破ニ相成申候、
一三拾五間　字畑田畔上市川筋水除土居
但、貳尺ゟ三尺程下り申候、
一拾六間　字御防下ダ内ノ手土居
一八拾四間　同　前、
〃
但、地面割落下り申候、

上砂子坂村

一百九拾歩　字日掛割之内

一貳百八拾歩　同挾間割之内

〃

但、地面吹割石砂吹出御田地高低ニ相成相損申候、

下青出村

一百三拾歩　字東割之内

但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成相損申候、

砂田新村

一百拾歩　字江縁割之内

〃

但、右同斷、

小泉村

一百貳拾五歩　字宮ノ下タ割之内

一百五拾歩　同尻打割之内

一九拾三歩　同松木割之内

一百三拾歩　同龍宮田割之内

〃

但、右同斷、

下繩田村

一八拾五歩　字階道割之内

一百拾七歩　同中田割之内

一百拾歩　同出シ天割之内

一百貳拾歩　同蛭田割之内

〃

但、右同斷、

森尻村

一三千四百五拾歩　字下タ川原田割之内

〃

但、右同斷、

一五拾七間　御收納通道大永田村領境ゟ字下タ川原ゟ申ケ所

但、五六丁ゟ壹尺計迄引込申候、

柿　澤　村

一貳百三拾歩　　字江淵割之内

〃

但、地面吹割砂吹出御田地高低ニ相成申候、

廣　野　村

一百間計同村用水筋

但、服目村領ニゐ、山半拔ニゐ割口相立、當時ハ指支不申候得共、畢竟崩落可申躰ニ相見申候、

一四拾五間程同斷穴操

但、留木折損埋込大破至極ニ相成申候、

〃

東　種　村

一三百貳拾歩　　字十三枚割之内

一四百八拾歩　　同けつり田割之内

一五百七拾歩　　同善京田割之内

一百八拾歩　　同釜縁割之内

〃

但、地面吹割ニ落砂吹出、御田地高低ニ相成相損申候、

右私才許下條組村々、當二月廿五日夜之大地震ニゐ、御田地等吹割砂等吹出相損候間、及斷候ニ付、手代指出爲見分候處、御田地个所ニ寄壹尺貳尺宛高低出來、不容易變地ニ御座候得共、最早御田地起返最中之時節柄、變地之見分を請居候ゐハ、植付下地手後ニ成可相成義ニ付、早速取直方詮義仕、村方ニおゐて手ニおよむ兼候ヶ所、先つ組人足等を以吹出候惡砂等爲取除、高低之場所土持替等爲致、成限田形ニ取直、植付下タ地ニ指支不申樣、勢子を加申候、將又用水口筋之義も、同樣勢子仕故、取入方指支之義無御座候、

一川除御普請所少々宛崩居候ヶ所も御座候得共、早速自普請を以取直候樣申談候、

右御田地等損所取調理書上申通相違無御座候、以上、

若　栗　村

安政五年三月

善　　助

新　川

御　郡　所

但、御改作所にも、別冊呈申上置候事、

荒尾成允ノ勤勞ヲ賞ス

二十七日癸酉　幕府、長崎奉行荒尾成允石見守・箱館奉行支配組頭河津三郎太郎祐邦○後駿河守ノ勤勞ヲ賞ス。

〔老中申渡〕○内閣記錄課所藏本　安政年錄所載

○二月廿七日長崎奉行荒尾成允へ

時服三

去年中、入組候取調物彼是心配骨折候ニ付、被下之、

右、於芙蓉間、老中列座、中務大輔（脇坂安宅、老中）申渡之、

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月廿七日、○中略、

長崎奉行
荒尾石見守
名代　岡部駿河守（長常、長崎奉行）

（高麗環雜記　溫恭院殿御實紀　外戎記聞）

時服三

去年中、入組候取調物彼是心配骨折候ニ付、拜領物被仰付之、

右、月番申渡、拜領物御禮三度出、夫々御右筆部屋緣頰列座、

〔老中申渡〕○内閣記錄課所藏本　安政年錄所載

○二月廿七日箱館奉行支配組頭河津三郎太郎へ

河津三郎太郎ノ勤勞ヲ賞ス

二月廿七日、

常々出精相勤、蝦夷地之儀格別骨折候ニ付、

出格之譯を以、布衣被仰付、

本高百俵ニ御加增被成下、

右、被仰付旨、於御右筆部屋緣頰老中列座、中務大輔申渡之、

箱館奉行支配組頭
河津三郎太郎
（高麗環雜記　外戎記聞）

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月廿七日、○中略、

箱館奉行支配組頭
河津三郎太郎

常々出精相勤、蝦夷地之義ハ、諸事不一ト通取計向候處、最初ハ取扱、別る御用多、格別骨折候ニ付、出格之譯ヲ以、布衣被　仰付、本高百俵ニ被成下、

下田奉行井上清直（信濃守）・同中村時萬（出羽守）米國總領事「ハリス」Harris ノ來月二日下田ヲ發シ、海路上府センコトヲ要請スルノ狀ヲ幕府ニ稟シ、其乘用ニ供センガタメニ、汽船觀光丸ヲ下田ニ廻航セシメンコトヲ請フ。

〔下田奉行井上清直等上申書〕○宮内省圖書寮所藏本川路聖謨京都表御用留所載

○二月二十七日老中松平忠固へ

（朱筆）「午二月廿七日、伊賀守殿ゟ早川（久丈、奥右筆）庄次郎を以、信濃守上ル、」

亞墨利加使節出府之儀ニ付申上候書付

井上信濃守
中村出羽守

亞墨利加使節病氣ニ付、一ト先歸豆罷在候處、追々快方ニ付、兼る及談判候趣を以、來月二日、猶觀光丸御船拜借、海路出府仕度、尤病後之儀ニも有之、通弁官而已ニゐると手許用等差支候間、召遣支那人三人召連罷出度段申立候、然ル處、信濃守より去廿一日急便を以、使節快方ニ候とも一体大病之儀、押る出府再感等ゞゐ—候ゐると無詮筋ニ付、京都ゟ御一左右有之次第、同人下田表ニ罷越、双方調判之儀、今一應說得可致趣等入御聽置候上、委細出羽守方ニ申遣、右之趣差含、同人ゟ使節ニ對話および候處、格別懇篤之段と難默止候得共、追々快方ニも赴候間、何ゟ」ニも來月二日出立致度旨、强る申立、此上可差留辭柄も無之候間、同日出立之儀承屆申候、就ゐると、去月中歸豆之節之振合を以、觀光丸御船拜借被　仰付、來ル晦日迄ニ下田表ニ相廻り候樣、其筋ニ被仰渡可被下候、依之此段申上候、以上、

「ハリス」出府ニ就キ觀光丸ノ下田廻航ヲ請フ

午二月

〔下田奉行井上清直等伺書〕○合原猪三郎筆記所載

○二月二十七日老中へ

亞墨利加使節出府之儀ニ付相伺候書付

井上信濃守
中村出羽守

亞墨利加使節病氣ニ付、一ト先歸豆罷在候處、追々快方ニ付、兼る談判及置候趣ヲ以、來月二日、猶觀光丸御船拜借、海路出府仕度、尤病後之儀ニも有之、通辯官而已ニゐると手許用等差遣候間、召連支那人三人召連罷出度段申立候、然ル處、此程信濃守ゟ、使節快方ニ候とも、一体大病之儀、肥立方日數も相掛り可申、其餘和蘭領事官出府以前條約相整不申候ゐると、

「ハリス」再出府ノ件

不都合之儀も可有之、就ては、京都之御模様次第、信濃守下田表に罷越、調判可致哉之趣等相伺候處、伺之通可被取計旨被仰渡、且其以前出羽守心附を以、京都之御模様等もいまゝ不相分、折柄使節出府いたし候ハヽ、都る之御都合も如何可有之哉難量、何レにも、今暫出府之頃合爲見合候方可然ゟ見込、夫是差含及説得候所、追々及快方、殊に兼る信濃守等に被申聞置候日限等も有之、旁前書來月二日、出立ゐたし度、尤格別懇篤之談判一途に不取用ゟ申儀にて無之候間、朔日に至り、猶不快にも候ハヽ、其節日限相延候様可致旨申立、何分出府日限差延候儀て承引不致、其後追々荷物差立候手續、其外供廻り雇入方等之儀申立、其上當節て彌快方に付、出立治定之趣にる、最早差留候儀難行屆、支那人召連候儀も、前書之趣意にる無餘儀相聞候間、夫々申立之通承屆申候、就ては、去月中歸豆之節之振合を以、觀光丸御船拜借被　仰付、下田表に相廻候様仕度、此段奉伺候、以上、

午二月

〔亞米利加使節出府取扱掛勘定奉行等書翰〕（○川路聖謨京都表御用留所収）

○二月二十七日海防掛勘定奉行川路聖謨等宛

（朱書）「午三月朔日、京都ゟ來、」

當月十九日附之御書狀致拜見候、然て亞墨利加使節病氣快氣之見留も無之、右に付、條約調判之儀一同談判之上、伊賀守殿に信濃守より相伺候處、伺之通被仰渡候間、右寫差進候處、一ト通

奏聞て被爲濟候得共、堂上方評議も可有之哉、いまゝ聢ゟ之御挨拶も無之、此上御尋之廉々も有之候ハヽ、夫々條理被仰述候積り之備中守殿御含に候得共、御促ー被成候ゟて不可然御意味合も有之、中々先達る伺濟之通に可取計御場合に無之、猶此上之御模様次第、御同人に御伺之上御申越可有之候得共、見込之趣て先暫く見合候様御紙面之趣致承知候、然ル處使節儀病氣追々快方に赴候間、三月二日にて是非出府可致旨申出候趣、中村出羽守ゟ申越候に付、大病後いまゝ日數不相立肥立候儀にも無之、再感等ゐる一候ゟて不可然候間、京都ゟ一左右次第、信濃守儀下田表に罷越調判致一候様可致候旨を以、申諭方之儀同人ゟ、去ル廿一日出羽守に申遣シ及説得候處、懇篤之段て難默止候へ共、病氣追々快方にも赴候間、來月二日まて是非出府可仕趣申立、此上可差留辭柄も無之候間、其段承屆候段申越、伊賀守殿に信濃守ゟ申上候、尤使節出府致一候共、其御地御伺相濟、御一左右無之内てたとひ如何様申立候ゟも、調判て決る不致候間、左様御承知可被成候、依之別紙申上書寫相添、此段爲御心得可得御意如此御座候、以上、

二月廿七日

安政五年二月二十七日

井上信濃守印

「ハリス」出府ノ延期ヲ諾セズ

京都ノ事情不明ノ間ハ調印セズ

前掲書翰ニ對スル返翰

川路左衛門尉様
岩瀬肥後守様

退出ニ付印形不致
鵜殿民部少輔
永井玄蕃頭印
土岐攝津守印

〔海防掛勘定奉行川路聖謨等書翰〕〇川路聖謨京都表御用留所載

○三月朔日亞米利加使節出府取扱掛勘定奉行等宛

去月廿七日附之御報致拜見候、然ゝ亞墨利加使節出府之儀申立候處、大病後未タ日數も不相立、再感等ゟ之ゝ候ゝ不可然候間、京都ゟ一左右次第、信濃守殿下田表へ御越、御調判可被成旨申諭方之儀、御同人ゟ中村羽州へ被御申遣、羽州ゟ說得被及候處、懇篤之段ゝ難默止候得共、病氣追々快方ニも趣候(マヽ)間、當月二日ニハ、是非出府可仕趣申立、此上可差留辭柄も無之候間、承屆候段申越、其段伊賀守殿ニ信濃守殿より被御申上、尤使節出府ゟ之ゝ候とも、當表御伺相濟候一左右無之内ゝ、御調判ゝ決る不被致候旨、御紙面之趣承知ゟ之ゝ、別紙被御申上書寫被遣落手ゟ之ゝ候、右再御報可得御意如此御座候、以上、

三月朔日

岩瀬肥後守印

土岐攝津守様
永井玄蕃頭様
鵜殿民部少輔様
井上信濃守様

川路左衛門尉印

猶以、御報之儀ゝ事濟候ニ付、御再答文略ゟ之ゝ候、以上、

〔下田奉行通達〕〇帝國圖書館所藏本外國事件書所載

○二月二十七日町奉行へ
〔朱書〕「午二月廿七日、差越、寫向方へ」

〔朱書〕「本紙　亞人懸　當番　市中　町年寄」　年番

町奉行衆

下田奉行

亞米利加使節義、觀光丸御船拜借再度出府之儀願出候ニ付承屆、差添支配向之もの一同、來月二日、下田港出船、海路差支無之候得ゝ、翌三日曉、品川入津、芝新錢座江川太郎左衛

米國總領事再度出府ノ件

門調練場より上陸、且道筋之義ゝ、此程歸豆之節之通、蕃書調所へ着之積ニ付、途中警衛向等、都ゑ可然御取計有之候樣存候、依之此段及御達候、

二月廿七日

（朱書）「下ケ札付、晦日、於　殿中達、即日尙又下ケ札ニゑ挨拶有之、」

〔町奉行伊澤政義相談書〕（帝國圖書館所藏本　國事件書所載）

○二月二十八日同役跡部良弼へ

（朱書）「二月廿八日、向方へ遣、廿九日、戻ル、」

美作守殿

（北町奉行）甲斐守殿

跡部甲斐守

（南町奉行）伊澤美作守

（朱書）「成兵衛次郎八」

亞墨利加使節再度出府之儀願濟相成、來月三日、御當地着之旨、下田奉行ゟ達ニ付、別紙之通可及挨拶ゟ存候、尤町觸其外之義ゝ、道筋類燒場所等も有之候ニ付、尙取調可及御相談候、且出役勤方等之儀ゝ、參府掛與力共ゟ、御組類役ニ申談取計候樣可申渡哉ゟ存候、依之別紙書類相添、此段及御相談候、

町奉行挨拶案

二月廿八日

（朱書）「下田奉行へ挨拶案、」

御書面御達之趣致承知、道筋町々取締方、幷途中警衛向、其外組之もの附添方等、都ゑ先般歸豆之節振合を以、夫々申渡候樣可致候、尤來月三日何時頃、新錢座ニ着船可相成哉之儀相分り候ハヽ、猶前廣御通達有之候樣致度存候、此段及御挨拶候、

二月晦日

町奉行

北町奉行挨拶

御書面之趣致承知、別紙共一覽、拙者儀何之存寄無御座候、依之書類返却、此段及御挨拶候、

午二月

跡部甲斐守

下田奉行挨拶

（朱書）「晦日、下札、」

御書面之趣致承知候、使節着刻限之儀ゝ、此度も御船ニゑ罷越候儀ニ付、夜中着船相成候とも、夜明卽刻上陸爲致候積ニ付、右之御心得を以、御支配向御差出有之候樣存候、此段及御挨拶候、

午二月

下田奉行

米國總領事再度出府ニ就キ町觸ノ件

〔町奉行伊澤政義相談書〕（外國事件書所載）

○二月二十八日同役跡部良弼へ

（朱書）「午二月廿八日、向方へ、」

甲斐守殿

伊澤美作守

亞墨利加使節再度出府願濟相成候ニ付、着府之節道筋町々町觸之儀、去月歸豆之節振合を
も見合、（二月晦日ノ町觸ヲ指ス）別紙之通相觸可申哉ゟ存候、尤先達る横小路之分ゟ立切候積り、御目付方おゐて、
伺相濟候段達有之候ニ付、此上市中見物等相願候節、町方之儀も右ニ准可申渡旨、其頃海
防懸へ懸合濟之儘、未タ申渡無之候間、町々心得方齟齬いたし居可申哉ニ付、此度ゟ其段
但書ニ差加相觸候樣可致哉ゟ存候、且道筋之内類燒場所取締方之儀ゟ、（所見ナシ）別紙喜多村彦右衞
門差出候書面之趣ニる差支も有之間敷ニ付、其通り心得候樣可申渡哉ゟ存候、依之右町觸
案其外書類相添、此段及御相談候、

午二月

御書面之趣、別紙共一覽致承知、横小路立切之義、歸豆之節ゟ、差掛候付、道筋町々名

北町奉行挨拶

主呼出申渡、心得罷在候間、掛紙之通申渡候方可然、類燒場所取締方之儀ゟ、喜多村彦
右衞門差出候書面之趣ニる存寄無御座候、依之書類返却、此段及御挨拶候、

午二月

跡部甲斐守

米國總領事再度出府ノ件

〔亞米利加使節出府取扱掛目付鵜殿長鋭通達〕（外國事件書所載）

○二月二十九日町奉行へ

（朱書）「午二月廿九日、持歸り、寫向方、」

（朱書）「當番　亞人掛與力ゟ達、町年寄」

町奉行衆

亞墨利加使節再度出府之儀願出、來月二日、下田港出船、海路差支無之候得ゟ、翌三日曉、
品川入津、芝新錢座江川太郎左衞門調練場より上陸、道筋之儀ハ、去月廿一日、出立之節申
達候通ニ付、途中制し方等、兼る御達申置候通り御心得可有之候、此段申達候、以上、

二月

鵜殿民部少輔

米國總領事再度出府ノ件

〔亞米利加使節出府取扱掛目付鵜殿長鋭通達〕○外國事件書所載

○二月二十九日町奉行跡部良弼等へ

（朱書）「午二月廿九日、差越、寫向方へ、」

御鵜城殿民部少輔

（朱書）「當番亞人掛リ」

跡部甲斐守殿
伊澤美作守殿

御徒目付
新見蠖藏

御小人目付
栗島彦八郎
小澤勢十郎
鈴木和助
小野益太郎

右ゝ、亞米利加使節出府御用相勤候御徒目付高須鐵次郎、御小人目付神尾次三郎・竹中半之助・鹽澤彦次郎・三浦銈之助、外御用同兼松龜次郎轉役ニ付、書面之通申渡候、此段申達候、以上、

二月

鵜殿民部少輔
跡部甲斐守
伊澤美作守

米國總領事再度出府ノ件

〔町奉行伊澤政義等問會書〕○外國事件書所載

○二月晦日亞米利加使節出府取扱掛大目付土岐頼旨等へ

（朱書）「二月廿八日、向方へ遣、存寄無之旨、翌日戻ル、」

三月朔日、連名ゟ戻ル、」

土岐丹波守殿
筒井肥前守殿
土岐攝津守殿
永井玄蕃頭殿
鵜殿民部少輔殿
塚越藤助殿

亞墨利加使節再度出府之儀、願濟相成、來月三日、蕃書調所ニ着致し候旨、下田奉行ゟ達ニ付、同所逗留中、組之もの詰切、勤方等之儀ゝ、都る先達る逗留中通申渡候心得ニ有之候、右ゝ定る御達可有之義ゟゝ存候得共、爲手繰一應此段及御問合候、

二月晦日

出府取扱掛挨拶

御書面之趣致承知候、諸事先達る逗留中通御心得可有之候、寂早別段御達申間敷候、
此段及御挨拶候、
三月朔日　六人

米國總領事再度出府ノ件

〔江戸町觸〕○外務省所藏本續通信全覽類輯所載

戊午、二月晦日、○續通信全覽類輯

亞墨利加使節再度出府之儀願出、來月二日、下田港出船、海路差支無之候へと、翌三日曉、品川入津、芝新錢座江川太郎左衞門調練場ゟ上陸、松平肥後守屋敷脇ゟ、柴井町・日本橋通り左へ、本町貳丁目・常磐橋御門外堀端通り、雉子橋御門外、元飯田町・蕃書調所へ着之積候間、兼々町觸之趣相守り、通行中、都て不取締之儀無之様、嚴重可相心得候、
但、歸豆之節之通、横小路木戸有之所と立切、木戸無之場所と、竹矢來木戸仕付〻切、通行相濟候程合見計ひ、往來相通心付可申候、
右之通、道筋幷最寄町々不洩様可觸知もの也、
二月

〔下田奉行井上清直等上申書〕○合原猪三郎筆記所載

（沿海紀聞）

米國總領事浦賀番所前通船ノ件

○二月老中へ
亞米利加使節浦賀御番所前通船之儀ニ付申上候書付
井上信濃守
中村出羽守

〔上ニ收ムル伺書ヲ指ス〕
別紙申上候通、亞墨利加使節儀、觀光丸御船拜借、來月二日、下田表出帆、浦賀御番所前通船出府いたし候ニ付ゐて、此程歸豆之節之振合ヲ以、右御番所に斷ニ不及乘通候様仕度候間、其段浦賀奉行に被　仰渡可被下候、尤右歸豆之砌と、觀光丸之外、君澤形御船等拜借、差添支配向之内乘組罷越候ニ付、觀光丸通船之儀、右支配向ゟ爲及斷候得共、今般之儀と、附屬之御船等無之、斷方難行屆趣、幷通船日限等之儀と、前以私共ゟ浦賀奉行に相達候様可仕候得共、右奉行にも被仰渡御座候様仕度奉存候、依之此段申上候、以上、
午二月

米國總領事ヘ牛乳渡方ノ件

〔下田奉行井上清直上申書〕○合原猪三郎筆記所載

○二月老中へ
亞米利加使節出府中相渡候牛乳之儀ニ付申上候書付
井上信濃守

野馬役所

亞米利加使節、來月二日、下田表出帆いさし候積ニ付、病後之故を以、兼る願之趣も有之、無餘義筋ニ付、同三日より、牛乳五合宛、使節旅館ゟ受取之ゟの可差出候間、日々無差支相渡候樣、野馬役所へ被仰渡可被下候、依之此段申上候、以上、

午二月

老中指令

○指令

覺

書面之趣、野馬役所へ相達候事、

「ハリス」ノタメ人夫ヲ出ス

〔柿崎村名主日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

一二月廿五日、北風、晴天、今日異人（米國總領事ハリス）コンシユ呂ウ、玉泉寺下濱通歩行ニ付、臺持人足貳人出し候處、貳人ニゐハ持兼候ニ付、又貳人出し候、此時、久四郎・小三郎相勤候、

一同廿六日、北風、曇天、今日玉泉寺亞人用物等取調候、同亞人御掛り内野樣外御同心樣御兩人御出立、人足六人箕作村迄出勤仕候、役人代又次郎相勤候、

一同廿七日、北風、雨天、今日亞人掛り諸勘定書付玉泉寺へ差上候、久四郎出會、

一同廿八日、北風、晴天、今日亞人コンシユ呂ウ、玉泉寺下通歩行ニ付、人足貳人、四ツ半時ゟ出し候、尙人足貳人ニゐハ持兼候ニ付、又貳人出し、都合四人相勤候、則玉泉寺ゟ田代、日和山邊ゟ腰越濱通、夫ゟ濱條玉泉寺へ入候、

觀光丸入津

引網、今日引網致候、

尙、山崎樣御廻り被成候、

一同廿九日、北風、晴天、今月中亞人掛諸入用帳面ニ致し、玉泉寺御詰所ニ奉書上候、

尙、勘（觀）光丸御舟今日入津ニ付、御用伺權兵衞、人足四人相勤候、

亞米利加官吏出府ノ件

一同晦日、北風、晴天、今四ツ半時ゟ、亞人荷物持人足貳人、幷通辨官（ユユースケン）曲錄ニゐ御役所行、此持人足四人、都合六人相勤候、但、久四郎差添相勤ル、

〔代官竹垣直道日記〕○維新史料編纂會所藏本

二月廿七日、雨、

一晝後出宅、下谷役所出勤、○從

御殿元〻呼出有之、七左衞門罷出候處、亞米利加官吏來月三日比着府いさ―候ニ付、右心得を以、諸般取調候樣、青山彌惣右衞門ゟ談有之候よ―、○中略、

同晦日、晴、

一朝五半時過出宅、○中略、

御殿に出、四半時過退出、○蕃書調所に出ル、來ル三日、亞米利加官吏參府ニ付、今日御賄所ゟ受取、七左衛門其外懸之ゟの相詰ル、御勘定方其外同斷、下田方江戸詰之ゟの出勤、懸場所惣体見廻、九半時過歸宅、○中略、

三月二日、雨、

一朝五半時過出宅、○中略、

御殿に出ル、○中略、九時比退出、○蕃書調所に相越、詰合青山彌惣右衛門明三日亞米利加官吏着府ニ付、御賄向夫々見廻、○九半時過歸宅、

〔下田奉行用人〕前田小一郎書翰〕○公爵德川圀順所藏本防海雜記所載

前田小一郎

御請

朶雲跪誦仕候、如命春暖之節御坐候處、被爲揃益御勇猛被成御座奉恐壽候、扨過日ハ參上、種々御馳走頂戴難有仕合奉存候、拜借之御挑灯返上旁、今日使を以別紙差上候心組ニ罷在候處、御使故幸ひ差上申候、且昨廿二日飛檄到來之儀被仰下委曲承知仕候、右も平山謙次郎ゟ申御徒目付、昨日到着致し候樣子御座候得共、摸樣之儀も未と承知不仕、夫故の支配向之ゟの共、今日ハ別る調物等も有之候樣子御座候、何ゟ承置從是申上候樣可仕候、折角之御使御坐候得共、急ニ御請申上兼候段、宜御賢察可被下候、右尊酬而已亂筆御仁免可被下候、書餘拜謁萬諭可申上候、頓首、

二月念三

副啓、別紙應接書之儀も、一昨廿日下田表をり、大急御用狀ニる到來いるし直ニ認候樣被申付候ニ付、僅四五枚之紙數ニ御座候間、別段竊ニ寫取差上候心得之所、急速之儀何分手廻兼、前後而已相認差上申候、尤書漏し候ハ貳三枚ニる別廉無之、貫齋罷出容躰相述、變症等之儀も難計候得共、三十日程も相立候ハヽ、出府いるし候るも差障り無之旨申聞候處、强る其前出府いるし度段申出候を差留候手續より○印當表ゟ申所へ移り候而已御座候、尤使節病氣も、順々快方ニハ趣候得共、今以腰不相立を無理ニ人の肩ニ取付歩行いるし出府を欲シ居ゟ申事、何さ濟ぬさのものニ御坐候、

「ハリス」再出府ヲ要請ス

○別紙

〔朱書〕「戊午二月」

墨夷官吏應接書拔之寫

應接書寫

此方、

一再度出府之儀、凡日限治定手續等、一昨日書面を以被申聞候ニ付、先右書面之趣も、江戸表ニ申遣候得共、不取敢昨日〔若菜、下田奉行支配組頭〕三男二郎差越、實意を以申進候通、其許病氣不一ゟ通重体

之段ゝ、江戸表おゐて厚く　御配慮被爲在、急便御奉書を以御尋、被下物等も御手厚之儀、其上火急伊東貫齋被差遣、厚く治療可仕旨被仰下、當表おゐてゝ醫師兩人其外掛り役々も晝夜詰切看病致し、漸此程少々宛順快よも至り、追々氣力も相復候樣子ニハ候得共、出府之儀ゝ乘船ゟ申、其上風土相變候場所に、大病全快も不致押る罷越し、又々再感いゐし候ゐゝ、是迄之治療養生も無詮ゟ相成候間、出府之儀ゝ今暫差延候方可然、尤附切居候貫齋見込之趣をも、一應承り候樣可致候、

使節、

一承知仕候、貫齋呼寄御同樣こゐ見込之趣可承候、

〔朱書〕「貫齋對話之席に呼出し、本文之趣を以、夫々承り糺候處、昨十六日夜使節出立日限之儀治定いゐし候得共、いまゝ全快よも無之如何可有之哉之旨、ヒユスケン相尋候間、此後變症等之儀ゝ難量候得共、」

○當表之取扱方、不行屆之樣よも相聞候間、いつゝよも出立差延可申候、

使節、

一再三迄御深志之段ゝ厚く奉謝候、仰之通出府之上再感不致ゟ申儀ゝ、自分こも御請合ゝ申上兼候得共、迚も當地こゐ心勞極り再感いゐし候ゝり、國之爲こ出張仕居候事故、調印相整候上死候ゝ本望こゐ夫迄ゟ存居候、

一國之爲こ有之候得共、死候ゐゝ國之爲此上忠勤を出來不申、既に是迄及承候こゝ、西洋窮理之人々ゝ、死候ゐゝ國之爲こ不相成、命を保ち候ゐ永く國の爲をいゐし候由こ及承候間、時日の延ひ候ゝ天ゟあさらめ、今三十日出立見合可申候、

一左候ハヽ御厚意之御趣意相立、三月朔日こ至り少々こゐも病氣不宜候ハヽ相延可申候得共、先三月二日之出立ゝ御取極御手數奉願候、且江戸表こゐ牛乳之事御取分ケ奉願候、

鹿兒島藩士西鄕吉之助（前名吉兵衞○隆永○後隆盛）大將軍繼嗣ニ關スル幕府大奥ノ情勢ヲ詳報セル秘書ヲ福井藩主松平慶永（越前守）ニ呈ス。明日、慶永、之ヲ老中松平忠固（伊賀守○上田藩主）ニ内示シ、密議スルトコロアリ。

〔將軍德川家定夫人敬子附〕老女幾島書翰〕（○昨夢紀事所載）

○二月下旬鹿兒島藩邸宛

極御内用、先達又此程も細々御申上の御書附、慥こ落手致、秘見の上、則御内覽にも入奉候、先々上々樣方御機嫌能御揃被遊被爲成候御事、恐なから御めて度有難かり奉存候、左樣こ御坐候へハ、先達ゐより度々、御一大事の御内用御申上の御事ハ、委細こ申上奉、こなた（將軍夫人敬子）樣にハ御承知樣にて、先達ゐより種々御心配樣も被遊候御事ハ、追々申入候通の御事にて被

將軍家定ノ心痛

水戸老公謀叛ノ風評

爲在候處、先月末御國(鹿兒島)元よりも、御直にも細々御申上被遊、私へも仰戴き候ニ付、段々御考御都合次第にて被仰上候思召様の處、何分舊冬より、色々　上にも、御心配様之御容体に候、日々御伺被遊候御事なから、こなた様へハ、別段何故之御心配様との御咄し等は不被爲在、色々御表方にての御用向にて、御心配被遊候と計の御咄に被爲在候得共、何分風評に色々被爲聞候間、誠こなた様にも、御案事様にて被爲在候間、其御様子も、本様御覽被遊(將軍家定生母本壽院)候て、何事も御伺不被遊候ゑも、かへつて色々御案事上も被爲在候御事ニ付、本様へ御伺被遊候御事を、極御内々御咄し被遊候半とて、御同所様方之御内咄しにハ、アメリカ一條の事と、御表方にて色々の風評にハ、水戸老公御事御むほんの御志御さ候との評判等も御座候由にて、右様の御事にて、色々御心配様ハ被遊候御様子なから、けして深く御案事様被爲在間敷、諸かうかたも被爲入候得ハ、當時左様の御事御さ候様成御事ハ有間敷事にて候との御内咄し被爲在候、其後も折々本様へハ、上にて御内用と被爲在候ゑ、御人拂之御事被爲在候へとも、とんとこなた様へハ、何事も御伺不被遊候ニ付、先達ゑ方御申上被成候御事、且又御國元方も、被仰上候御事も、御扣被遊爲成ゑハ、どふも被仰上候折無御坐候間、殊之外御心配被遊、　御直ニ御さたハ御伺不被遊候へとも、前文之通り、本様方御伺被遊候御様子も被爲在候ニ付、先此御一條ハ、何分本様へも得と御相談被遊候て、御ともと

國元ヨリノ書ヲ本壽院ニ呈覽

繼嗣問題ニ關スル慶永ノ上書將軍ノ意ニ合ハズ

薩藩ノ上書ヲ見テ將軍憤怒

もに仰上られ候方御宜哉と、思召させられ候と御さたに付、早々御國元方御差出ニ相成候御書付も、御廻し被遊候間、右之御書付をも、本様へ御覽に御入被遊候て、段々御一大事之御事故、御直ニ被仰上度思召させられ候趣、且又御書付之通り、實に尤と御同意被遊候ハヽ、御とも〳〵仰上られ被下度と、細々御申上被遊候處、本様御さたには、御書付も御尤と思召、こなた様の思召の所も、至極　上を御大事に思召させられ候御事添思召ニ付、直にも仰上られ候様被遊度思召させられ候御事なから、先々ヶ様に、御書付迄も御覽被遊候上の御事故、　上より御内々御伺被遊候御様子を、得と被仰上候半との御事にて、御噺し被遊候にハ、實ハ此御事も、先達御伺被遊、此節もつはら御表にて御評議中のよし、則老中方先達ゑ、越前守(松平慶永)其外方も、ヶ様の書取を以被申上候處、　上にハ思召様ニ叶はせられす、未御年も過させられ候と申上候比にも不被爲在御事、只今方御養君様の御事を申上候うへに、御年比も御不似合の御方様を申出候事、とふも思召にハ叶はせられす、何分　新御殿(敬子夫人)へも、御上り方未御問も不被爲在候間、其内にハ御出生も被爲在候御事を、今しはらく御待被遊候て、もし御さたも彌不被爲在候ハヽ、其節御治定被遊候ても、御おそくも不被爲在候御事との　上意ニゑ、甚御不快の御様子様の處へ、又々堀田方、薩州方御申上の御書取を差上、　上覽ニ奉入候處、以の外の　御立腹様にて、薩广守迄(島津齊彬)方ヶ様ニ同意ニ相成、右

将軍夫人敬子ノ苦境

安政五年二月二十七日

書取指上候御事甚以相濟不申、只今　新御殿に入らせられ、格別續柄の事故、外々とも違候事を、いか様成存寄の事哉と御立腹被遊、直ニ　新御殿へ御意にて、薩州へ其事申遣はされ候やうに上意可被遊と、誠に御立腹の御様子様故、とふも御直ニ右様之御事　上意被爲在候ゐ、　新御殿様にも御存様の御事にて被爲在候へは、御よろしく候へとも、何も御存不被爲在所へ、左様に　上意とも被爲在候ゐハ、實ニ御心配ゐも被遊候半と思召候ニ付、先其上意ハ、しはらく御待被遊、得ト乍恐御考の上ニ被遊候様、薩州にも只今御近き御續柄故に、御一大事の御事、御爲筋申上られ候半の御事を、右様に被仰遣候ゐハ、いかゝにて候半まゝ、老中共にも篤と仰被爲聞、彌の御治定之上にてハ、　新御殿へも仰被爲聞候御事もちろんと思召上られ候と、段々本様ゟ仰上られ候ニ付、其後先堀田歸府の上にて、又々得と　上意も可被遊と御沙汰の由、何分右様の　御立腹中の御事故、只今此御一條を御直ニ又々被仰上候てハ、けして御不都合と思召上られ候へハ、とふも御宜とハ思召させられ兼候へとも、又ヶ様の御一大事と御伺遊ハし候て、御案事上られ、御直に被仰上度と思召上られ候御厚き　新御殿の思召向(イ様)も、御尤の御事にて候へハ、夫を御留も被遊かたき御事なから、上にハ前文の通りの御事にて被爲在候間、もしも御存上候通りの御かん氣も被爲在候間、御立腹の餘り、御夫婦様の御間柄にも御不都合等(イヒ)被爲成候ゐハ、何とも御案事

本壽院ノ態度

上の御事故との、本様の御さたのよし故、こゝた仰上られ候にハ、御尤ゐの御事なから、天下の御大事と承り、御家も御同様の御事ニ付、仰上られ候事思召に叶はせられす候ハゝ、御叱り等御蒙り被遊候御事は、けして〳〵御いとゐ不被遊候間、とふか一應仰上られ候上、御直の御返答御伺不被遊候ゐは、とふも薩州へも、御返答遣し候事出來かたく候間、御心配被遊候と、少し御つよく被仰上候へとも、何分〳〵本様にハ、先つ御留の御言葉のみにて、先しはらく得と御考の上、今一應御返答遊ハし候迄ハ、御待被遊候様に被仰上候間、其日ハ夫切りにて御歸り被遊候處、其夜右之御書取を、一寸御拜借被遊度仰進せられ候ニ付、本様御方へ被進候處、暫くにて御歸しに相成候、あくる日、本様又々こゝたへ被爲入候て、御さたにハ、昨日の御事、夜せんもとくと御考へ遊はし候へとも、御一存にハとふも御定め兼被遊候ニ付、極御内々飯島にハ格別の人故、秘見いたさせ相談候處、何事も私の存寄通りにて、何分にも御立腹中故、彼是を御案事申上兼候て、とふも此御請ハ申上兼候由申上居候ニ付、此上　新御殿御掛りの事故歌橋へ御相談被遊候て、其上歌橋存寄被爲聞候て、御定め被遊戴度と、御返答被遊候ニ付、いつれもたれへ御相談被遊候ても、とても仰上られ候様にと、申上候人ハ無御坐と思召させられ候間、とふそ御都合を御伺被遊候て、被仰上度とも思召させられ候御事なから、とんと左様の御都合不被爲在御こまり被遊候まゝ、

慶喜ハ大奥ノ評判宜シカラズ

又歌橋へも得と仰被爲聞候て、せひとも一應ハ、被仰上度と思召され候へとも、本様の思召旁も被爲在候へハ、御身ハ御いとひも不被遊御事なから、先同人の存寄も御尋被遊度と、細々仰せ被爲聞御相談被遊候て、尤せひ御請にハ仰せられ候やうに申上られ候様に、段々御沙汰も被遊候得共、同人申上られ候にハ、御尤様の御思召ゐなから、右様の御事ハ、何分表方夫々に御役人等も御さ候て、細々の吟味も御さ候上にて、申上候事にて、尤此御書取も差上られ候御事に候へは、　上にも御承知様の御事にて、何分思召に叶はせられす候へはこそ、本様へも右様の御さたも被爲在候御事と存上奉り候、尤一印之（一橋慶喜）御事ハ、先年も左様の御評議も被爲在候様にも伺奉り候御事ニ御さ候へとも、とかく奥向も一統歸服致不申、誠御むつかしく被爲在候御事ニ付、とても被仰上候ても、いかゝ可被爲在候哉、猶是迄も隨分右様の御事、大名衆方も手筋を以、奥向へ願出られ候御事も御さ候へとも、夫ハ一切御取上ケニ相成申さぬ御事故、思召様の所ハ深く組上候へとも、先々薩州へも、此御事ハ能々御斷り仰被進候方御宜被爲在候、何分御表方之御評議第一の御事にて、ケ様の御事ハ、奥向にてハ御存様不被爲在方御宜しくあらせられ候間、けして私へケ様に御内々御伺はせ被遊候御事も、御さたは御無用様、私も是切他言ハ致し不申候間、もしや　上より此後御尋の上意御さ候とも、御存様不被爲在候段、仰上られ候方可然と、くれ〳〵申上られ

敬子夫人ハ遠慮ニ過グ

候、誠に色々御心配様も被遊候へとも、かんじんの御方様、次向とても同様の人々、右様の心得故、萬事是にて御すいさつ被下候、何事も夫故に、御扣目〳〵と計にて、實に御爲にハ相成不申哉と、實ニ不及なからも、只々心計りもみ居申候、　新御殿様にも、未御若年にハ被爲在候得共、ケ様の御一大事の御事なそハ、御上り前よりも細々薩摩様方仰上られ、兼々御身は御いとゐ不被遊、萬端　天下の御爲、御家の御爲にこそ御上り被遊、精々御勤の思召にて、實ニ萬端御若年にハ恐入候御氣性様故、何事にても御爲筋の御事ハ、御しつかりと御應答もあらせられ候御事にて候へとも、何分御上り後、未御年數も不被爲在候得ハ、事に寄候て、とふも思召様通りにも、御意被遊兼候御事とも被爲在、其上にハ、　上の御側向にも御存上の通り、あく广も御さ候間、めつたなる事も御直に仰上られ候ハゝ、かへつて御不爲に相成候様成工とも取くみ候てハ、實ニ御大事の御事故、夫も御案事申上候へハ、たつて申上候事も出來不申、誠に身躰實にくるしみ居候、中〳〵外々より思召の様にハ、實に參りかね、殘念至極の御事にて御さ候、私おその氣性にてハ、とふそ　上の御附にて御さ候ハゝ、身命をなけ候て御直ニ　新御殿の御名代を奉申上度と、山々奉存上候得共、こなたの御附にてハ、何事も申出され不申、只々椽の下の力もちとかたとへの通り、心に殘念〳〵と計存、實ニ晝夜おもしろからぬ勤のみ致候様成事にて御さ候、夫ニ付ても、只

後宮方面ノ周旋ハ困難ナリ表方ヲ强談アルベシ

々御いとほしゐにて、色々思召様の様に不被爲在候御事のみ故、御心配のかひも不被爲在、誠に〳〵御心中様を恐察奉候へハ、心痛致候計にて御さ候、宜しく御察し可被下候、とても右通りにてハ、奥向の御手入にてハ參り不申、表方を何分御强御談し御さなくてハ、此御成就ハ御むつかしくと存上奉り候、本様の御兄弟衆（跡部氏）、越前守様方へハ御手續も存上居候、是ハ隨分御宜御續故、とふそ早々夫も御手入可然と存上奉り候、御表方にも、色々心々にて水印（齊昭）をあしさまに　上へ申上候人々御さ候御様子にて被爲在候、夫故に別る〳〵一印を御きらひ被遊候御事と伺はれ候、扨々目の前の事計存候て、色々申上奉候御事恐入奉り候御次第と、なけかわしく存奉り候、先々荒ましなから、御様子のミを申入候間、どうぞ先方へ宜しく御申傳へ被下度御頼申入候、御國元へも追々御様子ハ申上奉候様申上奉置、前文之御通りハ、細々申上奉り候、左様御心得被下候、

（橋本左内全集）

〔將軍德川家定夫人敬子附〕老女幾島書翰（○昨夢紀事所載）

○二月二十八日鹿兒島藩邸老女小野島宛

上々様かた御揃被遊、益御機けんよく被爲成候御事、御めて度難有りゝ〳〵、そなた様にも、いよ〳〵御揃遊ハし、御機嫌よく入らせられ候事、御めて度忝かり候、左様に御さ候へハ、此程ゝ追〳〵御廻し被成候極御内用封御預り申置候、い細得と心得、則

密書ヲ敬子夫人ノ内覽ニ入ル

京都ニ急使ヲ發ス

西郷吉之助後宮ノ密書ヲ呈ス

御内覽にも入置候間、何分御都合次第にハ、萬端其心得様にて被爲成、其上ハりんきをうへんの御事より外にハ、致方御坐無と存りゝ〳〵、

一昨日四時惣觸後、直ニ　上にて、萬歌（秋橋、大奥老女）御内用にて御引殘ニ御座候處、しはらく致候て、歌印こなたへ被參、御内用申上度御人拂にてしはらく御用ニ御坐候、左候處、京都へ俄ニ六日切御用を仕出候様御さたにて、則昨日仕出しニ相成候、右御用向極御内々私計伺奉候所ニ、是ハけして〳〵御他言被遊間敷様くれ〳〵被申上候由故、くはしくハ申上かたく候へとも、やはり此度のかの御一條にて御さ候、誠に實御大事の御場所にて、御心配様にてあらせられ候、右ニ付、御國元へも、又々御封物御出させ被遊候まゝ、目立不申様に被成、御早き方可然と存し上りゝ〳〵、御心得被成、宜しく御取計被下度御頼申入りゝ〳〵、返す〳〵極々御内用のミ、早々目出度かしく、

極御内用封不殘御返し申候、

二月廿八日

小の嶋ゐ人々極御内用　つほね

〔昨夢紀事〕

二月廿七日、西郷吉兵衛（吉之助）來りて、後宮之密書を指上たり、如左、

○密書ハ、老女幾島書翰ヲ指ス。上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

公、熟々と此文を御覽有て御考あるに、備中殿の　台前へ伺はれたる時の事を、公へ申上られたるに、事立たる　台慮は坐しませぬ趣なりしに、こゝにかく六ケし氣に見えたるは、全く新御殿の君ををとし奉りて、御直にハ被仰上ぬ樣に搆へたるものにやあるらん、備中殿の申されたる如く、　台慮ハいつれへなりとも伺ひとらはとらるへき趣なれハ、新御殿の君より申させ給ひて、　台慮の一橋に定り給はゝ、おのか方さまによからぬ人々の密議して、本壽院の君に勸め奉りしなるへけれハ、備中殿の伺はれし時の實況ハ如何ありけん、是ハ伊賀殿の知りて坐すへけれハ、伊賀殿に御逢ありて御尋の上、虛實につきて又思召旨もあるへけれハ、明日御登城の節、於營中伊賀殿ニ御逢有へきにおほし定め給ふ、

慶永松平忠固ニ密書ヲ内示ス

二月廿八日、如例御登城ありて、伊賀殿へ御逢之儀被仰入たるに、今日ハ殊に御用多なるよしにて、匆々に御逢ありて、長き御物語ならんには、近日之内御出ある樣に致され度との事なれハ、晦日に御出あるへしと御約束ありて、夫迄に一覽ふし置れ候樣にと、薩州より御手ゟ入たる密書を指出置れたると也、

二月晦日、公、伊賀殿(松平忠固老中)へ御出あり、御逢對の上、此比指出置たる後宮の密書御披見候哉と問はせ給ふに、伊賀殿、後宮の形勢をかく迄詳にせし事ハ曾てこれなし、誠に驚き入たる有

久世廣周モ密書ノ精密ニ驚ク

慶永ト忠固ノ問答

閣寺宦官ノ輩恐ルベシ

樣にて、大和(久世廣周老中)へも内見いたさせ、殆とあきるゝ計に候ひきふと申されて、書中の定かならぬ所々、解し難きふし〳〵なとを尋聞かれ、將々かゝる密書何方より御手に入たるやと問はるゝ故、薩州ゟ取出候と御答あれハ、能も御手の廻りし事なる哉と感嘆せらる、　公ケ樣之次第にてハ、彼件も如何あるへき、困し果候ひぬと申させ給へハ、伊賀殿、是はともあれ、當時の後宮は恐るゝに足らすと申さる、　公、先比建儲の御伺の節は如何候ひしにや、台前の御首尾かくの如くに候やと問はせ給ふに、伊賀殿、中々かくさまには坐さす、建儲の御儀ハ御許容ありて、御人柄は御考へ可被爲在との御事にて何の事も候はす、是ハ全く新御殿を拵へんとて作り構へたる事に候はんと、敢ゐ懸念の体も坐さぬ由、公、御側衆の内なとに、兎角支へ申人も候やと問はせ給ふに、伊賀殿、此向きも當今何等の權柄もなけれハ、更に恐るゝに足らす候へとも、唯恐るへきハ閣寺宦官の類にて、英明を忌む小人の心より、日夜朝暮昵近して、　台聽を傾け奉る僭愬も量りかたくて、此事に心を苦しめ候也、近來は御手元にて西洋風の調練御始になりしか、　上樣にも銃槍を被爲持、誰となく追ひ及き給ふ故、眞に突かせ給ふ事は被爲在ましき事とハ思へと、恐しけれハ逃け廻り候を追ひ驅給ふなと、實に小兒の戲なるを、夫をやかて御運動にもならせられ、難有事の樣にいひ劄る抔、歎息を極めたる事なる由を申さる、　公、西城の事、内勅ありし樣にも承り

繼嗣問題ニ關シテハ内勅降下ノコトナシ

本郷泰固ト用談ノコト

堀田正睦上京ノ首尾

候か如何候哉と問はせ給ふに、夫ハ更になき事なるよしを答へらる故、　公、審敷(不脱カ)れほして、さま〳〵に詰り問はせ給へと、決してなしと申さる故、もしありたらんには、如何し給へると問はせ給ふに、

勅ハ畏けれと、左様にてハ關東の御威光にも拘る筋に候へハ、拒ミ奉るより外ハ候ハすと答へらる、　勅ハ拒みていづれの御方を建らるやと仰するに、尙橋公を措きていづれを立つへきと答へられて、理り當れりともおほさねと、左まてにハとさし置れて、近き比本郷丹州(泰固、若年寄)への御用談ハ何事に候やと問はせ給ふに、夫ハ如何して知らせ給ふと申さる故、坊主共を初メ其邊立廻る者共、見聞て彼是と沙汰せる故に候と答へ給へハ、丹後への用談ハ別件にて、實ハ大和守内願の筋にて、夫を　台聽に入候に丹後ハ老功なる故、此者を使ひ候上に、僕も願き申事の候て、かた〳〵五六度も呼出候事候ひしなりと申さる、(師質云、此内願といへるハ、勝手向の事なるへしと推察せさせ給ふ、)　公、京師の御首尾ハ如何候や、(堀田正睦、老中)備中殿の御歸程も相定り候やと問はせ給ふに、伊賀殿、此件にハ誠に心を痛め候ひぬ、其上に備中の空見なる、上京以來いまた自筆の狀をさし下し申さす、何か御役人へ申越候由にて、ヶ樣〳〵と彼(平岡、一橋家々臣)四郎か申せし趣おとを御物語申上らる、公、墨使ハいかにはからはせ候やと問はせ給ふに、何れ近き程に出府も致すへけれハ、其時に返答の延引すへき事を、此方にて申聞かせてハ、使節の思ふ處も宜

慶永營中ニ於テ水野土岐鵜殿等ト會談

かるましけれハ、京地の模樣いつれに果敢とる間敷由を、備中か申越させん積りにて、夫か爲めに、此比急使を差立候ひぬなと申されけるとそ、

一、同日夕、西郷吉兵衛(吉之助)か、御本丸大奥か相廻りたる由にて指出ス、秘文左之通、

○秘文ハ、二月二十八日付、將軍夫人敬子附老女幾島ヨリ小野島ニ宛テタル書翰ヲ指ス。上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

此文のやうハ何とも分かたけれハ、吉か凶か京師へ被仰上事歟、京師への御答なるか、委しからすとも、今少したしかに承はるへしと仰ある故、其よしを附紙して吉兵衛(吉之助)か方まて持參し、賴みおきたり、吉兵衛(吉之助)ハ直に小の嶋へ遣したるよしなりしに、此答はなくて濟ぬ、

〔昨夢紀事〕

二月十五日、如例御登城あり、於營中水野筑州(忠徳、田安家家老)・土岐丹州(頼旨、六月付)・鵜殿民部(長鋭、二月付)等御逢あり、土・鵜兩氏にハ建儲之儀を、必至と閣老衆へ及建言候得共、閣老も例之事と被聞成、さしたる答もなく、御養君たに被爲立なハよかるへきものをなと申され、せんすへなきよしを歎き申せり、丹州の策にてハ、阿州殿(蜂須賀齊裕)ハ別段の御續にて、御先例も有なれハ、平川口か御登城にて、御座之間御目見の事を目論見、其御折を以、御直に仰るやうにすへくおもへるよしを申上らる、筑州ハ、昨日も伊賀殿・大和殿台前へ出られたるよし、京都か申來れる事なるか、又ハ例之

營中ノ風説橋カ紀カ紛然

水野忠德ヨリ慶永ヘノ書翰

事なるか審かならさるよし、營中の風説も橋とも紀とも紛然たるよし、後宮にてハ紀こそよけれ、橋ハ忌むへしとも、又橋紀共に　台慮に不被爲適由抔をも、沙汰せる由等を申上られたり、○中略、

二月十八日、水野筑州ゟ呈書、左如、

昨日は御書奉拜見候、中略、扨は、一昨日御屋形ゟ之御返翰、御内々拜見被仰付、冥加至極恐入難有仕合奉存候、乍然、格別御友愛之御深情より、既ニ御血誓被爲在候程之御儀候處、御返翰之御文言御當惑ニ被思召候段、實以乍恐御尤至極之御儀何共申上方無之、只々感涙漣々、於私候ても當惑之至に奉存上候、（側衆不閲道弘・夏目信明）平夏之一條探索之義蒙仰奉謹承候、昨日は同役義登城ニ付、内々申合仕、直ニ右之向へ内々承合候積、今日ハ其摸様も相分り可申哉に奉存候、且別段心附候儀も御座候故、昨日壹人相招候ゟ探索、且此上愚策をも申述置候、平夏之一條殊ニ寄候ハヽ、別事ニ可有之哉ニ被察候廉も御坐候、是亦兩三日中には彌之處相分り可申奉存候故、夫次第參上可申上心得ニ罷在候、此度一擧ハ實ニ無此上國家之御一大事ニゐ候故、私義も覺悟を極候ゐ取計罷在候、昨日之次第ハ何分書面に難盡御座候故、一兩日中罷出候ゐ可奉申上候、則御返翰は直ニ奉返上、先御受迄奉申上置候、恐々謹言、二月十八日

田安家ハ政治ニ容喙セズ

慶永朝比奈昌壽ト會談

右は、公ゟ黄門卿（田安慶頼）へ、西城御建白の儀を縷々被仰進たりしに、唯一ト渡りの御承知と迄ゟる御返翰なりけれハ、御内々筑州へ御示しにて、尚筑州之意見をも被爲問、且十五日黄門公御登城之節、御側衆平岡石見守（丹波守ノ誤）・夏目左近將監殿へ御閑談ありしよしを被聞召、西城之御事なりしや將別御用なりしや、御推問之御直書を被遣たる御請なり、○中略、

二月廿三日、公の姉君尾州（慶永）貞愼院（將、徳川齊壯夫人）の尼君、田邸（田安邸）へ御入ニ付、公も御對顔として御出ありて、夜に入つて御歸殿なり、此日も御饗應之御間隙に、猶又例の御一件を被仰進しに、卿にも御理りとハおぼゑとも、重大之御事件故、將軍家御壯年の御折柄、何とやらん御無遠慮にも思召、將御先代宗武卿（田安家初代）にハ、公儀御政道に御口出しありて、有廟（徳川吉宗）の御不興を被爲蒙、御登城を止られし御事もあれハ、かた〳〵此度ハ被仰立ぬ方に、御決定のよし御物語有しとそ、

二月廿四日、○中略、

一、此日午後、田安御家老朝比奈甲斐守（昌壽）殿を被召御逢あり、これハ納言卿御建白の儀なとをも、水筑州へのみ御相談ありてハ、兩人の間に嫌疑もあらんかとの尊慮にて召れたるにて、此事をも仰あるに、甲州素より御同意の事なれハ、御筋の事共何くれと御相談申上らる、又此人の息某ハ、當時御小姓を勤て昵近の臣なれハ、上の御平素之御様子なんと問は

中根ヲ水野忠徳ニ遣ス

せ給ふに、甲州の　慎廟（將軍家慶）に昵近せられし時なとゝハ事變りて、　上にさせる御物好もあらせられねは、御小納戸頭取等之諺に、肩をもて風を切り飛ふ鳥も落るといへる御左右の要職も、當直の節にハ御鳴居越しに鳥渡御目見申上たるまてにて、明くる日迄なす事もなくて退出する事にて、權柄も失果たる有様なれハ、何事も準へて知るへし、大奥にてハ、　若君の御誕生を待奉るなと聞こえ候へと、さる御事の可被爲在證も候ハぬものをなと、笑て呀き申上たる事なとありしとそ、

一、此夜、師質を水筑州の許へ遣はされ、昨日納言卿の宣ひし様を告給ひて、猶又安府の内狀を問はせ給ふ、筑州竊ニ申さるゝハ、御舘にも兎角便佞の輩のみ多くて、上旨を誑惑し奉る事の歎かハしくこそ候へ、渡邊與八郎（田安家物頭）抔も妨け申張本なれハ、此者を呼寄て問ひたりしに、西城の事の御建白ハ不可然由を申なれハ、嚴しく辨駁を加へしかハ、道理に迫られて承伏ハしぬれと、心服せしとも覺えす、間者を入れて探索し見るに、ともすれハ卿を西城に入れ進らせて、各も御供に參らんなといへる、事態の條理をも辨へぬ辟か心得の者共のそゝのかし奉るなれハ、猶卿より御相談もあらせられん折にハ、心得候て、能様に御諫言を奉るへき由を申上られたり、

水野忠徳ノ請書

二月廿六日、水筑州ゟ被指上御請書、左之通り、

御書難有奉謹誦候、中略、扨は、田安御屋形へ御入之節、御内話被爲在候一條之内、　悠然（田安公御実説）一條ニ付、委細之譯柄御教示被成下、誠ニ以難有、初ゟ具ニ承知仕安心仕候義ニ御座候、扨今朝奉申上置候通、兩人御目通可奉願存罷出候處、其已前　上ゟ被召出、外御用向御沙汰御座候上、右一條兼々私共奉申上置候次第も候故、得と御勘考被爲在候中、先比　太守様ゟ御文通ニゟ、猶又いさいに被仰進、且過日御入之砌も尚又御内話被爲在候ニ付、右は如此々々御主意ニ付、此處は不被仰立積ニ御決斷被爲在候旨、御内話被成置候故、是迄申上候次第も候故、心得迄ニ被仰聞候との御沙汰ニゟ、右御主意ハ全く　太守様へ御内話之通に御坐候、加之、一体右一條は深く御勘考候ゟも、何分御見据不被爲在、此方ニ候得は、往々必定万事御十分御行屆、御安心ニ被思召候と申程之請合ニゟ、可被仰立御見込不被爲在段も相加り申候ゟ、此度は不被仰立旨、既ニ　太守様にも御承知ニ相成候趣之御沙汰ニは御座候得共、御内々被仰下候趣も御座候上ハ、其儘奉伺置兼候ニ付、御國内限り之事ニ無之、外國を御相手ニ被遊候御一大事之御時節柄、此一擧ニゟ御當家之御盛衰、天下之治亂ニも關係仕候次第等ハ具ニ申取、右を御一身之御不興等不被爲蒙爲メ、御沈默可被爲在儀とハ不奉存、乍恐御終身御不興ハ被爲請候共、たとへ御領知は被召返候ニ至候共、右等之御顧慮不被爲在、國家之御爲而已を被思召候ゟ、御建

白も被遊候方、却る御忠孝にも可被爲叶哉、殊ニ悠然院様御一條は、於御本丸先勤中々兼々心得罷在候得共、御政事筋被仰立候ニよりて之御事ニハ承及不申候、御次第柄相違仕候旨申上候處、此事ハ夫迄ニる別ニ御沙汰不被爲在候ニ付、たとひ其節ハ御政事筋之被仰立ニる御不興被爲請候共、御時節も違、殊ニ亞人應接書御渡之比一大變革可被仰出ニ付、御心附之儀は被仰上候様との御書取を、老中々差上候儀故、則無此上御顧問を被爲請候義ニ候得は、何様之義被仰立候共、聊御不興なと可被爲蒙譯柄ニ無御坐候處、却る被仰立無之るハ、御國家之御安危ニ關係候事を、御よそ目ニ被成置候姿ニ相成、御忠懇之御主意を御失ニ可罷成哉、尤往々御安心を御見拔不被爲在段ハ御尤至極ニる、乍恐此時節ニ取るハ、　神祖享保之大君等ニ被爲在候ハゞ、御安心御受合被仰立にも可被爲成、御主意ニも可被爲在候得共、右様之御方様容易ニ可被爲在譯柄ニも無之候得共、當御時節を考へ、只一己之利欲ニ而已拘候俗情之徒多きより、何様之手段を構候る、遂ニ大事を被誤候ニ不至ニも無之、凡庸之御性質又ハ御幼弱なと申す譯ニるは、實ニ可申上様も無之次第ニ付、其邊々御推考被爲在候ハヽ、夫よりは是と申る御見据は可被爲在旨をも、委曲を盡し兩人ニる申取候得共、只々同斷之義を繰返し、一再之御沙汰迄ニ付、何事も差置、前文之通御書取を以御顧問被爲請候處、外様之列侯小名之御役人共迄も、此事を而已日夜心配仕候る、不顧憚多各建白等も仕候處、御屋形々ハ却る一言も被仰立無御座候ハヽ、公邊ニおゐて何と可被思召哉私共は只此事を又深く心配仕候旨、遮る申上置、是迄入御聞候上ハ、利害得失、篤と御承知被爲在候儀と奉存候故、其上ニも御主意之儀ニ候るハ、實ニ申上方も無之次第、悲歎ニ堪兼候心情を申上切り候事ニ御座候處、右之通御聞込も被遊候上ハ、尚又一應御勘辨も可被遊との御沙汰ニる相濟申候、此外筆紙難認取次第迄をも指加へ、今日は兩人御手討に罷成候とも存極メ候る、不顧思召奉申上候得共、右之次第ニる何分にも行屆兼候儀、扨々恐入奉存候、申上候度毎ニ被仰立候御主意相變候形ニる、必竟御屋形之御中心ニ被爲發候義とも不奉存、全ク此程も御沙汰之俗輩、私利を計候佞言ニ基候に相違無之推察仕候儀、誠ニ歎息仕候、右御模様柄奉申上候様、御懇命を奉蒙候事にハ候得共、私共身分ニ取候るハ難奉申上次第故、再三勘考も仕候得共、取繕候義を奉入御聞候るハ、此上御賢案も被爲在候御含にも相成兼、却る失本意候故、有躰大要認取奉申上候、如何にも多罪恐悚深く恐入奉存候、何も御請旁、此段奉申上候、恐々謹言、

二月廿六日　　忠德（花押）

昨日も御用部屋御人拂有之、其後御勝手御兩人・御用懸御兩人へ、於列席御用談、餘程御

手間取之事に御座候、廿一日以來日々右等之振合ニゐ、丹後加り(本郷泰固若年寄)候事も有之、洋夷之事とハ推考仕兼候、十九日出京地ゟ之便宜も有之候處、件々奏聞ハ相濟候得共、傳奏議奏初之評論ニ相成居、何等之被仰出も無之、空敷待居候由ニ承り及候、右等之次第、内々彼地在役の方ゟ申越候趣も御座候ニ付、別紙極密奉入御内覽候、全く御手元限りニ奉願上候、万一要路之目にも觸候ハ、申越候當人之難儀と罷成候事故、其御含ニ奉願上候、將又、一昨日御書之趣も有之、何分歎息仕候ニ付、極密渡邊與八郎相招候處、早速罷越候ゐ夜中迄種々及談候ニ付、御請深夜奉呈上候も恐入、及今朝候段、不惡御推恕奉願上候、同人も半六へ申聞候主意ニゐ、速ニ届伏仕、何れ尚極密建議可仕との事ニ罷成候、今日私共申上已前ニ御内聽ニも相成居候ハヽ、一段之都合ニも可罷成哉と存附、取計候事ニ御座候、尤御屋形へも内々之儀候得共、出格之御懇命ニ付、物ゐ打明ケ奉入御聞置候義ニ御座候、只々御聞流し奉願上候、

二十八日甲戌　老中松平忠固(伊賀守○上田藩主)等、連署シテ書ヲ在京ノ老中堀田正睦(備中守○佐倉藩主)ニ致シ、米國總領事「ハリス」Harrisノ出府ヲ要請スルヲ告ゲ、正睦ノ歸府延引ノ事情ヲ「ハリス」ニ通告センコトヲ求ム。

〔老中松平忠固等書翰〕(○東京帝國大學所藏本　近衛家書類所藏)

○二月二十八日在京老中堀田正睦宛

午二月廿八日、次飛脚ニ遣之、備中守殿江申遣候趣、(○近衛家書類)

戊午二月廿八日、次飛脚ニ而、堀田備中守江被申遣趣、(○安政見聞雜記)

二月廿八日、次飛脚ニゐ、備中守殿ゟ申遣候趣、(○堀口貞明筆記)

二月二十八日、備中守方ゟ、飛脚ニゐ申遣候條如左、(○聞集錄)

亞墨利加使節病氣追々快方ニ相成候ニ付、觀光丸御舟拜借、本月二日、下田表出帆、再ヒ江戸表江出府致シ候旨、昨廿七日、別紙之通下田奉行申聞候、就而ハ、來月五日ニ而、兼而約定之日限ニモ相成候義ニ付、出府之上ハ、必定仮條約調判之義可申出候間、取計方等掛リ役々江評議爲致候處、別紙之通申聞候、猶一同評議致候處、仮令如何樣申立候共、

敕答被

仰出無之内者、調判難相成者勿論ニ付、夫々臨機之取扱ヲ以、如何樣ニモ申諭、穩ニ相待居候樣爲取計可申候得共、一體猜疑深キ夷情、口上ニ而申諭候而已ニ而者、彼是疑心ヲ生シ可申モ難計候間、御自分ヨリ御歸府延引ニ及ヒ候段、使節江書面被遣候ハヽ、彼是苦情申出候節、斷方之辭柄ニモ相成、且者、最前書面ヲ以被相達候儀ニ付、事体ニヲイテモ、相當可致哉ト存候間、御同意ニモ候ハヽ、別紙案文之趣、書面ヲ以、猶又使節江口達有之候樣ニ(所見ナシ)ト存候、依之右案文一冊、書類寫四冊相添、此段申進候、以上、

「ハリス」再出府ノ通報

勅許ナキ間ハ條約ヲ調印セズ

歸府延引ノ事情ヲ通告センコトヲ求ム

二月廿八日

堀田備中守様

連名

（安政見聞雑記　堀口貞明筆記　聞集錄　野宮家文書　近世秘稿　涕泣輯書　伏見宮侍御牧家諸留）

岡藩主中川久昭修理大夫・丸龜藩主京極朗徹佐渡守・秋月藩主黑田長元甲斐守・福江藩主五島盛德近江守就封ニ依リ、各登營ス。

〔溫恭院殿御實紀〕○續德川實紀所載

二月廿八日、月次其他御禮事、○中略、

一今巳上刻、御表ニ　出御、月並御禮相濟、

銀二十枚　卷物五　御暇　中川修理大夫（久昭、岡藩主）

同　京極佐渡守（朗徹、丸龜藩主）

銀十枚　卷物五　黑田甲斐守（長元、秋月藩主）

同　五島近江守（盛德、福江藩主）

卷物五　同佐渡守養子　初ル　小笠原圖書頭（長行、唐津藩世子）

右畢ル　入御、

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本

二月廿八日、

一今巳上刻、御表ニ　出御、月次之御禮相濟、

銀二十枚　卷物二　御白書院　御暇　中川修理大夫

同　京極佐渡守

銀十枚　卷物貳　黑田甲斐守

同　五嶋近江守　初ル

卷物二　同佐渡守養子　初ル　小笠原圖書頭

右御禮畢ル　入御、

新發田藩主溝口直溥主膳正領內ニ講學ノ趣旨ヲ諭シ、淳朴ノ風ヲ涵養セシム。

安政五年二月二十八日

勸學ノ趣旨ヲ諭シ淳朴ノ風ヲ涵養セシム

〔新發田藩諭書〕○伯爵溝口直亮所藏本 誠廟記所載

○二月二十八日領内庄屋等へ

二月廿八日、在中莊屋共へ申達趣、○誠廟記

戊午五年二月廿八日、在中庄屋共へ申達趣、○新發田藩記錄

學問之義、郡中ニ於ても前々厚キ被　仰出ハ勿論、逐々ノ御世話ニゐ、社講社長迄も大勢被仰付、講堂ニおゐて輪講等承候處、孰レも學問ノ儀ハ相應ニ呑込候趣、然ル處組柄ニゐ、講會出席帳も取繕候程ノ出席人も無之由、右ハ格別ノ御世話も有之候處、御趣意不行屆廢弛以ゐし候ゐハ、歎ケ敷事ニ有之候、其方共ニゐ無油斷制度も可有之候得共、猶又聲懸ノ上厚心配以ゐし、月々一兩度之定日相立居、懸村役人共ハ勿論、近村村役人共ニゐ、差向候用向ノ外ハ可成丈出席致、尤其方共宅駈離候村方ハ、村役人宅ニ於て同様定日相立、御領内端々迄も聖教行屆候様、世話可致候、

一毎歳正月其方共宅ニ於て、御法度書申渡之節ハ、組中村役人共一統相詰候義、幸ノ折柄ニ付、右申渡相濟候下、勸學御筆記讀爲聞候ハヽ、右勸學ノ御趣意逐々村役人共心根ニ染ミ、折ニ觸實意ニ申諭候ハヽ、自然与末々へも行渉可申哉、其上ニも其方共ニゐ不絶制度以ゐし、逐々風俗立直り、孝悌淳朴之風質ニ移り行候様、厚心配可致候、尤學筋ノ義

鄕學

四書五經ヲ主トシ詩文雜學ヲ禁ズ

ハ社講共へ、教授役ゟ申含候通可相心得候、

一近年郡中へ世上流行之折衷學、又ハ詩文雜博渡世學ノ徒遊歷致し、富豪之百姓共方ニ逗留爲致受業以ゐし、幼若ノものへ詩文ヲ爲習、或ハ左傳・蒙求・雜書ノ講釋爲聞候族も相聞候、是等ノ義ハ前々御制禁之事ニ候間、心得違無之様、其方共ゟ篤と可申諭候、

（新發田藩記錄）

〔新發田藩教授役諭書〕○誠廟記所載

○同藩社講等へ

教授役ゟ社講共へ爲申含候趣、

御領内社講御取立被置候義ハ、庶民ノ爲孝悌忠信禮義廉恥ノ道ヲ說示し、名教ヲ厚し、淳朴之風を成ぱ之基ヲ開キ候様ニとの御趣意ニゐ、道學堂ニ比し候得ど、鄕學ノ姿こして、聖世ノ小學校ニ相當候故、教道筋凡テ小學ノ教ヲ準則以ゐし候義第一ノ心得ニ候、世上詩文雜博ノ學ハ、徒ニ浮靡ノ習を長し、反ゐ政教ヲ害する事故、程朱闇齋以來先達ノ痛く戒禁スル處ニ候、右ノ趣ハ其方共も兼々心得ノ事ニハ候得共、輕薄ノ輩ハ世上學風ニ流レ易キものニ付、猶又右ノ趣意彌相守、童蒙先入之教より、一同相辨候様教諭可致候、幼年小子ノ素讀ハ、四書・小學・近思錄・五經順々ニ爲熟讀候ゐ、蒙求・唐詩選其他雜書ハ相授申間鋪候、講授ノ

書ハ、道學堂二七講解御定ニ效ヒ、小學論孟ヲ順環ゐゑし、會讀ノ書ハ四書小近ト定メ置キ、逐々力付候ものも候ハヽ、同所御定書目ノ内、切近ノ書ゟ逐々講習可致候、其他史傳・子集等ノ講會ハ堅く無用ニ候、闇齋先生以來嘗る無之事ニ候、抑學術ニおゐて一定ノ見所無之内ハ、孔孟程朱ノ書ニ非レハ、手ニも取らぬ程ニ不致候ゐハ、聖學ハ得らるざる趣、闇齋兼々被申置候間、此遺訓を御家學風之宗旨ト心得、堅く相守心を盡し教導可致候、（新發田藩記錄）

墨夷一件ハ開闢以來ノ國難

鷹司家侍講三國大學（直準○幽眠○越前人）福井藩士中根靱負（師質○雪江）ニ外交問題ニ關スル京都ノ情勢ヲ報ジ、學國一致國難ニ當ルベキヲ述ブ。

（鷹司家侍講三國大學書翰）（○昨夢紀事所載）

○二月二十八日福井藩士中根靱負宛

一別匆々、屆指既五年、未嘗テ呈一紙以、御安否をも不伺、疎慢之罪、不知所謝、唯々御海容之程偏奉庶幾候、時ニ春暄紅紫競先候處、

君侯倍御機嫌克被爲在、恐悅之至奉存候、隨る貴所樣愈御壯健被成御務奉敬壽候、偖墨夷一件、

御國開闢以來未曾有之大患絶言語候、抑今度閣老上洛、巷說紛々、賂賄公行之說而已、貴賤一体掌中握汗候處、幸に

幕府ヘ御沙汰書下ル

天意清明、群議一決、

此度之一條不容易、

神宮奉初、

御代々へ被爲

對如何可有哉、人心之居合は

國家之重事に候間、三家

初諸大名之赤心被

聞召度

思召候、今一應被下台命、各以書取奏

聞有之候樣、宜取計旨、　關白大閤殿被命候事、

右之通ニ相成、最早今日頃ハ、

幕府へ相達候事歟ニ風聞有之候、此上は各國之諸侯莫所恐怖、莫諂諛、各忠實大和魂之赤心、自筆謹敬可書盡之秋と奉存候、舊冬以來宗藩大藩共、各所緣之縉紳家へ直筆之密啓有之由、就中阿侯ゟハ、最早諫諍之道絶果不可奈何、何時異變差起も難計、其節ハ列侯に先チ一番に馳登り、

阿州侯ノ書

皇都近所ノ開港ハ不可

皇居守護、可奉安
叡慮等之文有之、其餘難盡筆紙、此一班を以全豹御賢考被下度候、元來他事は暫閣之、第一
皇都近ク三所之開港夷人雜居こゐ、人心居合致候事萬々無其理、況や
天意一定不動、彌々强ゐ浪華等開港、夷人縱恣ニ遊歩致候樣相成候時ハ、蕭牆之内ニも如
何成大變相起候も難圖、東西中四之大藩一致之忠戰無覺束、臨淵履氷之恐不啻候、就夫申
迄も無之候得とも、

和戰兩樣ノ策アルベシ

御宗藩（鍋井藩）ニおゐてハ官武兩全、
皇國之神威を不奉汚樣之御處置專用と乍恐存上候、依ゐ御承知之事トハ奉存候得とも、當
地之光景荒增申上候、萬々一御心得之一端ニも相成候ハヽ難有、誠ニ當今之時勢、和戰之
兩條何れニ相成候ても、諸大名衰弊不致、同心之忠憤ニ相成候樣、御取計肝要と奉存候、何
れ海岸の諸侯ハ參勤交代を格外ニ被弛、土着自守封疆、京坂ニハ大諸侯を移して、永守之、
江府在留之武家妻子ハ、不殘國住居、各國大船を造て運送差支不申樣、列國一致、守
神洲候樣不致候テハ、迚も々々六ケ敷と乍恐杞憂仕候、
祖宗之御制度ニ不被爲泥、大變革と申時ニハ、唯夷人之恐嚇を食ひ踏書を被止、夷人雜居
丈ケ御免こゐは甚如何敷、天下之大小名庶民ニ至迄、感激揮涙シムル之妙策不費して惠之
處專務と管窺仕候、餘ハ難盡筆尖、早々如此御坐候、御覽後御火中可被下候、以上、

如月念八夜、初更前、

雪江中君　座下

三　直準、拜啓、

横山猶藏ト面談

二白、本文之趣、去廿五日、以急便申上候積之處、同日出勤中、横山猶藏生入來、何歟貴藩細
作之樣心付候ニ付、面話之上不煩筆研、存意を洩し候心得にて、早々謀一面候得とも、此節
晝夜奔走無寸暇、漸々昨夕得小閑、同人へ面會致候處、別段細作之證も無之、其上君公（松平慶永）之思
召、夷人も和人も同一之人物、港ハ夷人の望に先ゐ開き、邪教も傳染を防候處置有之候間、
不足怖ト之御事之由、承之令驚絶候、從來
君公英明私生國之自慢こゐ、每々奉稱揚候儀、都テ案外之義と相成當惑仕候、併宋末明之
覆轍も御構ひなく、破邪集所載こも關係無之との思召に候ハヽ兎も角ニ御坐候、依之此狀
急速之御答無之候得ハ、彌々前條之思召と決心仕り、改ゐ

慶永ノ外交問題ニ對スル態度ハ案外

異言ヲ吐テ太閤ノ眞意ヲ探ラントスルカ

檀那初私見込大違之段、夫々可申上候、乍去此節堂上列侯共、心口强弱を異ニシ、表裏虛實
を互ニスル之時節、横山生も態を異言を吐て、鷹府之極意を探索致候樣こも相見得候、何
分小生心底をも難漏、依ゐ早急此狀相認候義に御坐候、今日も早朝出勤漸々唯今歸宅、最
早江戸飛脚間ニ合不申哉と、取急不暇清書乱筆御海涵奉希候、此狀は小生か差上候證據之

爲、其御地兩替神田佐柄木丁村田七左衞門迄差出、同人ゟ差上候事ゝ、其餘申上度事如山岳に候得共、

君公之思召難窺、纔ニ一片之愚衷相認差上候、萬御賢察所仰ニ候、吳々御覽後御火中奉願候、

以上、

諸國蛙聲　コト〳〵〳〵

但、此内、國々ナマリあり、

常陸の蛙　ガイ〳〵〳〵

奥　カクゴ〳〵〳〵

加　クヲ〳〵〳〵

薩　ホツチヨケ〳〵〳〵

越　オレ〳〵〳〵

肥前・肥後・長州　ウテ〳〵〳〵

武藏　コハ〳〵〳〵

山城　クレ〳〵〳〵

此外多は、

カツテ〳〵〳〵

キウ〳〵〳〵

三萬で逆鱗撫きれず、

殿下・太閤へ壹萬ッヽ、

兩傳へ五千宛之事、

或夜之夢ニ、異人來示曰、

皆人ハ夷心とありにけん、たゝ我獨りやまとたましひ、

余、應之曰、

痛哭大和魂　化爲墨夷魂

感君和詩妙　唯我獨和魂

兩人相對して、歎息スルト見て、ゆめ醒畢ぬ、

（橋本左内全集）

〔三國大學書翰〕（橋本左内全集所載）

中根糺負ニ書狀ヲ發ス

○二月二十八日福井藩士近藤了介宛

追啓、

本文申上候、廿二日、中根君へ出狀と申上候得共、是は書損、廿二日御達書の寫を、廿八日、

安政五年二月二十八日

正六日切にて、中根氏迄差出候事也、此段爲念申上候事、

近藤了介様

貴答

〔昨夢紀事〕

三月八日、京都鷹司殿家司三國大學といへる者あり、此ハ越前國三國湊の豪商三國與兵衛といへる者の三男にて、幼年ゟ學問を好ミし故、京へ登せて人となし、遂ニ鷹司の侍講となれるなり、儒業の傍手に與兵衛か貨財融通之事をも助けて、御家の御内用をも達し、師質以前支度を司りし比よりの知れる者なりしか、近き年は絶て消息もせさりしに、今日不意も書狀到來せり、如左、

三國大學慶永ノ眞意ヲ誤解ス

○二月二十八日付、三國大學ヨリ中根毅負ヘ宛タル書翰ハ、上ニ掲グルヲ以テ之ヲ略ス。

右書面之趣にてハ、關東之事情不案内より、横山生之口氣ニ泥ミ、公の御深意を誤解し、頗切迫之來意にて、弃置候ハヽ不慮之障碍を釀さんも難計故、一時爲安心、　公、尊王報國之御誠心、一点御動搖無之、猶橋本左内等面談候ハヽ了解ニ可相成、且從是も追々可申越趣、一筆之返報、今晩之町飛脚ニ指出之、

〔中根毅負書翰〕○昨夢紀事所載

○三月十八日三國大學宛

念八之御書中、横山生云々に付て之御答は、蒼卒中なから既に御報候得は、定て御承知と存候、其他來示之趣反覆拜誦、君侯へも申上、故國之爲に種々御盛意、越鳥胡馬之御衷情、實に不堪感激事共に候、就中諸侯之疲弊を救ひ、參勤交代を被弛、大諸侯へ京畿之守衛を被命、諸侯妻子を國土に就しめ、各國大艦を造り神洲を護するの件々は、癸丑以來君侯度々之建白に、無殘處狀陳有之候儀共にて、拙子輩に於ても尤希望罷在事ニ候、且、宗藩に於ては、官武兩全　皇國之神威を不汚樣、幕府之根元を堅固にし、列侯一致不挾私心、内亂を未萌に消滅、且、外夷之覬覦を一拂する事、六十餘州之人物孰其不欲等之至論明確、吾藩之議と同一轍にして、間然すへき事無之候、乍併來示中、淵底難計、且不得不辨件々は、左に及陳述候、人心之折合、國家之重事に候間、三家始諸大名之赤心　勅問之趣、乍恐、　天意之御疑惑は、御尤至極に奉存候得共、右疑惑之根元は如來示、宗藩大藩より所緣之縉紳家へ直筆之密啓有之より起り申候、別ゐ阿侯密告之如きは、更らに難及信用も、此事若實ならは、阿侯諫諍之次第、一々御糺問有之、一々忠誠に出て、事務に益ある事ならんには、其條御内々關東へ御心添に相成、又反覆に出て不當ならんには、阿侯へ御懇諭有之、内訴之

三國ノ意見ハ慶永既ニ建白セシコトアリ

天意御疑惑ノ根元

阿州侯密告

諸侯ノ縉紳家ニ阿附スルハ不可

幕府ヲ奉ズルハ天朝ヲ奉ズルナリ

道を遏絶被成置候はゝ、官武兩全之御處置に可有之歟、此度之降　命、今以於此地御沙汰無之、其故は難計候得共、今後被仰出に相成候共、列侯一舌に、赤心既に舊冬及建白、餘蘊無之趣に可被申立は、必然之勢と相見に候得は、其旨關東より奏上に相成候はゝ、　廷議如何可有之哉、密啓之諸侯は關東へ反覆を抱く歟、　朝廷へ阿諛する歟之兩途を不免事と可相成候得は、　朝廷之御疑念も一層を增すとも、氷解之樣は有之間敷候、兄之阿侯之事を被示候は、褒乎、貶乎、不肖不知所解候、萬一阿侯之言を、褒美信用之御垂諭に候はゝ、嫌疑蕭牆之內に起り、東西中四之諸侯、四分八裂之基に可有之候、如此候はゝ、　皇國之神威を不汚、幕府之根元を固くし、列侯一致不挾私心、內亂を未萌に消滅せん事を欲するとも、砂を蒸して飯とし、木に緣て魚を求むるか如くなるのみならす、覇府の政令を遵奉する武家に於て、陰に官家縉紳に阿附佞媚する者を被歡候樣にては、內亂之焰を已萌に煽くとも可申儀にて、不肖の所以不得解なり、

吾藩の如きは、幕府の親胄、休戚を一にし、身心を貳にせす、幕府を奉するは、　天朝を奉する也、　天朝をおいて幕府なく、幕府をおいて　天朝ある事を覺にす、生死窮達、身命を幕府に委す、征夷之號、將軍之職、尊　皇攘夷之四字に出き、親胄列侯も此四字を奉するに出す、仍之有志之列藩に於ては、萬國之形勢を察し、夷狄之情狀を明かにし、其機に投し、

和戰宜ニ從ヒ神洲ノ威風ヲ伸ブベシ

瑣々タル尺寸ヲ爭フハ志士ノ取ラザルトコロ

廷議紛々歸着スルナシ

幕府威ヲ失ハバ天朝ノ威モ隨テ墜チン

其會に乘し、和戰宜に適て、遂に　神洲之威風を九夷八蠻に偃へ、辱くも日本　天皇を奉して、四海萬國之至尊に推戴せん事を希望する權略宏圖を懷けり、當今之形勢にては、掛まくも畏き申事には候得共、　天皇之　御元祖とあらせらる　日の大神は、遍ねく地球を照臨ましゝ、萬國其恩賴を蒙らさる事おきに、　日の大神の　皇孫は、僅に日本一州之至尊として、剩夷狄之睥睨を受させ給ふ事、大和魂ある者は、切齒憤慨、髮上衝冠之秋に候、此時に當つて、瑣々たる尺寸を爭ひ、粟散邊土に跼蹐して、死を決し國を守るは、猶溝瀆に縊るゝ愚に等し、眼孔濶大之志士は、曾而所不取也、於此吾侯之誠赤策略は、既に幕府へ呈露し、尊　皇攘夷之大功業大勳績を贊成窮極せん事を欲せる也、所見所期如此候得は、見仄に聞く、　廷議紛紜として無歸着、上洛之執政有司失策亦不少、仍之遷延亘旬、區々之浮說、喋々之流言、殆列國に充滿せり、兄之垂諭も、　天朝之威を不汚樣、幕府之根元を堅固にし、列侯之內亂を消滅するは確論なり、當時の形勢、外夷は元より列國も偖置、公武之內亂已に萌すに非すや、幕府の威權は　天朝に仰て立、　天朝の威風は幕府に命して偃しむ、今幕府威を外夷にするに似たるを怒て、其奏上を拒み、其宰臣を窘辱せるは、僅に其憤憤を泄暢するに似たれとも、畢竟幕府威を失ふの甚しきものにして、　天朝の威も隨て墜さ

將軍三家等上洛ノ說ハ不可

二百數十年ノ泰平ハ德川家ノ勳業

條約勅許ヲ請フヲ以テ幕府永年ノ功ヲ忘ルベカラズ

るを得す、小憤之爲に大躰を誤るの嫌あり、又聞く、宰臣は議するに足らす、大將軍幷三家々門之內、上洛合議之說有之由、國躰を解せさるの甚敷儀と被存候、譬は　廷議幕府之議を厭ひ、關東の政權を關西に移さんの陰謀有て、先つ飽迄其威を挫折して、列侯をして其遵奉すへきの實なきを知らしめ、其心を離し其勢を裂んとならは、此策猶可也と雖とも、左樣にも無之時は、弊害忽ち至り、兩虎食を爭ふの內亂を釀成し、狼心の外夷其弊に乘らは、　神洲一頓にして膻腥之鄕とならさるを得す、乍恐　天意建武の覆轍を可被爲躡　聖斷に出候はゝ、臣子何をか云ん、死守善道而已矣、雖然竊に惟ふに、文治之古、王權覇に歸し、府を鎌倉に開きしより以來、室町を經て織豐二家に及ひ、四百餘年干戈止時なく、宸襟一日も安からす、然るに慶長年間、政權を德川家に授與し給ひしより、太平二百數十年、干戈光りを斂めて、　宸襟泰山よりも安く、萬民鼓腹の樂に飽たり、　降臨以來五千年間、無比未曾有之盛事にて、實に地球上に冠絕せるは、德川家之大勳業なり、　天意豈之を思ひ給はさらんや、今萬國之形勢不得止、通信交易を外夷之請に任するを憤つて、二百餘年の盛業を一過失上に忘却するの議を發せらるゝは、武臣に於て曾て甘心せさる所なり、嘉永癸丑之夏、墨夷始て江戶海に渡來せる事は、其砌既に　朝廷に聞すへし、當時速に必戰を期し、鎖國の名を全すへきの降　命あらは、覇府群牧心を一にし力を戮せ、百敗不屈

今日ニ及ンデ條約ヲ拒絕セントスルハ迂濶

朝廷ハ將軍ノ權ヲ奪ハントスルニ急ナリ

覇府威ヲ失ハバ皇國一大變動ヲ生ゼン

之忠憤を勃興し、忽ち戰鬪に及ふへく候ひしかと、事去り機過き、既に通信を約し、交誼漸く熟するに垂んとして、駟も及はさるの舌を反し、不信不義の名を以て、是より釁端を啓んとす、迂にして濶なり、今覇府一惡政之付すへきなきに、徒らに既往の過失を咎めすして、宜しく將來の定策を責むへし、寬永以降覇府外夷の交通を止めてより、鎖國の名專らにして、夷人蹤を神洲に絕つといへとも、是を前朝に鑒るに、　大內裏に鴻臚館を置かれ、蕃客朝聘之禮は國史載せて炳焉たり、何そ幾旬の開港を事とせん、鎌倉に元使を斬り、室町之明廷に媚る、强弱勢を異にし候得とも、皆是覇府一時の權宜に任せて、共に　勅許に出たるを聞かす、今や　朝廷將に將軍の權を奪んとするに急なり、武を外夷に耀すに遑あらす、窃に聞く、墨夷宰執の上京を聞て、日本將軍の威權なきを歎すと、夷既に其威權の輕きを知らは、向來何を以て夷情を服さん、天威元より將軍を服すへしといへとも、手を將軍に借らすんは、夷狄を服する事は得給はし、將軍の宰臣、威權將軍に亞くにあらされは、又三百諸侯を服從する事能はす、今の　廷議覇府の威權を空くし、上洛して軍政を　禁掖に謀らん事を責め、宰臣を弃て、諸侯の言を信せは、覇府威柄を失ふて夷狄猖獗し、宰臣權なくして諸侯橫恣ふるへし、爲此　皇國內に一大變動を萌動せさる事を得さるは必然の勢也、雖然當今之計畫は、吾輩の議する所に非す、卽今關東之形勢、　廷議之遷延に依て人

心洶々たり、内地の治を圖る者は、深く憂とする所なり、兄宜察焉、

三月十八日　雪江拜

幽眠兄

二十九日乙亥　前關白鷹司政通（前太政大臣）内覽ヲ辭センコトヲ請フ。

〔孝明天皇宸翰〕（宮内省圖書寮所藏本　宸翰秘鈔所載）

○二月廿八日關白九條尚忠へ

太閤ノ内覽辭退ハ好都合

吳々も此後ハ、御互ま猶更晴ケ間敷、精々無見違、萬事執行仕度存候事、時候御用心可被成存候、大々亂書、高免御推覽賴入候也、

國家ノタメ精力ヲ盡スベシ

快晴春暖候、倍尊公御安泰令賀候、抑昨日御噂有之候太閤内覽辭退之事、委細承深宜都合と存候、於此花も、過日來色々と掛念致居候處、誠ニ以天之助力、國家之爲此時不可失之事と存候、於向も、此心不變革之内ニ、早々御執計有之候得者、實以御互ニ安心と存候事、右此花所存ハ、兼ゐ尊公御承知之事ニ被爲在候間、委細ハ不申入候事御賢察賴入候、仍早々御執計可有之存候、以一封申入候事、且又此後は、御互ニ無腹藏儀申述、天下國家之爲、精力を盡、見違無之、萬民居合歸服候樣、萬事執計度、猶又於尊公も、無御如才、其上猶又御精力、忠臣ハ賞、不忠臣罰、賞罰明白之樣、御執計賴入候事、且、（次ニ收ム）右別紙ハ、（鷹司輔熙）萬一右府よても、此花書取見度所望有之候時、御見爲と存認置候、然所望無者、無御沙汰賴入候事、且又烏渡申試候、昨日尊公被爲見下候關東ニ遣候返答之書取、右先達ゐ勅問掛候輩、被爲見候ハヽ宜哉と存候、先勅問掛、勅答も上候事故、無沙汰不存候も不都合候歟と存候間、此段存付候間、烏渡申試候事、何も荒々、

關東ヘノ返答書ヲ公卿等ニ示スベシ

衣更月廿八日午過刻、　此花

關白殿　御机下

（九條家文書）

〔孝明天皇宸翰〕（宸翰秘鈔所載）

○二月廿八日關白九條尚忠へ

今回ノ件ハ太閤ノ意見ニ從ヒ難シ

太閤ノ内覽辭退ヲ許スベシ

口狀覺

今度之一條ニ付、太閤之所存承候處、隨分聞へ候事乍、予所意ニハ不相叶候、是迄何事ニよらぬ、太閤之被申候儀ハ隨ひ用ひ候へ共、今度之事ハ、天下之一大事、國體ニ拘り候故、とふも同心ハ不被致候、此頃太閤又々所勞再發之由、定ゐ色々心配ト氣毒ニ存候間、一向此邊ニゐ内覽被辭申候テハ如何哉、左候ハヽ、本人安心ニゐ保養も出來可申与存候事、内覽辭退之義、御勘考ニゐ御執計有之候樣存候事、

二月廿八日

〔孝明天皇宸翰〕（宸翰秘鈔所載）

○二月廿九日關白九條尚忠へ

時候御用心、亂書高免賴入候、何も荒々、

快晴春暖ニ候、倍尊公御安泰令賀候、然者、昨日ハ以一封無左ト愚存申入候處、御聞屆被爲有候旨忝存候、只今内覽折紙披露有之候、早速ニ免許申出候ト存候處、萬里小路（正房、藤奏）内々言上ニハ、右府ヨリ承り候儀有之候間、先今日ハ御返答無之樣、委細ハ尊公御來臨之節可有尋樣申入候間、先留置候、仍此段不審方々御尋申入候、過日來申入候通り、此場ニゐ内覽差止ニ成候ゐハ、實ニ天下之爲あしく存候、老人之處氣毒ハさる事乍、追々被及老衰候儀、實ニ失惜（錯）無之内、する〳〵免許之方本人之爲と存候、何分ニも御勘考願入候、其上强ゐ不申、御賢慮所希ニ候事、且辭退聞召ニ成候時ハ、仰詞之邊も、以何（如何）カ文言可然哉、其上辭表ニ、准三后隨身兵仗之事も有之候、私倩存候ニ、前准后と申事ハ、不覺悟ニ候、右兩事ハ、其儘内覽計免之心得ニ候、此段も鳥渡及御相談候事、猶何日頃御入來候哉、萬々御相談申入、速ニ返答候方可然哉と存候、仍早々如件、何も荒々、

太閤内覽辭退ニ就キ萬里小路正房ヨリ言上

失錯ナキ間ニ罷免スルハ却テ本人ノタメ

〔鷹司輔熙書翰〕（宮内省圖書寮所藏本　尚忠公記所載）

○二月廿九日九條尚忠宛

一拜復、追々春暖ニ候、彌御安康之條承り珍重ニ存候、抑過日ハ參上御用繁中緩々拜面畏入候、其節極密々御含置希入置候一件、昨夕御内勅書御拜領ニ付、御内々御懇志を以ゐ拜見、且愚身心腹ニ可在之との御命何共敬承申入候、則内々太閤に申入候處、實以被恐入候、段々老年ニ及、自元愚昧之質、尚更恐懼、其上病痾ニ候儘、誠恐入居候處、則今日以廣橋頭辨（亂伝）、各辭退申上候儘、宜しく御含願入候、實ニ々々御懇情之段、輔熙ニおいても、深々畏入候、且ハ一封返上候儘、御落掌希入候也、恐々謹言、

二月廿九日　輔熙

關白殿（内密御報）

尚々三十六年

三帝ニ仕ル、柳營三代微功のミ、及今日心中恐察希入候、尚此上以御近親邊、偏ニ御慈憐、此上なのら偏ニ願上候、心中雜混、一入亂筆、御仁宥可給候也、百拜、

御内勅書拜見

鷹司政通辭表ヲ上ル

〔孝明天皇宸翰〕（維新史料編纂會所藏本　孝明天皇宸翰寫所載）

○三月五日左大臣近衛忠熙へ

左大臣殿

御机下ゟ

此花

封

不順之時候、御用心可被成存候事、

不相替大々乱書、高免御推覧賴入候事、

先々快晴春暖ニ候、倍尊公御安泰令賀候、毎々御面働之義、恐縮乍一封捧試候、

誠ニ去三日ハ、段々

御熟談申、實ニ

御懇切之仰共承、不相替御深切之御所存之程、實以伺難盡忝存候、依私ゟも、つい〳〵無腹

藏思付次第發言致、深以恐々入候、然兼る私腹中ハ、委細尊公御承知之事故、其段安心仕候、

青蓮院宮ノ言ヲ聞キ驚カセタマフ

太閤内覽辭退ノ件ハ此儘延引ヲ可トス

此度ノ一件ハ關白一人ニテ處置スベシ

約條ヲ許セシハ近患ノ基

扨其節私事短氣之申条有之、深御心配被爲有候由、昨日青門(入道尊能親王)ゟ承、甚驚入候事ニ候、前申通、

私儀只々出ゟうといまて、尤御聞流之心得ニ候、尤此度之一件ニ付る者、今更何の爲ニ折候

可哉、私所存ハ何國迄ハ、

神國不穢、只々正路ニる申延候心得ニ候間、決〳〵御心配不被爲有、此上乍御助力之段、

達る願入候事ニ候、吳〳〵ハ御安心所希ニ候事、

且昨日關白入來ニる、段々令話合候処、内覽迄之処、至極之都合ニる、先々此儘ニる延引、

詰り堀田歸府迄ハ成候半哉、至極之都合ニ候、右ニ付るも、關白ニ申候ハ、過日被仰候様ゟ

廢帝抔之事ハ、不存寄之事乍、此処ニて内覽被聞食候義ニ候ハ、過日御礼と稱參上ニる、重

分ニ上ニ申入候ゟ、其ハ去月廿六日申入候ト違、腹立之心有る申入候間、余り御困りを存

恐入、其上此度之一件、不成就之基を存候、右之義、極密乍鳥渡承候間、誠ニ御案思申入候

間、兎角〳〵只此儘ニる御宥用可然、俱於鷹家ハ、今明日ハ、日々ニ爲存置候方可然を存候、

且又此度之一件モ、過日閣府申遣ハ、總關白一人可被取計、太閤ハ不掛由被申入候間、此

後無相談、私一人天氣伺定メ、取計心得ニ候、万一何卒申事、又々有候節ハ、右府之一言ニ

るおゝ心得ニ候間、私安心候様被申入候間、先其邊ニる治定候事、

且又全躰見込、關白之処採取候処、約條被許候事カ、實以近患之基、不宜候被申候間、私申

御製

候ニ表、不許之時ハ、夷人ゟ可致戰爭、墨夷ハ、約條之趣ニゟ一ケ条ニゟも申通ニゟれハ、事起ー候事ハ不致、他國ゟ發起候樣可致、其時ハ、戰爭ニゟらもハゟらぬ之旨申入候、且今度之一件、關東ゟ之返答無覺束候、万一不面白之返答候共、可成丈ハゟ〜て申遣候可哉ゟと、被申居候事、此段も荒增乍申入置候事、

誤字落字承違間違等無覺束、程能

御覽賴入候事、

何分ニ茂於私表、不慮之事ハ不致心得ニ候間、御安心幾重ニ茂無

御心違、御助力希入候事、他ゟ不慮起ー候節表、私モ實以一身定覺悟仕候事、

櫻咲花のゟとりた春ゟゟら　何モ荒〳〵、

心にそゟぬ色香成々り　御一笑、

三月五日午半刻、

左大臣殿　此花

御机下ゟ

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

太閤内覽辭退ノ折紙披露

二月廿九日、晴、當番、巳斜參　朝、

一太閤、隨身兵仗内覽已下辭退、折紙有披露、今日者御沙汰不被爲有旨被　仰出畢、

卅日、晴、午斜退出、○中略、

一夕景御別業參上、有申伺事、從内府召參上、座主宮・源亞相・公純、裏松殿等、太閤内覽辭表一件ニ付、有御密談、

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本　中山忠能履歷資料所載

二月晦日、

一向久我家、有内談、西城之世子早可有治定一件、政通公、昨日被辭内覽、暫　勅答可有之歟、

三月一日、

左内府、左大將、二條大納言等、有内談之事、

三日、

建通辭役差出、予を擧申由の事、

四日、

於桃梨公面會、○左府・一條・二條申合、西丸之事花族ゟも申立之事、殿下不同心、二條を以

太閤ノ内覽辭退聽許ナキヤウ内願

太閤ノ内覽罷免ハ宜シカラズトノ意見アリ

申勸めの事、右ニ付、此儀ハ同心の事、○殿下不同心、但是ゟ後之取計方、書付可被見、一日有命由也、○上ニも建の强過御困之由、曇掛るか、可嘆々々、○老公内覽、上京之面々歸東迄、此儘不　聞食候様内願、左すれハ、息子急度不可被掛應對様取計の由、急々被聞食時ハ、何體ニ變し候も難量由の事、

〔後勁槐記〕○廣橋光成日記孝明天皇紀所載

三月一日、權大納言（久我建通）・德大寺大納言・萬里小路大納言、被來于候所、曰、太閤被辭内覽之儀、只今被聞食候テハ、過日三家始居合之儀ニ付、關東へ被仰遣候一紙ニ、兩公御命ト有之候故、可有如何哉、決而太閤ヲ御ヒイキニ存シ申出候儀ニハ無之、被免候方、太閤ハ可爲御安心候得共、世上之人口全體之御爲ニモ宜ク候間、殿下へ申上候テ、御止申度由、別而公純卿强被申述、同役最同意云々、（東坊城聰長）予所存、今度之御時宜不相分、御本人迫病痾被辭申候儀故、速ニ被聞召候方畏哉、又ハ何ソ有子細被出候哉、トント御辭退何共難被申故、若々所存被尋下候節ハ、又々可申上候得共、此方ヨリ越樽ニ非可申出候歟之旨答之處、同役及此三卿頻ニ殿下迄成共可申上、議奏ヨリモ可被申候得共、今朝建通卿參殿下、トウアヒヨリ被申候得共、中々承諾之氣無之、

叡慮御强由被命候間、何卒當役ヨリ申上吳候様被賴云々、暫而殿下御退之由、卽公純卿被參御傍、何角被申入、建通・正房等卿同被召寄、其後建通卿被來、先今日ハ可無御沙汰乎、尙被仰上、候上イカヽ、候歟ト之御命ニ候、一應當役ヨリ申上吳候様被賴、同役一緒ニ參八景繪間、予云、唯今議奏ヨリ申上候由、太閤内覽御辭退之儀、過日關東へ居合御尋之節、御兩公之御命ト認遣シ候故、御返答申來候迄之處、召留トモ聞召トモ御沙汰ナシニ相願度旨、議奏申候間、宜クト申上之處、

當役ヨリ奏上スベシ

叡慮之程如何可有之哉、尙可申上ト答命給者、予欲退之處、同役頻被述所存、何レニモ唯今不聞召樣、決而太閤之御爲ニテハ無之、全體之御爲云々之旨被申入了、建通卿へ面會ニテ、殿下御答命之趣申入置、

京都町奉行吟味書

〔京都町奉行岡部豐常等吟味書〕○孝明天皇紀所載

○安政五年冬鷹司家諸大夫高橋俊璹口供

條約勅許問題ニ對スル太閤ノ態度

異國一條之儀ハ、天下之重事、太閤殿トテモ情態御辨無之、御建議相立兼、乍然和親交易之儀ハ、行末イカ成患害可出來哉難計、御不會得ニ候得共、當春堀田備中守殿御使之御旨意相立不申候テハ、公武之御間柄、御不和ニモ可相成哉ニ付、成丈ケ御取持可被成御見込ニ候得共、世上之風說ニテハ人心不居合、國家之安危ハ唯今ニ可有之ト御聞込ニテ、深御心痛有之、萬一打拂之方ニ相成候テハ、人命之損害不容易、和親交易トテモ諸務御整之上ハ

堂上地下官人ノ増祿ニ就キ斡旋

格別、其節之閣老始御處置振之樣ニテハ、國辱ニモ拘リ、後來天下之憂如何可有之哉、尤諸侯之歸服否モ無覺束、乍去御政務之儀ハ、關東ヘ御委任之事故、右御使之御旨意、無餘儀御取持御決心之上、其頃御諫諍被成候處、叡慮ニ不被爲叶、存外御不首尾ニテ、御參内モ不被成事ニ相成、其後堂上方之形情御熟考之處、右御使之御旨意柄ハ、何レモ不服ニテ、王政御回復之儀ヲ唱ヘ候方盛ニ有之、（王政之儀ハ、久我家・萬里小路家・其外公家衆之内ニテ、專ラ衆評有之候ヲ、太閤殿ニモ及御聞有之候由、）又ハ水戸老侯・一橋侯ハ、衆人御人望之方々ニ付、御會議有之、德川家ヲ御扶助被成候事ニ相成候ハヽ、慶長以來之御遺德モ相立、皇威萬世迄モ光輝候トノ建議モ及御聞有之候得共、太閤殿ニ於テモ、王政御回復之儀ハ、御信用不被成儀ト相見、萬萬一王政御回復相成候樣之儀有之候テハ如何可有之ト、此者ヘ（高橋俊樂ヲ指ス、以下同ジ）御尋有之候ニ付、餘リノ事ニテ御答申上兼候段申上候處、太閤殿ニモ、右ニテハ迚モ治リ兼可申トノ御内話モ有之候程之儀、尤、其節之閣老方御所置振、イカニモ御不感心ト申一儀ハ、水野故越前守殿所司代御役中御取調御内談有之候堂上方・地下官人等小祿困窮ニ付、位田・職田等之事、其以來モ追々御内談ニ相成、昨年春中此者關東ヘ御使之節、阿部故伊勢守殿ヘ、右位田・職田之事御六カ敷候ハヽ、御扶助被下之儀、太閤殿御存意之處、書面ヲ以御内談相成候處、猶御勘考被成候趣ニテ、御預リ置ニ相成、其後猶又當春牧式部少輔（鷹司家諸大夫）御使出府中、猶又脇坂中務大輔殿ヘ、同樣之儀御内談相成候處、右ハ備中守殿御上京之上、御談ニモ可相成哉之旨御返答ニ候處、備中守殿御上京有之候テモ、右之御返答ハ更ニ無之、御上京ニ付テハ、何歟過分之金子、關東ヨリ被進候哉之御内存モ有之趣、乍然御時節柄右樣被進等之儀ハ、御受納被成兼候旨御返答ニ相成候由之處、右ヲ堂上方ニテ如何被承取候哉、太閤殿ニハ莫大之賄賂金御私欲被成候由、專ラ風説致シ、尤太閤殿ニハ三十七ヶ年モ御在職之事故、御用向萬端御手馴ニテ、關東之御都合モ宜敷、從來御和熟泰平之御事ニ有之候處、風ト當春以來之御次第ニ成行、實々御歎息被成候ヨリ、既内覽モ御辭退相成候事ニ有之、乍然實々御辭退被成度御本意ニハ無之候得共、前顯御不首尾後ハ、何トナク御權式モ薄ク、内覽モ有テ無カ如ク相成、不平之堂上方ヲモ、御取示被成兼候次第ニ有之、畢竟公武御合體ニテコソ御職威モ相立候處、何分其節之閣老御所置振ニテハ、公武之御合體モ無覺束、迚モ行末之見通シモ無之、終ニ御國體ニモ拘リ可申、殊前段王政之儀抔ハ、不容易中々以公家之力ニ可及事ニ無之、仕損シ候時ハ、忽公儀ヨリ御賄モ不被進事ニ可相成、夫等之儀、斷然ト御議論モ可被成處、最早御老年ニ被及、其上御病氣ニテ御健忘被成、迚モ御精力ニ及ヒ兼、一體太閤殿之御建議モ、御政務筋ハ飽迄關東ヘ、御委任可被成置ハ勿論之御事ニ候得共、方今閣老始御眞實意ニ、時務御變革之御處置無之候ハテハ、公武一同人心歸服之程無覺束、内外如何樣之事起リ可申哉トノ御掛念モ有之、夫是

太閤賄賂收受ノ風聞

内覽辭退ハ太閤ノ本意ニ非ズ

深御憂御諦ラメ候テ、内覽御辭退相成候由、尤右府殿之御處置振、太閤殿ニ於テ、不被及御聞ト申譯ニハ無之儀ト相心得候得共、上向御不首尾後、御處置向之儀ハ御聞流シニテ、都テ御頓著無之、始終時勢ヲ御歎息有之候儀ニテ、前段之次第ハ兼テ此者相伺居候、

○本年七月二十七日ニ至リ、鷹司政通ノ内覽ヲ罷ム。同日ノ條、參看スベシ。

箱館奉行村垣範正淡路守外船出入ノタメニ、水先案内人詰所及用船等ヲ設備シ、常傭夫ヲ雇傭ス。

〔箱館奉行支配向伺書〕○北海道廳所藏本異船諸書付所収

○二月二十九日箱館奉行へ

（朱書）「午二月廿九日、御小印、」

○井上茂輔
○安間純之進
鈴木尚太郎○
村上愛助○
向山榮五郎○
三田喜六○
梨本彌五郎○

○淡路守

〈水先案内ノ件〉

松岡德次郎○
小嶋源兵衛
應接掛
御藏掛
○御勘定方

先般ライスカ申立候、異船入津之節、水先案内之義ニ付、市中相糺し候處、別紙之通申立候ニ付、場所見分之上、居小屋幷早船諸具共御渡之積、居小屋之方積書爲差出候處、二个所ニ る金四拾壹兩永九拾四文四分相掛り候旨申立候ニ付、吟味仕候處、不相當之廉も相見に不申候間、右ニ る早々爲取掛、且給金之義、雇切之義ニ付、不相當ニも無之候間、壹人一个年、金貳拾五兩之積、拾壹人分合金貳百七拾五兩ニ る御雇上ケ、何レも異船御備金之内を以仕拂候樣可仕哉、早船之方ハ、御入用積差出し候上、吟味仕相伺可申候、

午二月

○別紙

口上書を以奉申上候、

一　今般異船入津之節、乘筋爲案内、押切水夫差出候ニ付ると、乘組人數拾壹人ニ る、押切船幷諸道具等迄、

御上様ゟ御下ヶ相成候様仕度、尤船ゟ川崎造こゐ、少し長手こいゐし、片側櫨(櫓)五枚宛、艫櫨(櫓)
壹枚都合拾壹人、壹人ニ付、一ヶ年給料金貳拾五兩宛ニ御雇切ニ被成下度候、
一　乘組人數溜所之義ゟ、山脊泊字押付際大凡北側に、居小家取建、曉七ッ半時、諸人數寄
り合、暮六ッ半時迄相詰居、夜分之義ゟ、定番貳人宛相殘し、餘ハ居宅に引取候様仕度奉存
候、
一　遠見番之義ゟ、字穴澗ゟ申處之後手高山に、毎日兩人宛差出置、東西洋中ニ、異船帆形
相見得次第下山致し、直様乘出し候様仕度奉存候、
但、同所之義ゟ、四方見渡し、殊ニ溜所居小屋ゟ、居あから山上見張居候事故、合圖ゟ行
屆キ候得ゟ、萬叉手都合宜敷、遠見番之者下山無之内、船用意相整、泙合ニ寄、下山之
人數不待合、乘出儀ゟ行屆可申奉存候、
一　船形之義ゟ、別紙(所見ナシ)麁繪圖相添奉差上候、船具等之義ゟ、御尋ニ隨可奉申上候、
一　押切船御製造之上、御下ヶ無之内ゟ、三半船こゐゟ間ニ合せ、御用向相勤申度奉存候、
一　乘組人數拾壹人ニ被　仰付候上ゟ、若右人數之内、病氣其外差支等有之節ゟ、相互ニ
代り人差出、聊差支ニ相成不申様可仕候、
前書之通申出候、且同人共身元引請之義ゟ、鰔澗町仁三郎引受候義ニ御座候間、御差支ニ
相成候様之儀有御座間敷奉存候間、此段取調奉申上候、以上、

午二月　　白鳥今右衛門(黒印)

水先案内ノ件

〔押切水夫總代幷身元引受人上申書〕(○異船諸書付所収)

○三月六日箱館奉行へ
(朱書)「午三月八日、御小印濟、」

○淡路守

○井上茂輔
○安間純之進
鈴木尙太郎
村上愛助○
向山榮五郎○
三田喜六○
梨本彌五郎○
松岡德次郎○
小嶋源兵衛○
應接掛
御藏掛
○御勘定方

異船入港之節、水先案内之儀、別帋之通申立、居小屋出來候迄ゟ、手限こゐ假小屋補理置候へとも、三半船之儀ゟ、壹ヶ

月金貳分ニゐ借受候事故、船賃御下ケ有之度旨申立、尤之次第ニ付、先般御評議相濟候御船出來候迄は、右船賃異船御備金之内を以、仕拂候様可仕哉、且爲相圖、螺貝御下ケ之義申立候處、御有合無之候間、取調、追ゐ相伺候様可仕候、此段相伺申候、

午三月

乍恐、以書付奉申上候、

一　異船當淵入津之節、乘筋爲案内、押切水夫願之通被　仰付候ニ付ゐて、明日明後日兩日ニ、假居小家幷三半船調度いゐし、來九日朝より乘出、案内仕度奉存候、尤居小家之義ハ、銘々ゟ木品莚繩等持出し、御普請御出來迄、雨露相凌候様可仕候得共、三半船之義ハ、脇方ゟ借受候事故、船賃ハ御下ケ被下置候様奉願上候、

一　山上見張所ゟ、白籏様之物ニゐ、居小家ニ相圖行屆候得ハ、見外し等ニ有之間敷被存候得共、御大切之御用筋故、萬々一霞霧之節ハ、相圖茂行屆兼候間、可相成御儀ニ被爲在候ハヽ、螺貝御下ケニ相成候様仕度奉存候、乍恐此段書付を以奉申上候、以上、

午三月六日

押切水夫惣代　與左衛門○（黒印、以下同シ）

同　辨藏○

御奉行所様

前書之通奉申上候間、奥印仕候、以上、

右人數身元引受人　仁三郎○

白鳥今右衛門○

以書付奉申上候、

一　押切船之義、當時三半船無之、三半造ドウカヘ船道具付ニゐ、一个月金貳分ニ借受、且居小家幷見張所共、今日中ニ諸事手都合ニ相成候間、明九日朝ゟ、異船相見得次第乘出、案内可仕旨申出候間、此段書付を以奉申上候、以上、

午三月八日　白鳥今右衛門○

福井藩士橋本左内（綱紀○景岳○變名桃井亮太郎・桃井伊織）同藩士横山猶藏（克壯）ニ旨ヲ授ケ、江戸ニ歸リ、京都ノ情勢ヲ同藩士中根靱負（師質○雪江）ニ報ゼシム。（三月九日、猶藏江戸ニ着ス。）

（福井藩士橋本左内書翰）（○春嶽文庫所藏本）

○二月二十九日江戸福井藩邸内中根靱負宛

横山猶藏ヲ歸府セシム

京都ニ傑出ノ人材ナシ

堀田輕蔑セラル

讒說流入辯駁ニ困難

謹裁、春暖之候御坐候處、先以
君公益御機嫌克被遊御座奉恐悦候、隨て御安健御奉職奉拜賀候、然ハ今般此表形勢、拙存等爲陳述、横山猶藏指出申候、委細當人口上ニて御聞取可被下候、此表之義ハ實に案外の事、一ハ喜、一ハ恐、其上傑出之人材無之、謀多口より出候故、屢變動浮搖、實ニ稅駕之處を不知ト奉存候、殊ふ當時之形勢東西雙方の嫌疑有之、直情徑行ニては先行盡指支、無據紆回二路を經、一言ニて可說破處も數十回ニ相成候位、別して諸公卿ニは過論無之候得共、貪欲之諸大夫邊、偏執心ゟ樣々の事申唱、書生の燄を煽候事不鮮、又從來關東御處置ふ御行屆無之廉も、此迄ハ鎭伏致居候得共、此度ハ一頓ニ湧出、其邊ゟ益々此般之一議決兼候義も有之、又堀閣の拙劣之爲大ニ輕蔑の意生、爲之、關東の言辭取信ニ不足ト申意味も相立、實ふ荊棘艱辛、固駑鈍故、籌策不得其方義トハ奉存候へ共、偖々歎息の至ニ御坐候、過日來人不知地へも種々周旋致試置候處、聊ヅヽハ其驗も有之候へ共、又してハ傍らゟ水を入此ニハ困申候、其上關東の列侯之奸猾家、內廷の無識者ゟ種々讒說流込、此邊辯駁も不容易、殊ふ御家之事も半信半疑之事故、甚以難爲說姿、日々疾首憔心罷在候、殊ニ可恐ハ公卿も御氣象有之御方ハ澤山ニ有之、議傳共、關東御役人ゟハ格別ニて、中々口才筆才も有之、應接位ニ事欠不申候へとも、迚も眞才實學治世安民之深謀宏圖ハ一人もなし、萬一仕

正論モシ勝タバ天下一變セン

正論勝タズンバ公武不和天下亂レン

正論ヲ達スルニハ太閤ノ內覽ヲ斥ケザルベカラズ

損候ても、徒ニ內輪の紛擾疑惑而已ニ可相成哉と痛心仕候、乍併、當時之模樣、此儘ニて相濟候とも不被思、吉凶善惡不可ト形ニ御坐候、先小拙案ニてハ、此後正論勝候ハヽ、西城之事、後見輔佐の事迄、
勅命ニ出、將軍家ニも上洛ニ相成、
主上と將軍トの御直談有之、且、後見輔弼の御方々ト、此表有志の公卿方と御熟評相立、實ニ天下の風を丕變仕、殆慶元の昔ニ返り、海防軍備等充分御調ニ可相成奉存候、此方ニ相成候ハヽ、縱令此度墨國へ御返答ハ少々手間取候とも、　神州の威外夷迄耀候手段ハ、逐々可相立奉存候、不正論相勝候ハヽ、今度之事ハ無難ニ可行候へ共、又不數年公武御不和相生し、邦內之亂とも可相成、關東ニ於て其際ニ英發果敢之御處置有之候へハ、夷狄之害ハ可免候へとも、恐ハ關東ハ例の奸吏充滿、一二之齋人ハ衆楚ニ可難敵奉存候、左すれバ眞誠ふ治世安民之略ありて、其位其任ニ被居候ハヽ、今度ハ轉禍爲福の機關トも可申、
東照宮之靈助トモ可申候へとも、不得其人中ハ、正不正半分雜りて、斑駁處置ト相成、益天下人心不固、不知所向樣ニ可陷歟ト心痛仕候、右正論を達候ニハ、何分鷹司太閤內覽宣旨之職ニ被居候てハ不被行勢、依て此邊色々運籌候者も有之候へとも、固極人臣之位ニ被居、殊七十之老翁ニて、

至尊こも鞠育之御勞
御見捨被遊兼候
御模樣、何分古今至難之一事こ御坐候、
西丸之事も、既ふ
内降可有之こ定居候處、爲此沮却仕候位、何分喜因惡革之御風儀故、非常之事ハ被行兼候、
朝廷之御政度ハ全然舊套のここて、一トして舊簿こなき事可行勢無御坐候、迚も政權此こ
歸候ハた、天下ハ忽夷狄之爲こ浸漁可被致奉存候、
朝廷こも何地迄も　德川家の事ハ厚被思召、此を變し、他こ御眷顧ハ無之鹽梅こ御坐候得
共、近來の夷情御分り無之ト、關東こてハ唯何もカも夷の申樣被成候トを御憤被成候御樣
子、透底
上意こ御無理ハ無之、誠こ臣子の身こ取、難有事共こ御坐候へとも、日月之光も雲霧之爲
こハ被支候如く、四外こ及候こ到りてハ、大こ模樣換居候、此甚殘念こ奉存候、何分畿内丈
の湊ハ行々可難開奉存候、此ハ一統御好不被成鹽梅、迂濶之二字ハ此地之持病、明確春日
讃岐守之如き人物こても、稍々此氣習を帶居申候、右ハ大方之見込こ御坐候、委細ハ猶藏
ゟ御聞取可被下候、此表こ定策さへ立候へハ、直樣引取可申候、夫迄滯留の積、乍去、

朝廷ノ政度ハ盡ク舊套ヲ脫セズ
迂濶ノ二字ハ京都ノ持病
定策立タバ歸府スベシ

君上思召次第如何トも可仕候間、尚又厚御伺取奉願候、所究小拙之手こてハ致方なし、吾
君御上洛こて御說倒可被遊勢こ可相運候、其節こ到り、公家こ被說動候武家のここてハ、
實ゟ天下之治亂安危、瞬息之間ふ地を轉し申候、嘸
東照宮こハ此節御子孫樣の御事こて、
神慮可被爲惱奉察上候、書不盡言、

二月廿九日　紀　百拜

雪　江　君

再伸、時下御自愛是祈、此地之模樣六か敷ハ候へ共、唯無譯打拂ト申論丈ハ防留、第一其根
元なる儒生輩盡說倒致申候、春日も多分同意こ落候へとも、此ハ通商ト申事嫌申候、至竟、
通商を嫌ならず、雜居を嫌候也、

慶永上洛ノ要アラン
打拂論ダケハ防止
繼嗣問題ニ就キ建白アルベシ

今般列侯の存、改て
勅問に相成候趣、定て可被仰出、乍去、別紙之勢必竟御定策と申迄之事ハ無之、
叡慮ハ被爲在候トモ、其通こも不參鹽梅こ御坐候間、叨りこ舊論御主張御坐候ゟ、今度ハ
打返し海防こも内政こも、　建儲至當と申事、御同志方樣被仰合、御建白御坐候ハた、此表

條約ヨリモ内地警備ガ先決問題

和戰ヲ決定シ勅問ニ答フルハ不可

第一等ノ策ナクンバ天下ニ益ナシ

費用ノ件

諸大夫ハ金ト道具ヲ喜ブ

之御評議大ニ可定奉存候、可相成ハ其組合大勢程宜ト奉存候、尤も御銘々様御別々の事ニて可然奉存候、此等御周旋願度奉存候、又關東ゟハ條約之事ヲ先ニ推願候ゟ、内地之警衛抔を先ニ被申候方可然筈之處、兎角其處へ參り兼候、此意味も御内々ニて一寸御周旋可被下、所歸此地ニてハ税駕する處御見詰不立故、先案の方强相成居候、夫を强て說付候と、墨ニ溺候歟と被疑候鹽梅ニ御坐候、何分今度和戰之二字を決し、

勅問ニ被答候ハ不宜、吳々和戰之二字共、非其人ハ不被行、其人ハ將軍家、々々々獨力ニて當時ハ難行屆多務故、依て副儲を設、四方八面手をくばり目を附、人臣々民を鼓舞勵動致し、其勢ニ乘じ、忽國勢を變得可申と申趣ニ被仰立、夷狄ハ可惡とハ申條、夷狄を惡候ゟ我を固め候事、先務と申條、又當時之勢、第一等の策なくしてハ、天下の安危存亡ニ益なき趣など御書取ニ相成、被仰立候ハと可然、其上之義ハ、先年以來逐々の建白ニ盡置候間、其を御熟覽願度と申様、簡古ニ致度存奉り候、尙猶藏へも申聞候、頓首、

彼此へ賄やら、例の御染筆やら、書籍買求やらニて、五十金計遣切申候、今後も如何か不被計候間、又五十金ニても百金ニても用意ニ御廻し可被下候、猶藏へなら切手ニて頂度候、此地の諸大夫抔ハ金子も喜候へとも、又道具を喜候、此ハ御客を拵賣付候鹽梅、因て賄ニ

堤五市郎ヲ用ユベシ

青蓮院宮御添書ノ件

ハ御國ゟ品を取寄可申候、東西之情不通してハ事成兼候、此後夫方ゟ密使ニ被遣候ハと、堤五市郎(正誼)可然候、此者ニハ能く國家之御大事也ト被仰含候へハ、他言ハ不仕、殊膽氣も有之候間、隨分一人ニて出懸申候、足も丈夫ニ御坐候、猶藏ハ急歩ニ間ニ合不申候、近來ハ憤激感慨ニて宜候へとも、ちと事ニ遲れ申候、野淵(野村遠藏)ニハ大分困申候、乍去、餘程苦心仕、藥籠中之物ニ致し使こなし申候、然長留ハ不宜ニ付、以計策御國へ歸申候、又今度青蓮院様御添書之事、猶藏迄申含候、此ハ先方御安心之爲之御趣向ニ御坐候間、御文面等ハ何も入不申、御目見相願候ハと、何卒恐多候へとも、相叶候様ト申位ニて宜、其邊ハ先方寵臣ニ爲含置申候、月日ハ月計ニて、三月ト被成下候様奉願候、廣橋も同前、二條家へハ御家老ゟニて(勝五郎)も宜御坐候、服部を使候と兎角世上ニ夥流布困候故、此ハ一向使不申候、昨夜前、村巳ゟ(村田巳三郎)近藤良介(ヲ)を遣し探索方ニ相成居候處、第一學問の講究を始、一切手寄監察ニ、監察之途を說爲聞候處、大ニ驚服、實ゟ此迄調者ニ、其程の巧手ハ不存ト申、茫然ト致居候、此ハ裏手ニて關東方へ附候積ニ御坐候、

猶藏ニハ十金相渡申候、歸途不足も候ハと、又御渡可被下候、幸吉ハ至極間ニ合、殊ニ近來此地の塩梅覺宜候、依て直ニ猶藏附歸り候様申附置候、錦地の御用辨次第、猶藏・幸吉共御

返し可被下候、

以早爲上申候、愛軒(石原甚十郎)抔へも宜呈書も仕兼候、留守御小屋之處も御注意奉願候、定て不遠城州着可有之候、其前ニハ移轉ニ可相成、左候節萬端御配意奉願候、平圓(平岡圓四郎)ニも宜く、其外一々不能詳悉、駑馬負重擔、羸羊遇猛虎心地ニ御坐候、可憐、

建儲問題ニ關スル或人ノ意見

建儲之事ニ付、或人の考、内々認上候、

西城建儲之儀は、誠當今之急務、其譯は去丑年亞墨利加渡來之節ゟ今日迄、外國之御處置も色々御坐候得とも、阿部(正弘)殿御勤中ニハ阿部殿存意通之事出來、堀田(正睦)殿御執權後ハ堀田殿存意通之事出來、近頃伊賀(松平忠固)殿御執權之御威光盛ニ相成候後ハ、伊賀殿御所存通ニ相成、種々前後不揃之事も有之、其趣意柄も時ニ從ひ轉變仕候故、自ら外國ニても御所置を信不申、遂ニ不遜之辭等申出候樣相成候事も有之候事、此も上ニ萬機御總括の御方御坐候ハゝ、時々の御轉變ハ無之筈、御役人ハ折々御人換候得共、大將軍ハ其氣遣無之事、

京師への御指向方も右同樣、時之御役人存意を以て取計候故、折々模樣相換り、不敬之事も出來候事、將軍家ニハ御承知も無之事ニハ候へとも、御役人ハ成丈推付候を以て、關東之御威光盛樣ニ相心得申候事、此之爲ニも名分義利等充分御明知被遊候將軍樣ニ被爲渡

ラバ公武和熟天下泰平ナラン

將軍聰明ナ

候ハゝ、右患も忽相止、公武共御和熟御融通ニ相成、天下益太平無事之基相立可申事、

五六萬石之閣老位、叨りニ威權ニ傲候樣相成候ハゝ、仙臺・薩摩其外歴々の大藩ゟ蔑視可致、且不平之心可起、さすれは　皇國之人心不和之端となり、戰爭抔ニハ大ニ御損害と奉存候、永久安全、奉安

叡慮れとの御趣意ならハ、何分右之處關東ニて遵奉可申上ハ勿論なれとも、執政の私ニより不遵奉事故、夫を遵奉させ候爲ニ、建儲之御一事御世話被下度、其上にてなれば、列藩ニて如何樣ニも心配行屆可申候事、

〔橋本左内京都報告書〕(○春嶽文庫所藏本)

○二月二十九日中根報負へ

「人物評」(卷裏)

「過日」(朱書)

主上御意ニ、政通(太閤名)ハ父の如ク思ふ〜ニ、存の外也ト、被仰候よ〜、其後、太閤大ニ失勢候ト申事、」

主上御義ハ、御壯年ニも被爲在、　御英明之沙汰ハ伺居候へ共、内實ハ如何ト恐多も疑居候處、實ニ奉驚伏候事共、數件御坐候、此節世上取沙汰之事共、一々御耳ニ入居候よ〜、此ハ青蓮君ゟ之樣子、此節ハ夜分御忍ニて、侍從も不知位、内侍所へ御日參被遊候よ〜、過日ハ東坊城太閤ニ恐

主上御英明ノ御事實世上ノ取沙汰御承知内侍所ヘ御日參

東坊城ヲ御笑叱

此度ハ皇夷ノ爭ナリ承久度ノ事ナシ

九條關白ヲ御鞭策

傳奏ノ賄賂ヲ御嚴禁

舊記御研究

御酒モ御節減

時計ノタメニ外國ト通商セズ

鷹司太閤ノ人物評

れ、賄賂荒取、剩へ乍恐も、今度關東之申如を不被成時ハ、承久之後鳥羽帝之事可恐抔申候處、大ニ御笑叱、其ハ間違也、彼ハ武家ニ歸一たる權威　御所へ御取返の御趣向、今度ハ皇國之御一大事故、（朱書）當時正論家之眼目、此一語ニ盡居申候、列侯之存御尋も、此邊之御見込ニ御坐候、」皇國人心之所歸ニて處置致候積、依て相考候へと、彼ハ內地ニて公武之爭、此度ハ　皇夷之爭ニ候、必承久度之事無之間安心可申、其ニても强て其事荒行候ハヽ、其時ハ不足畏ト御垂諭被游候よ一、此御一語の御德音、實ふ鳳鳴龍吟、爲吾神州增光候事萬々、吾儕一命位ハ實ニ不足惜ト奉存候、又九條關白頻ニ有志家ト太閤之間ニ惱被居候荒、種々御鞭策御坐候よ一、

又傳奏ハ兎角賄賂ニ流候荒御傳聞、每々御直々御召寄、一々御叱呵被遊候よ一、又深夜迄此節ハ舊記等之穿鑿被仰付、　御寢も餘程御遲き之ニ相成候よ一、又、御酒も、此節ハ御減被遊候よし、一說ニハ、御嗜おれど御止ニ相成候を申居、　又一說ニ、鷹右府ふ交易通商致候ト、時計の類夥舶來仕、御自由ニ相成候を被申候處、此方ニも侍兒有之間、時計の爲ニハ、交易不出來ト被　仰候よ一、

鷹太閤ハ爲人怜悧通曉圓熟、殊ニ三十年來の執權故威望相具、（朱書）「此水老公も被欺候鹽梅、密書の漏レタも鷹ふト申事、」

至尊ニも御幼稚ふの御依賴ニて、父の如く、師の如被　思召候よし、依て天下を睥睨被致、才智威德、海內吾右ニ出る者なしと被思候よし、又先入爲主僻、又貪利之御人のよし、又平日御血統御自慢ニて、

至尊ふも我ハ良血脈なりなど、閨女ニ被矜候よし、東山の御胤にて、藤家ニハあらざるよし、　又此迄關東へハ頻ニ被媚、賄賂御取被成、近來許多の蓄財出來候よし、大坂ニ預有之趣、平日關東上使之節ハ、傳奏用人土佐屋敷ニて應接有之候が當前之手始ニ候處、鷹ノ用人大津迄忍出居、大津ニて內情逐一聞糺歸候由、依て何時ニても關東之事ハ鷹家へ先入致し候よし、又公卿ニてハ、御附武家所司代の外ハ武家ト不交定の所、鷹家ふハ町奉行手先へ迄往來致候よし、太閤御了簡ハ、堀田申處一々尤なり、如此相成候へハ、此方存じと一々符合ト被申候由、

堀田トノ關係ニ就テ

主上御震怒

關東ふ此度の事ニ付、「（朱書）兎角遷延ニ付、不能已、畫策ニ相成候鹽梅、」主上へ一萬兩、鷹へ一萬兩、傳奏へ一萬兩可進旨、川路より申出候よし、兩傳ハ少々受候よし、鷹ハ事濟迄預置ト申候よし、

主上ハ、賣國の賊也と御怒被遊候よし、此事大ニ堀田始の名を汚申候、此事不出前ハ、堀田ハ、棄り居候得とも、川路・岩瀨丈ハ精々彌縫周旋致置候て、隨分沙汰佳也ニ有之候處、此一

件有之候後ハ、大ニ不評判ニて、今度之事首尾克爲遂候ハヽ、必堀ハ一萬石之御加增あるへく、川・岩ハ大名ニなるべし、彼等の爲ニ神州を幣ニハ出來不申ト、例の正論家憤激致居候、又堀田之說ニ、此事能爲遂候ハヽ、開闢已來の美事なりと被申候よし、此事大ニ故障ニ相成申候、不得已形勢ト申さバ聞候へとも、此を喜候ハ、和魂ニ非らすト被申居候、堀田ハ墨使之才を被賞候處、議奏之說ニ、日本ニも責て其半分位之智者ありて應接方ニ成居候ハヽ、此迄不都合ハ無之筈ト被罵候よし、又如此一々相許候ハヽ、十年位は無事にて候哉と被尋候處、私一生ハ無難と被對候よし、然處德大寺殿被申候ニ、足下の命ハ何年迄なる歟、長短難計ト一統被笑候由、如右近來ハ愚弄之姿有之候よし、堀田每々墨使ニハ格別迷惑を不仕候へとも、江戶諸侯ト京都公卿ニハ困候ト被申候處、此も却て笑を助候樣子、其他色々如此不都合有之痛心ニ御坐候、

（朱書）「勅命　叡慮等出候時は、川・岩扣居候よし、」

應接之節ハ、堀閣一向寡言のよし、初會ハ所司代願ニて川・岩兩人出候よし、岩一人ニて重ニ辨附候塩梅、

御所方ハ、傳奏兩人ハ好人物ト申內、廣橋ハ兩端觀望、東坊城、鷹ノ引用故關東方ト申說ハ、俗才ニてかしこき由、依て御目付役ニ議奏一統被指加候よし、議奏ハ何れも正論家、其內久我・萬里・德大ハ魁者ニ御坐候、

傳奏議奏ノ人物評

青蓮院宮ノ御人物

三國大學鷹司政通ヲ直諫ス

九條家ニモ有志者アリ

（朱書）「圈ト批点ト能御見分、双方之所爭所長此ニ御坐候、」

人物論

青蓮院宮樣ニハ、南都ニ被爲居候時ハ、狂宮の名有之、于今俗人ハ勿論、有志ニても信し不申候、乍去英爽慷慨、中々不出世の御模樣、謀略ハ如何トモ難申候得共、何分御人材ニ相違無之、此御方一番倚賴ニ相成候、此頃

主上之御論ハ、　神州を夷狄ニ爲辱候てハ不相成旨、特立して被仰候よし、此も宮之後綱大分有之塩梅、乍去世ニ知る人少し、宮ハ粟田ニてハ御遠方故歟、此頃ハ始終御里坊ニ被爲入候、（此ハ御所の御裏手、梨木町、）

三國ハ當時鷹公の事感慨致し直諫致候由、（實司家筆六夫）猶藏（脫出）も薄々承知、乍去眞忠歟、又ハ爲名歟ハ不被存候、鷹ノ御家來ニ小林越前守ト申者も直諫切諍申上候由、

鷹ノ御子達も被申候よし、久我公も婿故切ニ被申候よし、乍去凜然御主張之由、

九條の御家來ニも有志の者も御坐候、逐々要路へ手筋附申候、決して一日も徒然ニハ暮し不申候、

何事も筆端ニ盡兼申候、

森寺常安ノ斡旋

森寺(常安)も隨分能骨折吳候、土州へ能々御厚禮可被仰下候、爲天下聊周旋出來候も、御家之事の疑念を打破候も、土州の功ニ候、吳々御序ニ土侯ゟ、尙又厚三條公迄御禮被仰遣候樣ニ願度候、以上、

○二月二十九日、橋本左内ガ横山猶藏ニ託シタル京都報告書ハ、上ニ掲グルモノノ外、本月十一日、左内ガ内大臣三條實萬ニ會見ノ條、竝ニ二十日、勘定奉行川路聖謨ガ入道尊融親王ニ謁スルノ條下ニ、各其ノ一部分ヲ載セタリ。左内ノ上京後ノ行動ト、京都ノ情勢ヲ知ルニハ、全部ヲ併セ看ルヲ要ス。參考ノタメ茲ニ附記ス。

横山猶藏左内ノ書ヲ齎ラス

〔昨夢紀事〕

三月九日、橋本左内と共に上京せし横山猶藏、去月廿九日彼表を發足して、今日午刻過て歸り來れり、左内ゟの書狀を指出して、さていへるハ、京地の形勢ハ左内か呈書に認めたる如く、此度の事ハ備中殿十分に蔑視を受けられたる所より、一ト渡りの事を聞上げられたる儘にて打棄おかれ候て、いつ果へきとも見えさる有樣おから、堂上方ハ堂上方にて日夜の集會評定、關東方ハ夫か爲に關東方にて、備中殿初晝夜となく旅亭に評議を凝さるゝ迄にて、公武の調和更ニ出來不申、夫故ニ西城の一件なとも、堂上にても御沙汰宜趣なから、其儘に遷延して、備中殿の歸京の程も、更にいつ比とも辨へかたく候ヘ、公の御歸國も次第に近く被爲成候を、西東共に斯る勢にてハ如何被爲成候思召なるにや、左内も當時力を盡すへき樣もなく候得は、罷歸候半歟、將た甲斐なくとも京地に在りて、事の体を伺ひ見てなるへき程の事を周旋もや仕るへき、此上ハ青蓮院の法親王ハ、　公の御直書をたに持參仕候はゝ、拜謁も可被仰付との御内沙汰も有之、又御樞機なる縉紳家へも、御直書を被遣なは、夫をよすかに取入りて、　天意の御内實をも相探り見申へくもや、西城の事なとハ於關東御同志の諸侯を御かたらひ有りて、御多人數にて仰上られなハ、京地の聞えもよろしかるへし、何事も　公武の御折合出來兼候所より、將來の見込も定りかたく候へハ、一ト先歸府も仕へき哉、其旨を伺ひ奉る爲に、猶藏をさし下したる趣をも申述たり、左内よりの書狀如左、

左内ノ進止ニ就テ慶永ノ命ヲ請フ

○左内ヨリ中根靱負宛ノ二月二十九日付書翰、及京都報告書ハ、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

左内之書狀、幷猶藏か申所を聞て、事に關かる面々もいかにかハすへきと、各望洋の歎を發したり、此日、　公ニハ、御兼約にて阿波殿へ被爲入、夜に入りて御歸殿おりしかハ、直に右狀も入御覽、猶藏を以申上る處も及披露しかハ、　公にも、京師の御都合如何と待せ給ひし折柄、形勢如此ある故、殆御錯愕之御儀ニる、種々御考被爲在しに、京師之事ハ隔境之事と申、左内も被遣置候へハ、其上なさるへき樣も被爲在ねと、此表閣中の模樣、近頃は御手入もなけれハ、如何あるらん、降　勅之有無も風説まてにて、取留たる事もなけれハ、

慶永左内ノ情報ヲ覽ル

慶永水野忠德ト京報ニ就キ談ズ

先ッ廟堂の近況を御探索ありて、其勢ひによりて又御工夫も可被遊と御相談の爲、例の水筑州を可被仰遣とおほし定め給へり、

三月十日、今朝仰によりて、田安御舘退出ゟ此御館へ參るへき旨を、師質ゟ水筑州へ申入たりしに、今日ハ安府四ッ谷の邸にて文武之考課ある故、夫を見分として早朝より被罷越、其事畢る直ニ參られたる由ニて、暮近くありて參上あり、扣所ニる御懸合出て、頓て　公御逢あり、筑州の事なれハとて、先日來の左内か狀共其儘に御見せありて、意見之趣を御尋あり、書面之條々眉を顰めて披見の上、何か彼是之失策にて、遷延之由にハ承り候得とも、是程之儀とも不奉存、豈圖らんやと愕然たる有様にて、御答ハ何とも申上兼候との事にて、良久瞑目沈吟し、備中殿の事候へハ、斯くあらんかと兼る恐懼いたし候ひしか、果してヶ様之次第と相成候ゑ、關東の御耻辱無此上、扨々殘念千萬の事に候と、涙をハラ〳〵と落され、扨申上られしハ、筑後守當時の勤柄ニるハせんすべも候はす、又閣中の事情も承知仕りかたく候へハ、策略とてハ勿論あるへくも候ハす、乍併深く相考候に、京師裏面の狀情如此なる事を、海防懸の面々なと委敷知て候はんか難計候へハ、御存之同志永井玄蕃頭儀ハ決る麁忽無之者候へハ、極密此者へ謀り見候より外に思ひよりたる事ハ候はすと申上る、　公も御考之處、夫もよからんと思召御旨ゆへ、夫ニ付てハ此書面無てハ適ひ

堀田ノ失敗ハ殘念千萬

永井尙志ト相談セン

永井尙志京報ヲ得テ痛歎ス

かたく候得とも、書中彼是嫌疑に亘り忌諱に觸候條も相見え候へハ、此條々を被除候る御寫しにあり、筑後守へ御渡し下さるへし、夫もて内密計議仕り見可申旨を申上らる、猶此餘種々御相談ありて、夜更て退出ゑ、

三月十一日、昨夜筑州の申上られたる如く、左内ゟ遣したる書中忌疑を省略して寫し竟へて、未過る比より師質水筑州の許へもて行たり、筑州對面ありて申されしハ、今朝於營中玄蕃に逢ひ承りたるに、何分彼地の模様第一

天意何とも難計けれは、謀の出る處を知らす、御答の御催促ハ猶以なすへからす、唯惜むへき光陰を空々閑過、實に歎息の極る由を申越し、且墨吏も出府すへけれと、京地ゟさし定めて申來らん迄ハ、いかに申立るとも約束かましき事ハ致すましき由嚴敷抑止申越、將諸侯之赤心　勅問之儀、一應ハ於京地備中殿ゟ御答申上濟たる由なれとも、猶此表へも申來りし故、卽舊冬之建議共取揃へ急使にて廻したり、夫にて濟めハ誠によし、兎角甚六ヶ敷様子にハ聞ゆれとも、此地にてハ如何にともせんすへなし、畢竟大全權の備中殿、肱股腹心の左衞門・肥後を引率しての上京にて、萬端於彼地奏答裁決事濟むへきの計畫故、關東ゟ仕向る事迚ハ一事もなく、又隔地の事にしあれハ見込も付かたく、唯々申來りし事の受拂ひをなす迄にて、一向無術なる由を歎息せし故、密ニ　太守君之御盛意を申聞たり

慶永ノ盛意ヲ語ル

しに、大感激せる故に猶申談せしハ、先日來、越公の手々後宮の始末、外藩の事情等海防懸の耳に入りて、參考の助になりたる事數多なり、越公の此事ある別に爲にする事あるにあらす、唯天下の爲にせらるゝ事にて、實に忠誠の至候へと、是を惡察邪推すれハ、又如何樣ともとりなすへけれハ、彼公におゐても此邊ハ大に懸念せらるゝ趣なり、乍去、至誠息ミ難く種々勤勞有之事にて、夫を周旋する吾輩におゐても、機事を洩し密事を顯はす樣成事の出來てハ、彼公へ對し不信不義なる而已ならす、吾輩におゐて天下一箇の忠良候を失ふ其罪無所遁、此ハ如何おもへるやと申せしかハ、玄蕃のいへるハ、夫は申さるゝ迄もなし、彼公の爲に闇に援助を得たる事數件にして感謝餘りあるに、いかてか彼公の爲によからぬ事を仕出すへきと誓つて申せし故に、さらハかく〳〵の密書あり申下して披見さすへきかといひしに、玄蕃夫ハ何卒して見たけれとも見るにつけてハ申置度は、其書面己レ一人にて見たりとて何の益もあるましけれハ、いつれに同志の面々へハ披見さすへき事あり、さしても宜きかと念を推したりし故、夫ハ前にもいへる事の心たに違ふ事なくハ何かハ苦しかるへき、書面を見られたる上にては、見込の處も聞かまほしといひしに、今さし當りて定見の立へき事とも覺えねと、如何にしても此地にてハ委敷知りてもせんかたなけれハ、知りて益あるへき事共ハ、京地へ申遣はすの外はあらしかとおもへるよしなれハ、

青蓮院宮ノコト

海防掛ヲ召シ京情ヲ告グベシ

夫ハ兎も角も披見せし上に、談すへきよしを語られたるよしなれは、師質申けるハ、此密書の事此地にて御承知なりとて、なさるべき樣はなきとの御事はさもあるへきにや、夫に付、猶又寡君の仰の候ひき、筑州は田安人なる故、公の御事をかくいへるなり、夫ハ書中にも見たる青蓮院法親王の御事にる候、殊の外至尊へ御思尺にて、御說も行はれ候やに候へハ、此宮へ親炙いたし候ハヽ、事の次第により

天意の程も伺ひ奉られましきものにもあらす、此宮へ左内拜謁の義ハ、書中にも片端見え、尙又猶藏か口上にハ、宮にハ主人の添翰たに持參せハ、謁見も許さるへき旨に候へ共、寡君にハ別に御用もなく候へハ、御書も遣はされぬ御心構に候得と、若又少にても大家の御爲御益あるへきかとの御見込も候はんにハ、宮へ御呈書こゐ、左内を指出候ゐも宜候が、此事を鴻臚君（水戸齊昭）等へ御傳へありたきことの御事おりと申せしかハ、筑州左樣に被成候へハ、同し御周旋も猶更公然たる御事となり、御都合もよろしからんと被申故、師質、如何にも公正ならん樣に願はしく候へハ、なるべき事ならハ、寡君之御手許へ海防御掛の衆御呼立にて、京地の模樣ハ如此、徒らに新聞を樂むには無之、時宜ニより天下の御爲にもなるへき事もあらんかとおもへハなり、書面の樣ニてハ大家も頗御困難の御儀と察せられたり、例

なれハ直に閣老衆へ持參すへき事なれと、餘りに備中殿の噂も認あれハ、如何にも閣老衆へハ、指出兼るなれハ、各方へ見する程に、參考の一助共ならんにハ本懷の至りあり、閣老衆の披見に入れられん事ハ、各方の斟酌に任するとの仰にて、公然と書面共御渡ありてハ如何あらん、されと左内の探索せる事の關東へ聞えたると、縉紳家へ知られさらは、唯さへ疑念勝なる折なれハ、もはや堂上へ立入る事も適ひかたくて、寡君迄反問の汚名ともならせられんかとの懸念も候と申せしかハ、筑州申さるにハ、如何にも其御策ハよろしけれと、懸念も亦餘義なく聞えたり、兎もあれ、極密の所を玄蕃と熟談に及ひて、其上に御左右申上候半と御請に及はれたり、事の次手に、筑州の申さるゝは、西城の御事を玄蕃か土岐攝津へ申談じて、攝津か舊僚なれハ、平岡丹波へいたく及議論承り見たるに、未たいつれと定まりたる樣にハ伺ひ知らぬよし、丹州抔も初の程は兩端に定めかねしかと、此比になりてハ、御年長の御方あらてハ適ふましくおもへるよしを申されたるとそ、海防懸の面々いつれも頻に閣老へ申立て、内　勅なと無きほとにと主張すれと、上・關の兩閣共に、備中殿歸府の上あならてハ決して定議ハなきよしを申されて、いつれも憤激に堪へさるよし、永鴻臚ハ餘りに極論に及ひて、伊賀殿も怒氣を含まれたる程の事なれば、聊其手を緩るめてありしを、又大和を責付たれと、是もいつも〳〵も厚く含ませてハ居れと、備中殿歸府なくてハ適はさるよしのミを申されしとそ、是ハ伊賀殿へ申て、纔四日を隔てゝの事なり、其切迫の情おもひやるへしと物語られたり、

〔福井藩士近藤了介書翰〕〇橋本左内全集所收

○二月二十九日橋本左内宛

夜前は緩々御内話被成下、大慶之至に奉存候、陳者愈御國へ御出途之儀御延引にて、關東の方へ猶藏樣御首途に相成候趣、遠路の處御苦勞に奉存候、則夜前御投策一件、今朝より如何可致哉と配慮可仕、彌一面會仕度候間、尚又今一應御熟考相願度候得共、承り候へば御認中の由故、業と指控罷在候、右可然御指揮の程所希候、書外拜謁、文縮如茲に御座候、頓首、

二月廿九日　　近藤了介

橋本尊公　　百拜

御許へ

二啓、本文の趣、上堂之上可相伺筈に御座候へども、業と以書中御伺申上候、且、此御國産微少の至に御坐候へども、御承知被成下候通、到て輕易にて、何一つ賄不申、千里獨行の御用途にて、不參屆御義共、幾重にも御海宥之程奉希上候、可祝、

晦日丙子幕府、大目付堀利堅伊豆守ヲ留守居ニ、西丸目付黑川左中盛泰○後備中守ヲ目付ニ、徒頭大井十太郎信道○後美濃守ヲ西丸目付ニ補ス。

〔水戸藩御城書海防部〕○公爵德川圀順所藏本

二月晦日、

御留守居

堀利堅

御目付

黑川左中

一色邦之輔跡

西丸御目付

黑川左中跡

大井十太郎

右御直ニ被　仰含之候、

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本

二月晦日、

御座間

御役替

大目付

堀伊豆守

西丸御目付

黑川左中

御徒頭

大井十太郎

御留守居

御持之頭

河尻式部少輔跡

御目付

御先手

永井能登守跡

御留守居番

水野岩之丞跡

西丸御目付

御徒頭

大井十太郎跡

安政五年二月晦日

御座間

大目付

堀伊豆守

御留守居番

水野岩之丞

西丸御目付

黑川左中

御書院番

戸川伊豆守組與頭

福王忠左衛門

御小納戸

小出助四郎

御徒頭

大井十太郎

御小性組

大久保豐後守組

高尾惣十郎

右、於　御前被　仰付之、

○溫恭院殿御實紀・高麗環雜記、二月晦日ノ條ニモ、マタ同一内容ノ記事アリ。

〔松平忠固日記〕○子爵溜澤榮一所藏本

二月晦日、○中略、

一御座間御上段　御着座、御側衆左右ニゐ、大和殿（久世廣周・老中）御上段ニ被出、今朝　御名代之言上相濟退引、再御側衆左右ニゐ、月番御柱際外、如例着座、月番被窺　御前、三人目大和殿ニ會尺、同人ゟ若年寄ニ會尺ニゐ、左之通壹人宛御用人出ル、

御留守居　　大目付　堀伊豆守

御持之頭　河尻式部少輔跡　　御留守居番　水野岩之丞

御留守居番　水野岩之丞跡　　御小納戸　小出助四郎

御先手　永井能登守跡　　御書院番　戸川伊豆守組與頭　福王忠左衛門

御目付　一色邦之輔跡　　西丸御目付　黑川左中跡

御徒頭　大井十太郎跡　　西丸御目付　黑川左中　　御徒頭　大井十太郎

右、夫々　御直ニ被　仰含、月番披露御取合等例之通相濟退去、何茂横　御目見、畢ゐ引、

〔川越藩日帳〕○伯爵松平直之所藏本

三月十六日、

一御留守居加藤伯耆守殿ゟ御呼出ニ付、小笠原源次罷出候所、今般堀伊豆守殿留守居被　仰付候ニ付、五料御關所御印鑑壹通、用人伊藤佐兵衛を以御渡之、

御小性組　大久保豐後守組　高尾惣十郎

堀伊豆守儀、此度拙者共同役被　仰付候、依之關所手判、從當月廿三日可致加印候間、五料關所此印形引合可相通旨、御申付可有之候、以上、

安政五年

安政五年二月晦日

池田甲斐守（長順、留守居）印　堀伊豆守印